

らぬ。此の二迷執を斷つ顯教の菩薩は三界に居るこゝが克きずして界外に放たれる。又た有執を斷つて卍字命息を疵つけた二乗の人も齊しく三界の内には住ふこゝを許されずして暗い寂しい無餘涅槃の幽趣に囚はれて出づるこゝが克きぬ。顯の菩薩や二乗は證果を得たりこゝして喜ぶも實は阿字の大意匠に背く反逆人である。證果は罪過である。が之れこゝても又た阿字の意匠には漏れぬので、卍字命息に背くものは涅槃に逐はれ或は幽囚せらるべし。云ふ豫ての規定に服従してをるものである。何に事も阿字の意匠を避けるこゝは克きぬ。規定に隨はねばならぬ。

### 眞言の功德

吾が高祖御在世の終りの年、承和元年の十一月に、宮中の眞言院で正月の八日より一七日の間、玉體安穩、寶祚遠長の御爲めに御修法をなされたいと云ふこゝを奏上になりました。其の奏狀の中に、

今講し奉るこゝろの最勝王經はたゞ其の文を読み、其の義を談ずるも曾つて法に依つて像を畫き壇を結んで修行せざれば、甘露の義を演説するこゝを聞くも、恐く醍醐の味を嘗めるこゝを得ざらん。

と云ふこゝがあります。元來宮中に於きましては持統天皇の七年冬十月に仁王講、最勝講の二つの式を立て、御經の講義をせられるこゝになつて居りました。其の講師には各宗の碩徳方が召された

もので、勿論吾が高祖も其の講師に選ばれて其れ等の御經を講じられたのでありますが、御經を講じたり演説したりして何の利益がありますか。首楞嚴經には多く聞くも修行せざれば聞かざるも同じである。食物の話をして居つても終に腹は膨くれぬやうなものであるとあります。又た高祖も法を説くこゝは病源を説き、藥草の效能を説くやうなもので、病人に病源や藥の效能を説いたこゝろで何の效驗もあるものでないといはれてあります。然るに寺々の僧たちは謂ふまでもなく、畏くも宮中におかれましては御經を講演するのが佛の道であると思つてをられたのでありまして、其れを吾が高祖は甘露の義理を聞くこゝは能きやうが、醍醐の味を嘗めるこゝは能きぬと歎かれたのであります。

多く物事を知つて居つても愚者は那處までも愚人でありませんか、物事を知るこゝは少くも賢者は那處までも賢者であります。

さて高祖が醍醐といはれたのは何であるかといふも、オンアボーギャミカアピラウンケンミかいふ眞言であります。其の眞言に味がある。俄かに聞くも妙に想はれますが、眞言には味があるばかりでない。響もあります。色もあります。香もあります。形があります。特に強い力をも有つてをるのであります。鳥の鳴く聲や狗の吠える聲は決して同じではありません。といひましても眞言も依然聲に相違はないのであります。其の聲といふものがなか／＼恐ろしい力があるのであります。

ハツ、ハツハツといふ笑い聲を聞きます。如何にも嬉しそうな氣の暢び／＼する心地がするであ



りまじやう。ヤツ、いふ聲を聞きます。失策つた。愕いた。情ない。いふ感じがいたします。マア、いひます。歎はしい。つらい。頼りない。感じがします。ウウ、いひます。痛い。苦しい。あき、した。感じがいたします。エエ、いひます。面倒な。大儀な。嫌やな。顔つきまでも見える。ではありません。か。又た。鹽辛い。いへば。喉が。渴く。梅干。いへば。酸い。唾氣が。たまる。甘い。いへば。甘い。唾氣が出る。であります。やう。聲。いふものは。一通りの。響ばかりする者では。ありません。又た。人が。怒つても。額に。青筋を。たて。たばかりでは。怖ろしい。はないが。莫迦。ツミ。怒鳴られる。冷や。つ。する。重い。物を。動か。そう。して。も。無言では。決して。動く。ものでない。其れが。聲を。揃へて。エー。ヤツ。いふ。存外。軽く。動きます。相撲取が。今。一力。いふ。ところで。互ひに。力味。んで。を。る。が。両方。も。動か。ぬ。が。一力。入れる。時に。エツ。いふ。聲。が。かゝ。る。敵手。を。仆。す。こ。こ。が。能。き。ま。す。此。の。エツ。いふ。一。聲。が。出。ね。ば。さ。う。し。て。も。勝。負。は。つ。か。ぬ。も。の。で。あ。り。ま。す。劔。術。や。柔。術。で。も。其。の。通。り。で。敵。手。の。隙。を。見。出。し。た。ま。き。に。エツ。いふ。懸。聲。を。し。ま。す。此。の。聲。の。かゝ。ら。ぬ。時。は。決。し。て。敵。を。撲。つ。こ。こ。は。能。き。ま。せ。ぬ。が。な。かゝ。此。の。聲。が。かゝ。ら。ん。の。で。あ。り。ま。す。真。劔。を。提。げ。て。人。を。切。る。こ。も。で。も。さ。う。で。あ。り。ま。し。て。聲。を。か。け。な。ん。だ。な。ら。ば。淺。い。底。を。つ。け。る。位。の。こ。こ。で。存。分。切。り。放。す。こ。こ。は。能。き。ぬ。さ。う。で。あ。り。ま。す。普。通。の。聲。で。も。此。れ。だ。け。の。力。の。あ。る。こ。こ。は。争。は。れ。ま。す。ま。い。こ。想。ひ。ま。す。し。て。見。ま。す。れ。ば。ハツ。エツ。アア、ウウ、エエ、ヤツ。オツ。いふ。聲。は。外。で。は。あ。り。ま。せ。ぬ。依。然。真。言。な。の。で。あ。り。ま。す。我。れ、も。識。ら。ず、真。言。を。唱。へ。て。を。る。の。で。真。言。を。唱。へ。ず。に。は。何。事。も。能。き。ぬ。の。で。あ。り。ま。す。何。事。を。爲。ま。し。て。も。真。言。を。唱。へ。ず。に。爲。た。な。ら。ば。其。の。事。は。成。就。せ。ぬ。の。で。あ。り。ま。す。

淨土真宗の門徒達が南無阿彌陀佛の六字の名號を唱へたならば淨土に參れる。法華の同行達が南無妙法蓮華經の七字の題を唱へたら七難を滅して成佛が能きる。耶蘇教の信徒がアーメンを唱へて天國へ行ける。いふのであります。同行門徒たちこそ深く其れを信じてをるから不思議も想ひます。まいが考へて見る。少し變ではあります。まいか。名號や題目を唱へて淨土へ往ける。成佛が能きる。いふ。こ。こ。は。怪。し。く。は。あ。り。ま。せ。ん。か。併。し。實。は。其。れ。が。不。思。議。で。も。な。ん。で。も。な。い。の。で。あ。り。ま。す。七。字。の。名。號。は。淨。土。參。り。の。真。言。で。あ。る。か。ら。で。題。目。は。成。佛。の。能。き。る。真。言。で。あ。る。か。ら。で。あ。り。ま。す。親。鸞。上。人。は。三。部。の。經。の。尊。き。御。經。文。を。讀。誦。す。る。よ。り。も。七。字。の。名。號。が。淨。土。往。生。の。近。道。で。あ。る。こ。こ。に。せ。ら。れ。た。の。も。日。蓮。上。人。が。法。華。八。軸。の。御。經。文。の。德。は。たゞ。八。字。の。題。目。に。在。り。ま。仰。せ。ら。れ。た。の。も。皆。な。御。經。の。文。や。義。理。よ。り。も。真。言。の。力。の。多。い。こ。こ。を。見。透。か。さ。れ。た。か。ら。で。あ。り。ま。せ。ん。か。

真言の聲に不思議の力のある。こ。こ。を。説。く。も。の。は。佛。法。ば。か。り。で。あ。り。ま。せ。ぬ。耶。蘇。教。の。舊。約。全。書。の。初。めに。創。世。記。い。ふ。の。が。あ。り。ま。し。て。此。の。世。界。が。初。め。て。成。き。た。時。の。狀。態。が。書。い。て。あ。り。ま。す。其。の。中。に。恚。う。い。ふ。こ。こ。が。あ。り。ま。す。神。様。が。此。の。世。界。を。造。ら。れ。る。こ。き。神。様。は。光。あ。れ。い。は。れ。ま。し。た。其。の。時。に。此。の。世。に。光。が。成。き。て。夜。を。晝。が。成。き。た。次。に。神。様。は。水。は。一。處。に。集。つ。て。乾。いた。土。地。を。區。別。を。せ。よ。い。は。れ。ま。し。た。す。る。こ。水。と。土。地。が。分。れ。て。水。陸。が。成。き。た。次。に。神。様。は。地。に。青。草。と。果。實。を。結。ぶ。木。に。發。へ。よ。こ。命。ぜ。ら。れ。ま。す。其。れ。が。成。き。た。い。ふ。風。に。書。い。て。あ。り。ま。す。此。れ。が。西。洋。の。學。者。た。ち。に。解。ら。ん。こ。こ。で。あ。る。こ。い。ふ。の。で。大。變。な。難。問。題。を。成。つ。て。を。り。ま。す。云。何。に。神。様。が。光。あ。れ。水。あ。れ。土。地。あ。れ。草。木。あ。れ。い。は。



れたからして、其れ等のものが成きるときは實に解らぬ事で學者たちの不思議がるのも無理はありませぬ。然るに此れを吾が宗の眼から見ますと少しも不思議なこゝではないので當然のこゝも、なつてをります。耶蘇教の教が眞言宗から見れば解るこゝいふのは實に妙なやうであります。事實解るのであります。神様が光あれ、水陸あれ、草木あれこゝいはれたのは神様が眞言を唱へられたので、其の眞言の徳に依つて光や水陸や草木が成きた譯であります。大日如來が花の眞言を唱へられると花も成る。又燈明の眞言を唱へると光明も成る。ウん字の眞言を唱へられると愛染明王も成る。カン字の眞言を唱へると不動明王も成る。天地の間にあるものは皆な如來の眞言から成きるのであります。之れは耶蘇教にいふところと同じこゝに成つてをります。一行禪師の大日經の疏には眞言を唱へたならば、

一切の天子、天女等の前に内外の有情、無情、非情の境を現はす、又た食物、音樂、其他の事物を現して其れを使用するこゝを得らるゝ、若し五慾の境を娛まんとする者のためには極めて勝れたるものを得させる。況して如來が眞言を唱へたならば何事も成きざるものはない。

併し如來や神様に眞言の不思議力のあるこゝはそうでもありません。やうが、我れくには眞言の不思議がないのであります。やうか、之れは前にも述べた通り、我れくには既に日々眞言の不思議力を以て働いてをるではありませぬか、分に相應せぬ不思議力は用ひるこゝは能きませぬが、分に應じて眞言の力を顯してをります。而して我れくは眞言も如來や神の眞言も違ひはないのでありますから、

如來の用ひらるる眞言を用ひさへすれば、我れくも如來と同様の働きをするこゝが能きるのであります。

其れでありますから葛城の慈雲尊者は常に弟子たちを誡めて御經を讀むのは眞言、陀羅尼を誦する功德には及ばぬからこゝいふので、御經はなか／＼讀せずして陀羅尼や眞言ばかりを唱へさせてをられたこゝいふこゝであります。一體御經を讀むこゝいふこゝは遙か後世に初まつたこゝであります。佛の前で御經を讀んだこゝいふこゝはないのであります。佛の前で他の佛や菩薩や天人たちが眞言、陀羅尼を誦じたこゝいふこゝは那の御經の中にもあります。之の眞言を誦するこゝは最も廣く行はれたものであります。回教徒なごまで傳つてをるこゝいふこゝであります。

## 覺海師の安心

上

覺淺上人の入寂せられたる前一年、康治元年は近衛帝即位の歲にして、上に鳥羽法皇ありて政を院中に執り、世は將に平氏の手に移らんとする時代にありて覺海師は生れたりき。師は但馬國朝來郡の人にして、建屋の與光寺の學頭なりしが、高祖の舊跡を慕ふて適かに南山に躋り、一字の艸庵を結びて居り、明匠を求めて法を聞き、練行頗る努められたりき。師も亦た高祖の遺躅に従ひて南方寶部の三昧



に遊び、大悲萬行を以て其理想させられたれば、自ら南勝房を呼び止宿せられたる寺は華王院といふ、建保四年七十五才にして、高野山第三十七代檢校職に進み、貞應二年八月十七日入寂せられたり、當時、正智院に明任師ありて、學識、德望共に師と並び稱せらる。斯の時に當り内には大傳法院の一派ありて、根來に據り、覺鑿上人の遺風を揚げて威勢をさへ、高野の衆徒に譲らず、紛擾に紛擾を重ねて互ひに反目嫉視し、隙さへあらば干戈に愬へて争はんとするあり。されど兩山の學風に至りては未だ甚しき乖角あるに非ず。單に聲譽を競ふて相降らざりしものも、漸次星霜を經過するに伴れて何等か教理上に根底を築き、根本的に鞏固なる立脚地を得ることを促せるあり。愼くして一方に法性、道範等を経て宥快に到り、本地身說法なる大旗幟を樹てたるあれば、一方には之に反して、賴瑜の如き學匠を出して、加持身說法なる大旗幟を備へ、茲に兩々相對峙して、畢に調和すべからざる争點を看出せり。而るに復外にありては、法然、眞鸞の如き曠世の英傑出で、他力往生なる新信仰を鼓吹するに、かの驕れる平氏の花にも擬ふ月卿雲客の美しき夢長からずして、南海の際、西海の涯の浪にさすらへる愼れ有爲轉變の悲慘なる状態をさながらに目撃して、深く哀腸の感に撲たれたる當代の民情は、靡然として、厭苦欣樂の淨土教に向ひたれば、其末流は、鬱然として榮え、莽りに法相、三論、天臺、華嚴、密教なきの自力修行を主とする舊佛敎の信仰を破り、稱名念佛の聲は九重の上より下は津々浦々に響きあひて、さしも旺盛なりし寧樂、平安の佛敎の威信を根底より揺り動さんご試みられたり。此等世の大勢に迫られて、舊佛敎も最早安眠を貪る克はず、新機運を啓かざるべからざるごこちとなりたり。幸にして覺海師、明任師の門よ

りは法性、尙祚、道範、眞辨、信堅、信日、覺和、玄海なる所謂南山の八傑の相前後して出づるありて、教相學は大に振ひ、又斯數條の溪流を成したるものは、終に應永の頃宥快師に到りて、終に一大深淵に歸入したりき。

されど一向に淨土を欣び、往生を歎ぶ時代の思潮に催ふされて、彼等學筵に迫ほしたる直接の影響も見るべきものは、教理の發展にあらずして、當時の人心が最も切實に要請しつゝありたる信仰問題、安心問題の解釋ならざる可らず。夫れ佛敎の傾向は常に人生を否定し、人事を排斥して、眞如實相の圓なる月を愉悅せるものなれば、人生問題の中樞なるべき信仰、安心の問題に關しては、寧ろ閑却せられたるなれば、今や法然、親鸞の徒が唱へ出せるごころは、大乘敎の、高き深き教義の目より見れば、何等の價値あるものごも見えざりしなり。然しながら諸大乘の明匠ごても一度提出せられたる問題は、其れが假令へ淺近なるものごもせよ、何等か適當なる解釋を加へざるべからず。既に信仰、安心てふ新問題は提出せられたれば、人生問題の一部ごして、教理を應用して新しき天地を開くべき機運に達したるなり。而して此問題に關して最も明白に、且つ深く教義の地盤に根ざして先づ密敎の信仰、安心觀を試みたるものは覺海師なり。蓋し信仰、安心論は時潮の反映ごして當代の宗教界に動搖せる思想に對し、舊信仰、舊安心を把持したる人の態度を窺ふに最も良好なる材料たるべし。

中

覺海師の安心論は當代に最も榮へたる新しき他力往生の信仰問題に催ふされて出で來りたるも



の如きも其思潮の影響は當古き教理の上に新しき問題の提供せられたるばかりにして信仰の内容に到りてはさらに他の影響を受けたるに非ず。却つて他力往生の信仰に對抗して密教の本来の面目なる信仰を遺憾なく唱出せられたるなり。されば覺海師が教相興起の濫觴を成して、後來の南山の學風を肇められたる効果は固より没すべからざる所なるは勿論なるも、新しき信仰問題に對する密教の態度を明かにし、祖風を疵つけざりし一事はかの時代思潮を憶ふものに取りては最も興味ある事件なり。

覺海師の安心論は諸口傳鈔の中にありて、折りにふれて語り出されたる法話を筆記したる片言に過ぎざるも師の安心論を窺ふに充分なるものなり。今其大意を抄出すれば、

私に問ふて曰く御身なむぎは何れの佛、何れの淨土を可期し覺召し候や、御心こけて眞實に思召され候らん事、ありのまゝに仰せ給へ。誠に流轉生死の患執は蕩け難く、覺分は晴れやらぬ嘆き、絶えず此の事を思ひ候、斯やうに法門の深義、御身の自證を釋ねて承り候こゝは渡世名聞、前途後榮の爲にはあらず。たゞ無上菩提の爲め也。南勝房曰く誠に出離得脱の道、常に心に懸けて度々斯くの如く云はる。哀れにこそ覺ゆれ。設令へ心を明らめず。雖も、然か如うに思ふは即ち善心なり。其の心ばかりにても三惡道は離れなん。情ら案するに強いて都率、極樂をも執せず。密嚴華藏にも偏執すべからず。靜かに思ふ時は何れに生れ、何に成らんとも思はず。心だにも淨めつるならば龍夜叉等の身も成りたりとも苦しからず。内證の賢き雜類の棲む處は我等が住所には似合はしから

ず。彼は皆淨土にてある也。人體は可く、雜類異形は惡し。偏執するは悟りなき故なり。相續の依身はいかなるこも苦しからず。臨終に何なる印を結ぶこも思はず。四威儀に住すべし。動作何れか三昧に非ざる。念々聲々は悉地の觀念。眞言となり。實に心に妄念あらばこそ此の念を止めて。こゝを觀すべけれ。こも思はず。況んや身口の二業をや。又如是た。行者の用心は常に出入の息に阿字を唱へ、心に緣生實相の觀念を爲すべきなり。臨終なき強ちに人にしられず。善知識をも用ゆべからず。自他の意各別なれば同じ觀念にても、さすがに我意に同ぜず。吾意に同ぜざる人はなかなか無きがよき也。意だにも靜かに成りなば、心を以て善知識を爲すべし。五知、屢融源を稱す。覺海上人の同族なむぎの臨終に人にも知られず。正念に住して入滅せられたるは哀れに貴きこゝに覺ゆれ。やむこゝなき人には都て十界に於いて執心なく、十界は住不住自在にして偏執著心に依つて九界雜類の身なんご感じたるも、此の業力所感の故き業の盡不盡に依つて生を改む。所生の處に憶持して忘れざる人の爲めには、人中天上は即ち淨土なり。密號名字を知れば、鬼畜修羅の棲むこゝろも密嚴淨土なり。二人枕を並べて寢たるに一人は惡夢を見、一人は善夢を見る如く、同行同法をして一師に同じ法を習へ。こも心に隨ふて其の益不同也。六欲天は樂に著し、諸天に佛法なきこも、都率には一生補處の菩薩の淨土あり。娑婆世界は五濁の境なれ。こも西方には淨土あるなり。心清ければ即ち佛法土。こいふ是れ也。凡心を轉すれば業纏の依身は即ち所依住の正報の淨土なり。其の住處も亦是の如くなれば三僧祇の間は此の理を知らんが爲に修行して時節を送る也。



師の安心論を通覽するに、隱約の裡に他力往生の淨土教に對する自力向上の偉大なる信念の、脉々として活躍せる趣あるを見る、而して其論の特色も見るべきものは、

一文の中に充溢せる思想は、眞實には我が居する所を密嚴淨土と觀じて、自身の前後左右に四智四行を布列し、乃至九會十三大會、法界胎藏界曼荼羅の上に金剛三十七尊、應利の聖衆、各々自證の月輪に安住すと思ふ(覺海師の話)ところにおいて、念佛稱名を最勝の善業とする淨土教の意に對して、己心中に三十七尊の曼荼羅を開顯せんとする三密修行の本心は、那邊までも溢らざるにあり。

二、此己心中の法門を開顯し克はざる限りは、心だにも清めつれば龍夜叉の身も成るも苦しまず、賢聖の棲むべき淨土は我等の分に非ざるうちは強ひて羨望せずして安住す。何ぞ其意思の壯烈なる。當時の淨土教の信徒等が三途の苦患を懼れて、偏に極樂往生を欣求するに對して、天堂と地獄と我に於いて何んかあらん、ただ清淨なる信念を得て曼荼羅會の其徳を開顯するばかりが、我等の満足するべきなり。此の心地に位して其處に安心あり信仰ありとするは、則ち新信仰に對する秘密教の大反抗ならざる可らず。

三、往向すべき淨土に就ても、他力宗にては西方淨土を欣求するに對して、己心中の淨土の外何ものをも求めず、娑婆世界には五濁の境なれども四方には淨土あるなり。心清ければ即ち佛法土といふ。凡心を轉すれば正報の淨土は則ち顯る。三として、穢土の外に淨土を求めず、正に享くべき苦痛は苦痛として怨まず、歎かず、穢れと戦ひ悲しみ、歸ひ、歩一步向上發展する壯絶愉絶なる意氣ある

を見る。之れを只管らに安穩怡悅なる未來の理想境に憧がる、時代の人心に取りては、云何に痛く情なくや感じたりけん。

四、随つて臨終の正念にも善知識の袖に縋らず、獨り行き獨り導いて迷はず。意のまゝに九界に到りて西方北方さらに偏執するべきなきを以て、善知識の引導に委せる他力教の主張に對峙したる如き、又強いて一念の往生、稱名の引攝をも求めずして、三僧祇の間は此の理を究める爲めに修行するべきを専らして、他力易行の方便を斥けたる如き、其他渾ての點に在りて毅然として密教の本意に據り、淨土教の勢力を一步も其圈内に立ち入るべきを允さざりし如き、其意の在るころ見るべきなり。

之れを要するに不生の心地に住して三十七尊住心城の信仰に満足せる人の目には、淨土教の思想の中心なる淨土穢土の觀念や、苦痛快樂の情や、渾て是れを金剛の舞臺として好惡せず、淨穢苦樂の上に超然として眞の苦樂境を描きたれば、師が安心論に於いて淨土教の容れらるる餘地の些しも貽されざりしは寧ろその所なりき。

下

此安心論はさらに師が八十二才の最後の歴史に於いて一大光彩を放ちたりき。其由來は史實の記するところに依れば、建保六年正月、吉野の法師春賢なるもの野川の郷民を使喚して、高野領なる花園庄の大瀧領に勝札を建て、吉野領とし、又祖廟の前の橋の下にも同じく吉野領なる勝札を樹て、彼等



が領内を稱する祖廟の周圍にありて、法師にもあるまじき狩獵を勸め、塵埃を堆積して祖威を耻しめ、或は房舎に亂入して住侶の器物を掠奪する如き、亂暴狼藉を極めざることをなし、高野の衆徒等之れを見て憤慨措く能はず、終に官廳に懇ふ、檢校略譜並に信堅師の野山記に依れば、承久元年正月十四日高野吉野兩山領界の爭論の批判ありて、院宣を賜ひ、御手印縁起の旨に任せて阿巧川南横峯を限りて高野の支配せしたり、然るに同月の廿七日吉野の檢校等再願して再檢を乞ふたるに、證文確實にして終に高野の勝訴に歸すべきは明白なるが、恰も其頃鎌倉右大將實朝公の公曉のために弑せらるゝことありて、世は何もなく物議のために騒然たりき、従つて朝廷も大に議誠を加へざるべからざる折からなれば、訴訟の裁斷は抄しからず、且つは朝廷の公卿等窃かに吉野に加擔するの風聞ありて、大衆の激昂さらに其度を加ふ、終に同年八月五日大衆の怒りは破裂して蜂の如くに起り、三千の大衆は悉く房舎の門を閉ぢ、諸堂の扉に鐵釘を打ちて、一味の神水を飲み、即日山を離れて天野の方面に向つて退散せんことを謀れり、當時檢校職に在りたる覺海師は是れを見て大に慨歎し、大衆を諭して今日離山を延べよ、我れ祖山のため即日祈禱せん、即ち其驗ありて同日麻生津の庄を賜ふの勅あり、暫く事なきを得たり、されど大衆の餘憤は決して壓ふべからざるものあり、何となれば朝廷にありては後鳥羽上皇は竊かに議して鎌倉幕府を倒さんとする謀ありて、表面平和を裝へるも裏には同志を糾合して機を熟するを窺へり、之の議に參畫する公卿頗る多き中にも、光親、有雅、宗行等の朝臣は院の寵遇斜ならず、是等の諸公卿は窃かに吉野の衆徒を引いて院の味方に參せしめん、企てたれば、吉野高野の諍

論の落居するところも略知るべかりしなり、恁かる時勢に在りては官廳の保章も既に頼むべからず、たゞ佛天に誓ふて自然の配劑に俟つ外はなきなり、傳へ曰ふ覺海師は此の有様を見て大に發憤し、自ら魔界に入りて佛法を擁護せんことを願ひ、生きながら天狗となり、飛び去れり、維寶の覺海傳に依れば、師は貞應二年八月十七日毗盧舍那の定印を結びて滅を唱へらる、春秋八十二才なり、華王院の境内なる池邊に葬れり、或は遍照が岡の傍、今の廟祠の在る處に葬れりといふ、此れ傳眞を得たるが如し、師の終焉は或は生身に羽翼を生じ、鼻隆突起して天狗の群に入りたるか、或は常の如く靜かに入寂せられたるか、其れは今の問ふところに非ざるも、師の臨終に當りて淨土往生を願はず、上天を祈らずして、下品の悉地を成じ、魔の群に入りて佛法擁護の大業を企てられたるは、師として寔に然もあるべきことにして、平生安心の如く地獄天堂さらに問ふところにあらず、したる安心論は、其傳説を相待つて一層意味深きを覺ゆるなり、試に、密教の本旨より此の安心論を見るも、正に往くところまで往き着きたるものを見ざるべからず、寔に十界は己心の具徳なれば、人の欣ふべき淨土もなく、厭ふべき穢土もなく、龍夜叉の果報を受くるに苦しきも思はず、變壞無常に迫らるゝも怕ろしき想はず、縱しや臨終に到るも心自ら心を持みて敢て善知識の引導を恃まず、成るべきやう又成らざる可らざるやうの果報を執りて、其れに甘んずる如き大安心は、密教修行者の終には到らざる可らざる到着點なり、此大安心に住してこそ自ら魔界にも入り、魔界に共に入らざる可らざる、則ち大悲萬行は成就することを得るなり、されば師が魔界に入りたりて傳説は、或は傳説として正鵠を得ざるものな



るべきも、此願を起したりといふこゝに到りては、師の安心の歸結として不思議にもあらず、有り得べからざる事にもあらざるなり。是れを他の高僧達の當代の思潮に動かされて、無常迅速を悲しみ、生死流轉を懼れたる如き、或は現世に行はるゝ、似而非安心論に對比するに、其差異は天壤も營ならざるなり。其點に關して多く論すべきこゝ無きにあらざるべきも、今は單に覺海師の安心の一端を擧ぐるに過ぎざるなり。

## 聖寶尊師

山城宇治の醍醐寺の開基聖寶尊師は大和の人、或は讃岐の人なりと云ふ。光仁帝の末葉なり、承和二年高祖入定の前四年にして、淳和帝の天長九年に生る。承和十四年歳十六にして當時東大寺の別當なりし眞雅僧正に投じて剃髮し、次で元興寺の願曉圓宗の二師に就て三論を學び、東大寺の平仁に法相を學び、同寺の立榮に華嚴を受く。師は又た役小角の風を慕ふて諸國の山川を跋涉し、大和の諸高峰に登り、峯りに苦修練行せり。貞觀の末醍醐の山中に草庵を結んで栖めり、其頃より再び眞雅僧正の下に在りて祕密儀規等を受けたりき。元慶三年正月眞雅僧正入寂せられて後、當時まだ東寺の別當なりし眞然師に従ふて兩部の大法を學び、復た眞雅僧正附法の弟子、源仁に従ふて祕密の奥底を竭せり。宇多

帝の寛平三年貞觀寺の座主に推さる。南都に在りては専ら東大寺の修營に勤め、同寺の境内に東南院を創めて三論の道場とす。延長六年益信に替りて東寺の長者に補せらる。朝廷は尊師を信慕するこゝ頗る厚く、東寺の四天王開眼供養式には宇多法皇親ら臨幸あらせらる。延喜九年六月老病を以て諸官職を辭し、深草の普明寺に退き、同じ七月六日入寂せらる。住壽七十八、尊師の門下に顯密の學將多く輩出したるが、延愼はその三論を傳へ、觀賢は祕密の嫡弟なり。東山帝の寶永四年勅して理源大師の諡號を給ふ。

## 二

小野六流は源を聖寶師に發して其の流を汲むもの最も多し。後世傳ふるこゝろに依れば、廣澤流には經軌を主とし、小野流は口傳を尙ぶと云ふ。或者は之れを解して小野流は經軌よりも折紙、口訣等を重んずる意味なりとするも、其は根本思想を漸く疎遠に成りゆきたる末流のこゝにして、原泉に遡れば強ちに然らざるなり。蓋し師の風尚は奔放自在にして、細節に拘はらず、活事實に處して應用無窮なるこゝ殆んき端倪すべからざるものなり。末徒末流は單だ啞然として師の行跡を習ひ傳へたるこゝろ、やがて後に口訣折紙をして残されたるなり。實に尊師が小野六流の祖として祕密傳承に卓越なる功績はさるこゝながら、吾人が最も欽仰して措く克はざるものは其の向上的の高風なりとす。蓋し高祖は常に高山に攀ぢて氣魂を練り、大澤に臨んで神靈を疊き、備さに欣求して畢に德澤は萬世の儀表たるを致せり。而して斯の向上的遺風は聖寶師の血液に入り、鈴々たる響を發して循環せるを觀る。高



祖入定の後師は祕密教の實行的方面を代表し、幽玄なる遮那の法教を最も卑近なる人事に引き下し、活祕密を以て世道人心を裨益したることに於いて、他に多く其の比を見ざるなり、其の末徒の極端なるものは修験に走れり、されどアングロサクソンの血液を承くるものは着實の風あり、大和民族の血縁には那邊かに義氣を帯べるが如く、聖寶師の血脉を傳承するところ那邊はなく修験的の風趣ありて、其處に聖寶師の佛は躍動せるなり、それやがて高祖の活動的、向上的血脉を曳ける所以なり、現時澆季の世に當りて祕密教の餘喘は辛ふじて此の方面に保たる、を以て見れば、如何に尊師の感化の偉大なりしかを證するなり、蓋し斯の根深き感化は全く尊師の偉大なる人格に基くものならざるなきか。

## 三

尊師の洒脱にして豪壯なる人格は密教史中に一大異彩を放つものにして、小野流の興る所以も亦た實に茲に胚胎せり、後代の學將たちが齷齪して文々句々の末に顧盼し、一向に傳承に悖らざることを之れ懼るべき、尊師は洒々として應用の妙、活用自在を極めたり、傳へ言ふ、尊師は役小角の躡を追ふて大和の諸高峰を探りたるべき、其頃、金峰山には大蛇ありて路を擁ぎ、熊野より入りて此の峰に詣ずる道者を襲ふために入峰の事久しく絶えたりしが、尊師は自ら斧鉞を執りて吉野より登り、不意に出て大蛇の尾端より寸々に截り路を開きたり、尊師山に登るや三衣を被着さるを煩はし、阿婆叫の種子を帛段に書し、縫ひ連ねて頸に掛けたるもの、後世の種子袈裟輪袈裟として残れるなりと云ふ、

恁かる小話の端にも尊師の性格は躍如たるなり。

往年或る繪畫共進會の募に應じたる畫家中、三人まで眞如法親王が渡天の途に在りて、猛虎の襲撃するところとなり、親王は錫杖を振ふて奮闘せる畫題を探りたるべき、高山樗牛が之れを評したる中に、恁かる態度は崇高なるべき宗教家に相應しからず、宗教家の前には猛獸も威を收め、毒蛇も馴れ親しみてこそ出世間的興趣のあるものなりと言ふ意味の言ありたりと記臆す、されど斯の筆法を以て尊師の大蛇對治を評するものあらば、それは餘りに平凡なる餘りに常套的にして、村學究的の見地なり、宗教家は常に阿羅漢的にあらず、尊師の庶人のめに害毒を攘ふの義俠、斧鉞を振ふて大蛇に立ち向ふ勇氣、自信、殺生の大罪を敢てする果斷は全然人間的宗教家として最も崇高なる性格の典型なり、現時動もすれば不健全なる慰安的の信仰が宗教の本領なるかの如く主張せらるべきにあり、設し尊師の如き雄々しき宗教家の出づるあらば、實に青天の霹靂に逢へる感なくんばあらず、又た袈裟の如きは他師が寸法、色合、運針の細々したるこゝにも古式に拘はるものなるに何の躊躇もなく恰當なる形狀に作り出せり、事は頗る些々たるに似て而も斯かる中にも優に一派に祖たる素質を示せり、天才は流るゝ水の如きか、何の凝滯するところなきなり。

## 四

大蛇對治の傳説には多少事實の相違なきを保せざるも、尊師の豪放なる義氣に富みたる、自信の強烈なる、而して機智に豊かなる性格は、雲間に閃く金龍の如く片々たる説話の中にも認めらるゝなり、



會て眞雅僧正の愛犬を竊かに獵夫に與へたるために不興を蒙れり。假令斯事なかりしとすも、篤實なる眞雅僧正は粗豪なる聖寶師に快からざりしならんと思はる。節あり、尊師の「あたつて碎ける」性行は那邊にも現はるゝなり、行化して讃岐を過ぎ路傍の水を掬して手を洗へり、時に一小兒あり、之れを見て其の水の不淨なることを告ぐ、尊師の曰く諸法豈淨不淨あらんや、小兒曰ふ、淨不淨なくんば何ぞ手を洗ふや、尊師も追がに其の機智に駭き、父母に乞ひて携へ歸りたるは聖寶師門下の麒麟兒觀賢僧正なりき、尊師の襟度の宏量なること海洋の如くならずや、尙ほ下の小話の如き潑刺して尊師の性格の躍動せるを見る、尊師まだ年若き頃、東大寺の上座に頗る慳貪なる法師ありき、尊師わざこ調戲て言へるやうは、學房如何にすれば大衆に供養をせらるゝや、上座惟へらく大衆に供養するも惜し、さりて大衆の前にて答せぬも本意なし、よし、彼がえ爲すまじき事を言ふに若かず、さて言へるやうは、加茂の祭の日眞裸にて禪ばかりしめ、干鮭を太刀に佩き、瘦たる牝牛に乗り、一條の大路を大宮より川原まで、我は東大寺の聖寶なりと名乗りつゝ、通り往かば、當山の大家、下部に至るまで供養せん、尊師は大衆を呼び集め大佛の前にて金を打ち鳴らし、相違なきことを誓へり、當日になりたれば一條富の小路に棧敷をうち、聖寶が通るを見ん、さて上座を初め大衆皆な集りぬ、暫らくありて見物の人々のたち騒ぐに、西の方を見れば約束の如き容姿して東大寺の聖寶こそ上座と争ふて通るなり、高聲に喚きつゝ、往きたり、恚くて寺に歸り約の如く上座に供養をさせたり、斯の事後ち上聞に達し、聖寶こそは身を捨て人を導くものなりとの御説を給はりしと云ふ、世出世に亘り尊師の性格は常に一貫して壯絶なるものあり。

## 五

尊師の著作として世に傳へらるゝは胎藏次第、五大虚空藏式持寶金剛次第等なるが、活動的、向上的素質を有する人は寧ろ多く述作するを欲せざりしならん、されど其の學殖は頗る深遠にして、祕密教はさらなり法相、三論、華嚴に亘りて一代の名匠にして、就中三論は尊師最も得意せられたりき、由來彼の宗と密教とは奇しき因縁ありて、高祖は三論の祖道慈律師を先師と呼び、律師の大安寺を眞言宗の本寺と定め、復た高祖の師なる勤操も三論の人なりき、尊師は東南院に在りて大に三論の風を煽ぎ、三論宗中興の大業を成せり、斯の坊に尊師の遺品なる如意ありて、面に三鈷杵を背に五獅子を鏤りて顯密を表せり、會て興福寺の維摩會のとき尊師は賢聖義と二空比量義の法門を立てたることありき、之れより後ち維摩會の講師は必ず此の如意を持つことに定まりぬ、もし東大寺と興福寺と不和なる時は東大寺はかの如意を貸すことを拒めり、ために興福寺は會を開くこと能はずして奏聞を經勅を東大寺に下して之れを借りたり、今より見れば一笑話に過ぎざるも、亦た以て如何に尊師が南都に於いて威望の高かりしかを知るに足らん、恚くて尊師は三密の妙行に心水を清め、般若の空智に肝膽を摧きたれば、自ら木疆なる没風流にてはあらざりき。

## 六

尊師はをりにつけつゝ、風月に雅懷をやられたるが其の高調は當時世に喧傳せられたるが如し、古



今集にたゞ一首尊師の和歌を收む。

はを始めを果にて詠めをかけて時の歌よめよ人の言ひければ詠める。

はなの詠めに飽やみて分行けば

心ぞ共に散ぬべらなる

一首の歌に依りて師の風格を窺ふこと固より不可能なるも、句の初頭には文字ををき、末尾に文字を配して詠めること云ふことを掛けたる如き、繊細なる技工を加へられたるより見れば、數島の道に於いても老熟せられるたるが如し。

七

要之、獨り眞言宗の高僧のみならず、各宗の學者或は徳行家として傳へらるゝ人は、其の性格頗る平板にして個性の認めらるゝ者極めて稀なるに、尊師の如き多角的にして豪放壯快なる性格を備ふる人を得るは、寔に教界の珍すべし。高僧と呼ばるゝ人多くは宗風の産見たるに過ぎざるに、尊師はよく高祖の雄風に駕して自由の天地に翔り、了に快活なる小野の一派を成せり。若し六十年已前に高祖世に出で給はざりしならば、眞言宗は尊師に依りて肇められたるやも知らざるなり。

近時沈湎せる我が宗の學界は、斯かる偉大なる人格を探りて縦横に研究すること、は清新なる氣運を挽回するに非常なる助となるべく、無趣味なる究理に勝ること限りなからん。

若し多少に徳ありとも自ら大なりとして以て人に憍るものは彼の盲人の燭を執つて彼れを照して自ら明かならざるが如し。(未曾有經)

應 其 上 人

一

花は長閑なる春の風に綻びて其の匂ひさらに艶に、紅葉は松の霜に染まりて其の色ひさしほさやかなり、豊太閤の世に應其上人の在るは、春に會へる花、秋に會へる紅葉の如し。春に雨の惱みあり、秋に嵐の怨みはあれど、春のかぎり花は咲けり、秋の名残りに葉は散れり。太閤の世には群雄雲の如く簇り起り、孰れも不逞の志を抱いて、何時かは都に馳せ上り、天下の政柄を握らんとするものゝみなれば、さしも榮えたる豊臣家の天下は、桐の一葉凋落して徳川の下水をし流されければ、上人の志も展ぶるに由なく、天海の前の天海を以て無官の相宰にも當る器量を擁して、豊公に後るゝこと十一年にして、江洲の飯導寺に空しく屍骸を残しぬ。されど上人の宏壯なる事業、高潔なる性行、典雅なる風懷、は實に欣慕に堪へざるものあり、今年陰曆十月一日は正に上人の三百回忌の祥當なれば、こゝに上人の事蹟を纂めて手向草に充てんす。

二



上人名を日齊といふ字は順良、近江國佐々木氏の産通念集及び諸傳記には藤原氏なりき、師が出家已前の事は審かならざるも、初め佐々木氏に仕へたりしが、佐々木氏没落して後、大和の越智氏に仕ふ。然るに越智氏亦た没落せり。上人は身の長六尺餘。

神機靈發にして儀貌堂々たり。恰も好し、群雄割據して國に主なく、天下亂れて麻の如し。上人にして設し功名に志あらば、一馬一刀、手に唾して王侯の富貴を得る何んの難きことかある。されど上人は深く人事の頼むべからざるを慨き、富貴の念を斷ち、一首の吟詠を遺して迢然として高野山に入れり。

よしや世にいはねの小松年經も

逢見んもたゞこがらしの風

時は天正元年にして織田信長の勢力今し近畿に振へり。上人の歳三十七なりき。上人は武家に産れ、兵馬控惚の間に人こ成りしも、常に學を勵み和歌を詠じ、篤く佛教を信じ、桑門の人こ交を結びたりければ、かの弱肉強食の修羅場を避けて、清淨なる梵境に歸し、光明なる新生活を開くに到りたるなり。

## 三

同年十一月五日、千手院谷瀧城院に寄宿す。をりから霜月の空荒涼として、杉松に颯々の響あり。三千の房舎軒を駢ぶるも、萬山神として宛然ら都率の淨刹なれば、今斯の曠世の偉材なる青道心が發菩提心の道場として、將に髻を截り黒染の衣を重ねんことする。自ら無始の妄執の雲齊れて、頓に瑜伽聖衆こなる。洵に美はしき光景にあらずや。其れより日々高祖大師の廟前に參拜し、四社明神の瑞籬を瞻

禮し、且つは明師を詢求したりき。當時文殊院の勢譽は博識俊邁の鉅匠と聞えられたれば、遁ち其の室に入りて、穠染受戒し、名を應其と改む。譽師も其の凡ならざるを察し、速かに瑜伽の大法を瀉瓶せり。悠くて上人は常に鹽穀を斷ち、菓實と水とを採りて精修苦行し、求聞持の法を修する事三度、専ら野澤諸流の祕奥を探り、御室任助法親王の室に入りて、三部の大法を稟け、阿闍梨位を嗣紹するに至る。木食草衣して功を積む事、に十三年なり。されど碧玉は遂に地中の物にあらず。亂世の英傑一たびは鋒を藏むるも、何時かは鈍光を顯はさるべからず。果然機會は來りぬ。天正十三年、豊臣太閤南征して紀州根來寺を一舉して灰燼に附し、使を高野山に馳せて命に違はざれば、破滅直ちに到らんこと告ぐ。一山の安危諾否の一語に擊れり。闔山の大眾徒らに喧囂するも、此の難局に當り、開陳の重任を負ふて立つものなかりき。上人は聲望漸く衆徒の間に聞えたるも、身は見る影もなき一客僧に過ぎず。然るに事情は一日も緩ふすべからず。大眾は終に師を起して斯の重任を師の雙肩に委ねたり。上人一諾するや四月十日、嵯峨帝より賜ふところの御手印縁起を携へ、宥全、快言の兩僧を伴ふて泰然として雜賀の庄に豊公の陣を訪ひ、さしも重寶なる件の御手印縁起を黒灰場に投し、徐ろに他意なき旨を陳ぶ。太閤之れを許容して制令條目を下せり。四月十六日、良運、空雄をして肯狀を捧けたれば、太閤喜んで朱印二簡、制札の公案を賜ひ、上人を一山の貫主に任し、一山事なきを得たり。此れより豊公上人の器量を推重し、信任するこも頗る渥かりき。

## 四



同じき年六月、豊公は米二萬石を以て高野山金堂を再修し、別に五千石を以て其の修覆に充つべき朱印を賜ふ。同十四年、洛東大佛殿造營の幹事を上人に命ず。十五年金堂の落成するや、公より木食興山の名を贈らる。十八年、公の命に依りて四神相應の地を相し、興山寺を勅め堂宇落慶して佛餉料千石を寄附する朱印を賜ひ、論議法談の會場たらしめたり。十九年十一月、高野寺領ミして一萬斛の朱印を賜ふ。文錄元年、太閤母公のために一寺を建立せんミ欲し、上人に命じて地を撰ばしむ。師乃ち傳法院の舊地をトし、修工を創む。二年功成りて之れを剃髮寺ミ號し、上人を開山ミして興山寺ミ兼住せしむ。剃髮寺は後改めて青巖寺ミいひ、今の金剛峰寺は其れなり。三年三月三日、太閤吉野よりの歸途登山ありて、先妣のために大法會を行ふ。上人の記録に依れば。

太閤御所高野御參詣、愚老ノ寺青巖寺ニ三日ノ御逗留也。三州大納言殿、加州大納言殿、蒲生飛驒守、其外國々ノ諸大名供奉也。悉拙僧覺トシテ馬草等ニ至マテ下行ス、上下一萬人ニ及ト云ヘリ。

四日法談聽聞ありて、此の度の登嶺の布施ミして、諸伽藍悉く再興すべき旨傳へられ、大塔已下二十五棟の修營を命ぜらる。五日連歌興行ありて、公は發句し、武將住侶等終日百韻を成せり。六日能樂の興行ありしに、忽ち迅雷疾風ありて天地大に撼へり。古昔より音曲禁制の山なれば高祖の冥鑑にや戻りけんミいふ。豊公此の日還御なりき。其の他師が豊公の保護に依りて造營修築したるもの、全國に亘りては八十一個所にして、山外の重なるものを算ふるも、大佛殿の十六丈の盧舍那佛、東寺の五重塔、醍醐山の金堂、安祥寺の清瀧權現、誓願寺嵯峨の釋迦堂、宇治の平等院、石山の觀音堂等にして、此れがために約

三十二萬石已上の米を費したりミいふ。佛法の闡衍は伽藍道場を以て基ミす。伽藍輪煥の美を成し、微妙なる法筵を怠らざれば法自ら紹隆す。後世上人を稱して行基菩薩の再誕なりミせり。

## 五

其の頃かゝる事もありき。豊公關白職を養子秀次に譲り、自ら太閤ミいふ。然るに秀次の素行さらに修まらず。大閤大に忿つて秀次を逐ひ、高野山に登し、上人に託して青巖寺に幽閉す。數日にして福島、池田、福原の三將各千騎を率ひて同寺を圍み、五奉行の印書を上人に示して秀次誅戮の事を迫る。秀次之れを聞いて劇怒し、其の亡狀を罵しりたるが大命抗し難く、上人三將をして圍みを解かしめ、秀次を宥め沐浴して衣服を改め靜かに自裁せしむ。侍臣篠部淡路守介錯し、六人の近臣も悉く自刃せり。これ豊臣家に取りては最も重大なる不祥事なりき。此の重大事を委ねて決行せしむ、公の上人を信するここの深きを見るべし。公會て王侯卿相の列座せる時、左右の者に語つて曰く、高野山の木食ミ見るここのなかれ、木食の高野山なりミ、渥き殊遇は概ねこの情より來りしなり。

## 六

時は今天が下知る豊家の恩遇に浴して、一山に威勢并ぶものなきは勿論。當時教海の大立物ミして威望漸やく高し。昔は太刀ミ共にうち捨てたる富ミ貴ミは、思ひもかけず師の身邊に纏はるに至る。然るに上人はますく謙にして些しも驕慢の風なし。或時山内に庭儀灌頂ありたるが、衆徒師の意を酌りかねて、逡巡の色あり。上人の是れに答へたる文は簡約なる中にも、能くその眞情を罩め得たるもの



なり。

學道之儀、御衆中第一に爲規模之條勿論候處、今度八月廿三日庭儀灌頂被執行付而、各存分尤に候。雖然、對愚老御用捨之畏入候。所詮自今以後、右之御修中前代より如御法度、諸法事之停止可被勅旨肝要に候。猶以拙僧年齢半に發心者之儀候間、心底雖無疎略候、就不知案内如此候。題目可在之候間、萬端可被仰聞候。

身は既に教界の統領たるの地位に在りながら、尙ほ一客僧たるの昔を忘れざりしなり。特に師が三寶崇敬の念に篤く、日夕に佛法興隆を祈られしこゝは、師の日記の一條にも顯はなり。

藝州嚴島、和州室生善如龍王ノ造營、其他所々ノ小堂神社ノ修造、依之諸造營ニ無揔難、成就圓滿ノ爲祈念、數年伊勢多賀等へ月參、愛宕山毎月百味、猶其外愛染供ノ千座等、荒神供ナト數千座、事云々、

次、三師二親乃至法界平等利益ノ爲ニ、或ハ千僧供養、非人施行等、或一山皆參振舞以下頓寫等者度々修行ス云々。

抑參拾二萬二千餘石ノ音尾悉ク辨濟シテ無爲無事ニ悉地圓滿之旨趣は第一ニ太閤御所廣大憐愍ノ大悲力、第二ニ遍照院才覺祈念之誓願力、第三ニ愚老信心懇祈加持力カ三身相應シテ自他ノ無邊ノ大願成就ス云々、

然るに世は兵戰うち續き、庶民塗炭の苦しみは實に慘憺たるものなりき。救世の上人いかでか之れを

餘處にして一向に念佛座禪し、堂塔修築に専らなるこゝを得んや、上人戰陣を傷むこゝ自ら疵つけらるゝよりも甚しかりければ、列強群雄の間に奔走して怨を解き和を講じ、軍を歇め情を融じたるこゝ屢次なりき。同じく師の目錄書には此の間の消息を漏らせり。

西國下向、大隅薩摩マデ長途ノ造作、隨而和陸ヲ申可談内存ナレバ、島津同家老之衆マデモ種々ノ土産小袖巻物、シ、ラ諸道具禮錢以下不可勝計事、次ニ東國下向ハ相州武州ニ至ル、太閤御所へノ御見廻ナレバ隨而諸陳之諸大名智音衆ニ至ルマデ、音信之物共際限無之事。

人道のため平和のため國事に盡したるを見れば、上人は圓滿なる活動的の素質を有したるなり。

## 七

然るに天運は終に上人に幸せざりしこそ恨みなれ。何みなれば豊公既に馬上に天下を統一したれば、將に文筆を以て文物の隆盛を催し、豊家をして千戴の礎を築かしめざるべからず、而して此の機會に乗じて上人は平和の宣傳者として、文化の指導者として、教界の統領として其の辣腕に俟たざるべからざるもの實に多々なりき。上人の前途は豊家の前途と共に望洋たるものありき。何ぞ計らん、慶長三年八月、豊公遽かに薨去するや、乾坤一轉、世は豊臣家の物にあらずして、徳川氏は既に何の造作もなく之れに代り居たりき。而して徳川氏は豊臣氏に快からざるものなり、豊臣家に殊遇を受け來りたるもの、頭上には、徳川氏の猜疑の眼の注がるゝも亦た止を得ざるなり。愆くて師の運氣も知るべきのみ。たましく、石田三成天下を欲するの意あり、家康を除かんとして秀頼の命なりと稱して兵を擧ぐる



こゝにあり。上人時に豊臣家の將來を慮りて伏見城に在りしが、城遂に陥る。之れ上人の不幸にあらずして正に高野山の一大事なり。初め師に依りて復興したる山は、今又師の事に關し如何なる禍難に罹るも知るべからず。されど問題は單純なり。一身を殺して一山を救はざるべからず。則ち上人は原の恩師なる文殊院の勢譽に興山青巖の二寺を、豊公より賜はりたる重寶なきを譲りて、己れは伏見より直ちに近江の飯導寺に退隱し、煙霞に宴臥して風月を憐し。移り行く世の末を悲しみて餘生を此の地に養へり。さるにても關ヶ原に大阪方大敗して、恩家の威勢の日に寂れゆく狀況を風の便りに聞きて、哀れなる隱者の胸にも悲憤の情はありたらんか。懊惱をやしたりけんか。之れやがて高野山、延ひては密宗の不幸にして、徳川治世三百年の間、薄霞の那邊やらに懸りて、さもすれば外様に待遇されたる原因にはあらざるか。豊家の薄運は上人の不幸なりき。従つて上人の不幸は密教の不幸なりき。

## 八

天正十三年十月一日、春秋七十三にして、師はかの飯導寺に在りて靜座しつゝ、寂をこなへらる。遺弟等棺槨を護して故山に登り、興山寺の傍らに葬りたり。上人入寂の前一首の和歌を詠じて其の小肖に記るされたり。これを辭世とも見るべきか。

阿多志世遠廻利果與行月農

今日能入日乃空于滿樂勢呼。

世の高僧の安心は一様にさるこゝながら、世の覺へ愛たく雙びなき日に在りても、其の胸宇の清爽に

して私利私欲に念なかりしこゝ、譬へば秋の夜の月の如くなりき。

予いにし天正元仲冬上の五日に世を出で、山に入探葉汲水の功一十三年、寺社修造八十一宇、高野住山の星霜廿五、天齡すでに六十二の桑榆にかたぶく、恭しくをもん見るに、高祖入定の曆數にあたり、うき世の望一塵もなし、たゞ一息の絶なん夕を待つのみなり、生滅盛衰のこゝは、樂極悲生のならひ、一瞬にいまあらず(中略)何事も浮橋のあやうきをわたりかねたる世のなさけ、こりつむ末も、今薪つきなん時いたりぬ、たゞ一日のたのしみ、たゞ一念のさかひなり、ひこへに勸善捨惡のつこめおこたるべからず。……(無言抄奥書)

## 九

些の衒誇なく些の野心なく、平靜澹寂にしてたゞ成るに委す風あり。此の高潔なる志操ありて上人の偉業はさらに光彩を加へたり。人に聊かの私心あらば、其の事蹟には效罪あり褒貶あり毀譽あるも、上人の生涯には褒貶毀譽の容るべき地なきなり。

教界の生活に於ける上人は學の人にあらずして實修の人なり。講壇に昇つて三乘五乘の教判を裁するよりも、法流の堂奥に入りて瑜伽の醍醐味に耽けるを以て樂あり。情の人たらずして意思の人たりき。十三年山を出でずして探葉汲水の效を積みたる如き、金鐵の決心あるにあらざれば爲す能はざるこゝろ、特に秀次をして自裁せしめたるさきの如き、設し上人にして智の人、情の人なりしならんには、何等か此間に狹まりて一事件の起るべかりしなり。然るに上人は坦々として公の命のまゝを成せ



り、是れ事情止むを得ず、もその強力なる意思の然らしめたるなりき。然るに上人の風操雅懐に至りては實に天稟の才なり。當時、俳界の傑物なる里村紹巴、山崎宗鑑は其詞友なりき。五代和漢集略には師の和歌百首を載せたり。何ぞ其調の高くして詞の麗はしき。

あふ坂の關のこなたに夏はあれき

はや秋風は峰を越けり

立つ、く霞の衣吹かへし

風の見せたる山さくらかな

曾て石山の觀音堂を再興し紫式部の像を描かせ、

種や何若むらさきのここの葉の

深き心の水のみなもこ

の一首を讚したり、筆蹟亦た頗る美事なり。

十

上人の著書に無言抄二卷あり。凡て廿五條ありて和歌の故實、式作法等を論じたるものにして、當時、非常に貴重せられ、終に上聞に達して寂感を蒙り、外題は勅筆を染められ、大覺寺二品親王の奥書さへ賜ひて、和歌の作法は此の書に則らるゝに至れり。無言抄の奥書に依れば、

此一冊廿箇年以前に、神垣や梅の立枝に匂ひいて哀れむかしの色をみせはや、こいふ靈夢により、

はじめて筆をそむ、今又清書轉軸のあかつき、霜にさへ下葉は露のめぐみかな、こいへる夢想あり、夢におこり夢におはる。

ミ、十有餘年蠶魚のすみか、成したるを、紹巴の切なる勸に依り、舊本を改作して慶長二年に世に出したるなり、上人此の抄の奥に書して、

釋門に入つては其理智をわきまへ、儒道に赴ては其の徳行をあらはし、主君には忠をいたし、親師には孝をつくせ、たゞいたづらに宰子が晝寢、祝能が辨佞のみにては、時日をうつさんもあさまし、春の花の咲あへぬに、秋の葉に朽ちはて、黒髪の見られこゝろは其まゝにて、いつしか鏡の雪におしろく、されば造次にも顛沛にも、妄念をはらふな、かたち、和歌よりよろしきはなし。

師は和歌を以て單なる娛樂させず、念々に辭操を工夫すれば、念々の妄執起るに隙なく、やがては三妄を越え、眞城に入るの門となせり。是れ佛者が藝術に遊ぶ要心にして、藝術が三密の祕要ともなる所以ならずや。



## 第三 信仰章

(明治四十年)

## 告白せざる信仰

他の人からよく聞かれるのであるが、眞言宗の信仰、安心は那麼であるか、吾々は斯の問題に會ふご  
ごに何時も氣迷ひして、頓には應へも出かぬ。然るに近代は一時思想界の覇權を握つてをつた科學  
萬能主義も漸次衰退して、世の學者たちも宗教の眞理を認め、信仰の靈能を唱ふるに至り、極めて眞面  
目に宗教談を聞かうとするやうに成つて來たので、眞宗や耶蘇教の如き平明なる俗情に入り易い宗  
教は、春に遇へる草木の芽の遽かに小き花をつけたる如く、時を得て旺んに傳道して居るので、自然今  
の宗教界は信仰問題の持切りで、單だこれのみが宗教問題であるかのやうである。時勢の推移は疾い  
もので、或る一部の學者先生や僧侶自身には信仰、安心なき言へば今も眉を顰めるが、社會の新思潮は  
既に慙くも活潑に動いてをる。而して他力宗が花形役者と言ふ格である。現時の趨勢を以て進むなれ  
ば未來の宗教問題は、高遠なる哲學的の辨證なきにあらずして、温かき美はしき信仰、安心の問題であ  
ろうと稽へらる。社會の大勢已に如是なるに其の宗の旗章であるべき此の題目に就いて、未だ目口の  
附き居らざるは不面目の次第である。自體吾が宗は日本に入りてすら千有餘年の古き歴史を有し、高  
祖の如き大聖を祖師とし、其の下には名匠學匠雪の如くに輩出したる眞言宗に於いて、今に至るまで



信仰安心のこゝ、言へば揺蕩くなきは寧ろ奇怪である、或は安心も信仰もなき宗旨であろうか、さりながら是れなくして苟も宗教として存在するこゝが出来たであろうか、宗教の基礎は信仰であるから、既に宗教としてある限り云何なる形をしてか、而して又た何處かに潜んで居るに相違ない、吾々は自覺せぬのである。

信仰安心の事は經文に斯くある故に斯く信ぜねばならぬなき、道理や文證に依りて強たりこて效あるものではなくして、宗の發つた根本思想、宗祖の人格や見識や言行、宗の境遇、末徒の賢愚、其の他夫れに附隨して起つた種々の事柄から、其處に何こも形容の能きぬ美味、光澤こても言ふやうなものがあつて、其の宗旨に接近するこゝき何故こも知らずまに、ひしく、こ身に泌み涉つて満足の情を發させる、其の美味を感じるこゝを稱して信仰と言ひ、其の満足を覺えるを安心と言ふのである、假令へば櫻の花には何こも解らぬ一種の妙趣があつて、其の盛りの麗はしさと言へば人を魅する魔力がある、此の花に對ふこゝき人は恍惚こして我を忘れ、而して爽快を感じる、其の氣持が宛然ら宗教の信仰、安心の状態に彷彿してをる、さりながら花の美しさ面白ろさなるものは何にものであろうか、櫻花は瓣や蕊や萼や花粉なきが寄り集つて形を成し、それが枝振よく咲き匂ふて、空は長閑かに、習々吹く風温かく而して周圍には新しい柳なきの愛らしい稚芽だち、樹々の間を縫ひ合せるやうに啾々たる鳥の歌ふ聲なきを採り合せて、洵に楽しい春景色の精を蒐めたのが櫻にして、春天の女王の粧に言ひ知らぬ妙味が津々こして溢れてをる、それが美感を與へ、悦びを與へるのである、さりながら櫻木を割り

て索むるも花の蕾の那邊にもなきが如く、宗教の理談を究めたりこも其處に信仰安心の所在を看出し得らるべくもあらぬ、設し恁かる方法に依りて之れを得たりこ思ふものあらば、思ふもの、誤りにして光りある蠶虫を擱んで蝨こ惟ひ誤りたるこ同様にして、寧ろ邪道に陥ちたる人なるべきか、古より高僧こ呼ばるゝ人にして往々無信仰、無安心にして無宗教に陥ちたる人も決して尠くないやうである、然るに後人たちが信仰問題の解決なりこ標榜して、或は都率往生を我が宗の安心なりこ言ひ、或は即疾頓成を我が宗の本旨なりこ言ひ、或は現世安穩後生極樂を安心こすこ説き、其の他種々の名目を立て提案を試みるものもあるも、多くは他の宗の安心談を聽きて一時之れに模倣したる付焼刃にして、熱烈なる信仰の聲にあらざるこ勿論なりこ惟はる、

近く例せば眞宗は信仰安心を説くに最も巧みなる宗旨にして、此の問題のモノボリーを得たりこ言はるゝのである、其の説きかたを見るに、

是非知らぬ邪正もわかぬこの身に、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり、淨土往生のためにはたゞ信心をさきこす、そのほかをばかへりみざるなり、往生ほこの一大事、凡夫のはからふべきこならず、ひこすぢに如來にまかせてまつるべし、凡夫にかぎらず補處の彌勒菩薩を初こして佛智の不思議をはからふべきにあらす、まして凡夫の淺智をや、かへす、如來の御ちかひにまかせてまつるべきなり、さればわれこして淨土へまいるべしこも、又地獄へゆくべしこもさだむべからず。



恁く深き信念の奥底より諄々として説かれたる勸誡には非常なる力がある。さりながら是れ等は信仰安心に關する告白にして信仰其のものではない。信仰を得たる後の實驗にして信仰其のものは、たゞ胸中に燃ゆる靈火なれば、聖者の心の裡に咲く花は彌陀より外に知る人もなし。又た口に演べ筆に書くべき術もないのである。春の霽の一盞の酔ひ心地、夏の日の一掬の清水の涼しさのやうに、味ふべく然しながら語るべからざる佛陀の靈光を感受する喜びを、安心と言ひ信仰と言ふのである。此の實驗を経たるものは之れを公衆の面前に告白するにせざるに、他人の問詰に答ふるに答へざるに論なく、美しき信仰生活に入つた人と言ふべきである。而して信仰を告白するが可にして、せざるが不可なるか、それは自ら別問題なるが、苟も宗教に觸れたるものは幾干つ、か皆な同じ信仰の實驗を経るのである。たゞ多くの人は其の實驗を経ながらそれを自覺せぬばかりである。假令へば春三月、上野公園に行きたるものは怡悦を感じざるを欲するも、それは頗る困難である。勿論中には自ら爽快を感じて居ることを知らず、又た快怡を感じることは自覺しながら何故に然るかを知らずして、自ら血湧き肉踊つて驅け出したくなる。之れは公園の春光の感化力であるが、宗教に一步を踏み入れたものも同様の經驗を遂げるのであるが、それを自覺せざるため又は自覺しても尙ほ之を告白することを成さぬ爲めに我宗なきは畢に信仰安心なるものは無きにあらずやを疑はせるに至つたのである。而して佛教中の聖道門に屬する宗派にては多く其の傾きがあるらしい。さりながら他の宗のことは暫らく別として、眞言宗の安心信仰の成行を明かにせねばならぬ。

我が宗の信仰安心は問題として新しく討議するまでもなく、宗の成れる當初に於いて之れは既に確立し居るものなれば、今はたゞ其を自覺すれば足るのである。されば我れ等の信仰安心を自覺せんとすれば、心裏に省み、眼を閉ぢ他念を去り心靜かにして、心鏡の上に顯るゝ種々の映像に向ひて、其れ等の中に最も明白にして最も力強き信念を捉へ來れば自ら解決せらるゝ所のものである。試に吾々の信念の中心點は何處にあるかを見るに、六大法界かあらず、四曼三密かあらず、阿字本不生かあらず、都率往生かあらず、大日如來か釋迦かあらず、斯かる高遠なる眞理や人格は、吾々の信仰を形成するところの素材ではあるが、信仰の對像ではない。櫻花に譬ふれば花瓣や萼や蕊や花粉に擬せらるゝものである。然らば高祖の神變なる事蹟かあらず、偉大なる人格か幽玄なる思辨か崇高なる教訓かあらず、斯かる具體的の事實は抽象的の理論に勝りて、深く生々したる信念を増さしむるのであるが、尙ほ信仰の眞核に非ずして、其を形成するところの材料である。花に譬ふれば花瓣や蕊をして麗はしく見えしむるところの色彩も言ふべきではあるが、まだ澤でない匂でない、吾々の心鏡の面には即事而眞の教や高祖の森嚴なる言行や、其他さり、に麗はしい品々を探り萃めたる其の上面に、更らに生々した花なれば洒したる優に美しい光澤の如くに顯はるゝものがある。それは則ち高祖の親子我が前に在りて我れを助けつゝある難有き恩惠である。斯の高祖の影像こそは信仰の眞核にして花の中の精もみるべきか、自覺せざる無意識的の信仰も省みればたゞ歴々として此の影像を見奉るのである。



未來の我が弟子等、此の教を翫んで二世の悉地を望まんものは、空海日々彼が房中に到つて當さに行者を擁護すべし、若し此の語にして一言も虚妄ならば、兩部諸尊の神罰を蒙らん。

高祖の大悲願も亦た如斯であつた、此大悲願に洩れずして我れ等一迷未斷の凡夫でありながら、常に高祖の尊影を拜し奉りて、今世の苦痛にも堪え、後世の暗黒にも懼れぬのである。たゞ斯の尊き信念を自覺せざるは我等の罪にして、高祖の慈悲に厚薄はないのである。斯の信仰の實驗の最も古く、遂げられたるは高祖の遺弟實慧なりと傳へらる。師東寺に在りて、支具灌頂を行ふたるとき、乘輿より下りて堂の西に進み、直ちに三摩耶戒場に臨みたるに、忽ち大師座右に現じ給へるを見る。師は駭いて、敢て進まず、眼を閉ぢて佇立し、深く冥護に愜へることを喜び、良久しくして、暈を開くに、尊容初の如くであつた故に、退いて東に折れ、逆行して高座に登ることを得たりと、されば實慧の斯の信仰を自覺したる初の人と言ふべきである。されき實のころを言へば、高祖は彌陀如來の如く、彼れ等を淨土に伴れゆかんと、曰はず、我が手に縋れども、曰はず、善を勸めることも、惡を戒しむる事も、し給はず、嚴格なる母の兒を擁育するべき、兒の愛に溺れずして、石につまづくも、泥土に塗れるも、如何なる事を爲しつゝあるも省みず、自由に兒が爲んやうを見て、少しも干渉せざるが如く、森嚴なる高祖は、彼れ等の前に在りながら、何の指揮も爲し給はず、意氣地なき兒たちには有るに、效なき母なり、怨ましむるも、尙ほ知らず顔にして、たゞ太陽の熱き光が平等に放射して、生けるものを養ふ如くに、慈愛の恩光を垂るゝのである。されば此の酷しき母に化せられたる彼れ等末徒は、復た頗る豪毅にして、生死を恐れず、現世に着せ

ず、恬淡として、浮世の波風を凌ぎゆくである。健全なる兒は、凛然として立ち、母の愛に狎れざれば、躓きたり、こゝて母を呼び、遊ぶこゝて他に往くこゝて母の手に縋り、母の慈悲に痴嬌る如き女々しき者を、嘔ふのである。されき憊る氣風の動もすれば、冷酷に流るゝ、恐あるも、それは月に村雲の嘆きあるこ均しく、寔に止を得ぬこころであるから、其の弊に陥ぬ要心をせねばならぬ。斯かる信仰は、他力宗の夫れ、大に趣を異にするも、櫻には櫻の而して、柳には柳獨特の趣味ありて、それ／＼に妙趣あるのである。桃に柳の粧をさせ、椿に梅の粧を爲さしめんとする故に、其結果は遂に狂態を致すに至るのであらう。

眞言宗にては、恚かる信仰、安心を有しながら、自覺するこなきために、又は之れを告白する事に慣れざるために、今さらながら、是の問題の解決を催すのであるが、是れやがて裏に、自覺を催ふするに至りたるこゝは、時代の新しき要求が、信念の告白を迫るこゝの切なるがためであらう。されば、縦しや告白するこゝが、本旨にあらずとすするも、其の要求に應ずるために、此の信仰を自覺し、其を適當なる形に移して、平明なる且つ優秀なる信仰の形體を造らねばならぬ。今はたゞ其の事のみ残つて居るのである。つて、信仰、安心は決して討究すべき問題ではないのである。

### 分不相應なる信仰

高祖の宇宙觀に依れば、法界はたゞこれ大日如來の體と相と用とにして、上は三世の諸佛より、下は



地獄蕃生、乃至金石塵埃の微に至るまで悉て大日如來ならざるはなく、一粒の眞砂にも諸佛と等しく、一切の功德を具備して些しも増減なく、十界差別の相は宛然法爾の曼荼海會なり。斯の根本思想より來る自然の結果として常に人間を解するにも、我は萬徳圓滿にして百福莊嚴の佛陀其のまゝの姿なれば、我が外に佛あることなく、佛は我がことなり、我が手を挙げ足を動かすは頓て佛作佛行なり。此の罪深き人生を非常に重くもて扱ふなり、然るに其の實踐の跡を見るに、高祖は却つて大なる厭世家にして、人の智恵の淺きを悲しみ、肉血の穢はしきを慨き、人の罪の深きとを憤り、利を惡み位を厭ひ、人天の果報の拙きことを嗤けり、山川花鳥の風光の醜きを怨み、詩人の喜んで歌ふ人生の趣味、人生の價値なきは何れにしても後生の障り輪廻の絆として斥け給へり、さればこそ當時朝廷の恩顧を一身に擔ひ天下の崇敬を一人に傾け、名聲は正に冲天の勢を示し、是より末世衆生のために更に更らに廣く堅く教田を耕さるべき理なりしに、然はなくして五十歳にして既に穀味を厭ひ禪味を貪り、一歳の壽命を四十年も短縮して、匆々にして入定し給へり、特に入定の時を陽春の最も盛なる花の季節と定め、梢に麗はしき華の満てる春に垂き給へるは、那邊までも假りの世の榮華を夢み給へる志に適へるなり。

等しく花の下に死したる西行法師は、「願くば花の下にて春死なん、其の望月のきさらぎの頃」と詠じて豫て花の下に死なんことを希へりき、されど彼は花に垂きて死したるにあらずして花に懷かれて睡れるなれば、彼は厭世の人と言はんよりは世の無常を面白きことに思ひ、美しき無常を慕ひ、無常を

喜んで歌ひ、無常を弄びたる傾きありて、死ぬるを寢るほごのことに惟ひ、己が死を観るこゝに花の下に肱を枕して臘月を眺めつゝ、一夜を宿りするほごのことに考へたれば、彼は無常を題目とし謳ふことを怡ぶ樂天的の詩人なりき、彼の無常觀は痛絶ならず悲壯ならず、其の無常觀を聞くものをして我れも其の無常に與らんことを願はしむるに足れり、實に花の下蔭に頓に往生する如きは何人にも面白しき喜ばるゝ風流ごごなり、高祖の入定は風流ごごにあらざれば、無常迅速、生死事大の悲しみを西行の如く詩の題目として歌はずして、最も嚴肅なる痛切なる人間の活問題として、凡夫のさしも大事に駭かぬ者のために最も善き教訓を與ふるなり、されば西行の厭世觀には蜜の如き味あり、高祖の厭世觀には針の如き傷みあり、入山興の中に(取意)

君見すや

九州八嶋無量の人

堯舜禹湯桀紂

西の婦の嫖母の支離の體なり

貴き人も賤しき人も惣て死に去んぬ

歌堂、舞閣は野狐の里となり

君知るや否や

人は此の如し汝何ぞ長からん

君見すや

古より今來無常の身なり

八元十亂五臣

誰か能く萬年の春を保ち得たる、

死にさり死にさつて灰塵に作る、

夢の如く泡の如く電影の賓なり、

君知るや否や、

朝夕に思ひ思へば腸を斷つに堪へたり



汝が日は西山に半ば死れるの士なり 汝が年は半ば過ぎて戸の起てるが若し、  
 住まらんや住まらんや一も益なし 行きね行きね止るこみを須ひす  
 去來、去來、大空の師 住るこも莫れ住るこもなけれ乳海の子

南山の松石は看れども厭かず 南嶽の清流は憐れむこも已ます、  
 浮華名利の毒に慢るこも莫れ 三界火宅の裏に焼かる、こも莫れ、  
 斗藪して早く法身の里に入れ、

縦しや人生には少しばかりの趣味あるも、此の苦空無常無我なる人生の儚きを救ふに由なければ、  
 茲に人生を捨てて人生の趣味をも厭ふて、人生の外に、人生に超越したる新しき濁き世界を看出すなり、  
 斯の新しく看出されたる世界にも等しく鳥あり華あり日あり風あり人あり菩薩ありて、宛然前に捨  
 てたる人間の世界に異ならざるも、此の新なる世界に在る華や鳥や人は凡夫の世界のそれと物柄を  
 異にして、人間の住める世界が泥土を持って造られたる者なりとすれば、此の新しく看出したる世界は  
 黄金を持って作られたる世界にして、茲にかの賤しき人間が獨り跋扈して、人間のみが尊ぶとく、人間爲  
 本の狭くろしき處にあらずして、佛陀を本とし何事も佛陀の御心のまゝに作りなされたる世界なれ  
 ば、此處に在りてはさしも放縱なりし人間も是れまでの威嚴を失ふて、其本性なる我儘なきは少しも  
 許されず、さればとて賤しめらるゝにもあらず、たゞ狗や猫や花や月や磔なきが尊ぶとまれるほきに  
 尊ぶとまれて、人生觀なき言ふ人間にばかり都合のよき論理は更らに何の用にもたゞぬなり、茲には

宇宙のみありて人間世界なる者なく、哲學はなくして眞理のみあり、藝術はなくして美のみあり、宗教  
 はなくして至善のみなる世界なり、此世界に入るを解脱と言ひ永劫の生涯を取るべき理想の境なり、  
 所謂學者なるもの常に慙かる世界あるこもを信じ、慙かる世界に至らんこもを憚りし、而して慙かる  
 世界が現實の娑婆を出でずして得らるゝこもを論じて、當相即道なりと言ひ、諸法實相なりと言ひ、心  
 外無別法と言ひ、頗る無雜作に手つ取り速く達せらるゝものゝ如く言ひ做せるも、之れが抑々誤りな  
 り、小さき渠を越すにも力を罩めて蜚ばざる可らず、愚なる罪深き我このまゝにして何とて彼の尊  
 ぶとく新しき世界に入らるべきぞ、此の汚れたる娑婆が何とて佛の道に協へりと言はるべきぞ、當  
 相即道と言ひ即事而眞と言ひ諸法實相と言ふこもは、かの新しき世界に至り其處に住めるものゝ言  
 ふこもにして、我等には斯かる大膽なるこもを言へよとては、大悲深重なる佛陀すらも許し給はざるこ  
 ころなれば、其のやうなるこもは凡夫が勝手の言條にして、僭越此の上もなきこもなり、現に高祖です  
 ら斯の現實の我を捨て、初めてかの新しき世界に入り永劫の生涯を取り給ひしならずや、高祖の山  
 中有何樂の中に取意)

我は惡を息め善を修する人と名く 法界を家として恩を報する賓なり、  
 天子は頭を剃つて佛陀に獻じ 耶孃は愛を割いて能仁に奉る、  
 家もなく國もなく郷屬を離れたり 子に非ず臣に非ず子として貧に安んず、  
 一杯の濁水に朝の命を支へ 一咽の山霞に夕の神を谷ふ



蕪草ミ體を覆ふに堪へたり

荆の葉ミ杉の皮ミは是れ我が菌なり、

(恚くて世を遁れた恚る人 次の新らしき永劫の生涯に入るなり。)

意ある天公は紺の幕を垂れ

篤信の龍王は白き帳を陳ね、

鳥は時に來つて歌ふて一たび奏し

猿は軽く跳て伎は倫を絶す、

春の華秋の菊は笑ふて我に向ふ

曉の月朝の風は情塵を洗ふ、

塵滴に過ぎたる一身の三密を

十方法界の身に奉獻す、

一片の香煙ミ經一口ミを以て

菩提妙果の因ミ爲す。

草に垂き月に垂き、澗水に命を支へ山霞に神を養ふて、捨て難き人生の執着を脱したるものにして、諸佛聖衆ミ具に眞の出世間の新しき生涯に入るこゝを得るなり、たゞ利のため名のため愛生のため、にのみ動ける我等の行爲を指して、それを直ちに佛陀佛行ミ觀するこゝなきは祖師己上の見識なくて、適はぬこゝなり、高遠なる理談にてさへあれば善きこゝにして、何事にも宗の深義を持ち出して、獨りよがるこそ却つて凡夫の淺き智惠の故にして、慙しきこゝなり、高祖は常に我等未徒を愚かなるものとして、慙れみ、又た嚴かに遺誡して、

門徒數千萬なり、雖も併に吾が後生の弟子なり、親り吾が顔を見ず、雖も吾が名號を聞かんものは恩徳の由を知れ、是れ吾が白屍の上に更らに人の勞を欲するに非ず、密教の壽命を護り龍華を三庭に開かしむべき謀なり。

ミ誨へ給へるも、未だ會て汝、我ミ等しく菩薩の高位に在りて無爲の常樂を享くるものなり、ミは允し給はざりしなり、經文の我則ち法界、我則ち法身、我則ち大日如來、我則ち金剛薩埵、我則ち一切佛、我則ち一切菩薩、我則ち緣覺、我則ち聲聞、我則ち大自在天、我則ち梵天、我則ち帝釋、乃至我則ち天龍鬼神八部衆等なり、の文は、生死を解説したる後にこそ、深き意味あるも、我等には何の價も知られざるなり。

されど如何に我等は嫌はるゝも、祖師の本意に背き參らすも、飽くまでも、本尊の三摩地を修して速かに三妄執を超へて三菩提を證せん、こゝを志すは、切めても秘密佛乘に結縁して順次向上を遂げんこゝを欣へばなり、而して一は一日も長く密教の壽命を護り、高祖の照鑑に與らんがためにして、是れこそは奉謝の一端ミもならんなり。

佛以忍爲鏡 精進爲鐺鉞 持戒爲大馬 禪定爲良弓 智惠爲好箭  
外破魔王軍 內滅煩惱賊 是名阿羅訶 (智度論)

### 二 一種の信仰

九重の雲深き吹上の御苑には、今黃菊白菊が艶に妍に妍に秋の香り高くして、月卿雲客はいづれも拜觀の榮を得て、をく白露の惠の下枝にも、溢きに感泣するのである。園子坂にも菊が美しく植られて、うらかなる此の小春日和には、彼處に筈を曳くものが多い、而して又た我が背門の掌ほさの空地にも二



株三株の菊が、中輪の花を着けて矜り顔である。さて御苑の花ミ園子坂の花ミ我が庭の花ミは、色や瓣や葉やミても較べものにはならぬのであろうが、何れも一つ菊で種子も本は一つであろうが、御苑の菊が我々には親しうて那の菊が早く間に合ふであろうか、御苑のは尊しく、園子坂のは美はしく、見たいものである。ミは思ふが、單に聞き傳へた物から菊の觀念が得られるであろうか。言ふまでもなく夫れは能きぬ。菊の觀念は自己が目前に看て、自己には最も親しい物から其の觀念を最も多く得て來るのである。さりながらまだ見たミはなく、自己が知つてをるよりも適かに優れたものが餘處に有るミを聞いて居たならば、菊を思ふミき、其れを想ひ起さずには居られぬ。而して自己が菊の觀念を作るミき、夫れが幾分か手傳をする。此の場合にも御苑の菊や園子坂の菊や、我が親しく見てをる背門の菊や、いづれも皆な有るミは事實で、其れに疑惑はない。

既に菊が有るミいふ事實を信するに就ても、目前に觀たものミ、觀はせぬが有るミ聞いて夫れを信するミの二種がある。而して是れは孰れも事實を信するのであるが、其の間には自ら區別がある。此れミ同様に佛を信するミにも亦た二様の信仰がある。其の一は現に佛なり菩薩なりを觀て來た、而も肉眼で親しく見たから夫れを信するミいふので、其の影像たるや因より法界大でもなければ絶対的でもなく、少し大きな人間ほごの等流身を觀たのである。菊で云へば背門に在りそうな輪も大きくはない澤も置しい花ではあるが、つい様さきに咲いてをるミいふやうなものである。其の二は絶対大の

相好圓滿な佛で、是れは肉眼でまだ見たミはないが現に實在してをるので、釋尊も見て來た、祖師も見て來たから慥かに實在して居るので、夫れを信するミいふのである。復も菊でいふミ、御園の麗しい花は我々下々こそ見たミはなけれ、卿相たちは實際觀て來て其の美事なるに感じてをるではないか。見に往ける身分に成りさへすれば見らるゝものミ信するやうなものである。斯の二つは孰れも事實を信するものであるから、それに甲乙はないやうであるが、一は實驗的に自己の經驗を基とするのミ、一は論理的に事實を集めて證據だてるのミ不同がある。一は化學的に事象を上げるものミすれば、他は數學的に事象を豫表するものである。而して現に佛なり菩薩なりを見たから信するミいふのは密教で、信じさへすれば見るミが能きるミいふのは其の他の宗教悉てある。

例を取つて見れば、眞宗にいふ彌陀如來なきが既にそれで、村上博士は彌陀如來は人類の如く生命あり意思あり運動あり活力無限の報身事佛である。ミいはれたが、さて其の事佛たる陀佛は那邊に居らるゝか。ミいへば、依然十萬億土の彼方にして、此の世では觀るミも遣ふミも能きぬ。又た此の土で會ふミも思はぬ。臨終正念のミきにはかの尊の來迎ありミは聞くも、それミても臨終に初めて會ひ奉るので未來に屬してをる。されば阿彌陀佛を信するも觀て來ての後ではなく、たゞ觀るミが能きるミいふ金鐵の約束を信するのである。隨つて事佛を信するミいふけれ、尙ほ形式の上でのミで、阿彌陀佛も理想を本尊ミしたもので、たゞ其の理想の内容を豊富にしたゞけであるから、詮すれば理の宗教ミいはねばならぬ。其の他法華にいふ久遠實成の多寶佛も、華嚴にいふ華藏世界の盧舍那佛も、



肉眼で現に見たさいふのではなくして、法に依つて努めさへすれば観るこゝが能きるさいふ側の佛である。勿論信なきものが見られそうな筈はないが密教は全く之れに反対で、信も不信もなしに、いきなり佛なり菩薩なりを觀るので、それには眞言も要らぬ題目も要らぬ、佛が在りや無しやを知らぬ者も觀れば之れを愕かりて撥無するものにさへ顔を示すこゝもある。聲を聞かせるこゝもある。實際五官に觸れるものであるから夫れを信するこゝ云ふのである。背門の菊は勳位なきも木戸錢を拂はずも、朝な夕なに目撃する。見まじこも臉を閉ぢれば衝突かる。香がする。其のやうなものである。三世十萬の諸佛菩薩は皆な是れ自身の薩埵であるから信するも信ぜぬもないので、自己の在る限り佛菩薩に遭はぬ譯にはゆかぬ。其れは祕密傳持の因縁からして既にその如くで、龍猛菩薩が塔門を闢かんこするこゝ、早や金剛神が出て来て忿つて入れやうこせぬ。竊かに塔内を窺へば香華燈明は内に充ち満ちて、美妙なる讚歌の聲さへ聞える。辛ふじて允されて裡に入れば、無數の佛菩薩がたが駢んで居らるゝ、而して法門を授かつたのは此の見佛の後であつた。高祖も未だ四五才の幼童の時から、常に菩薩聖衆の群に入つて交はられたのである。又た新發意の加行にも、堂に入れば既に胡麻の如く羅列し給ふ諸尊を見奉る。見るばかりでなしに七寶の纓絡を以て道場に迎へ奉り、香華飯食燈明を饗應して且つ讚歌しまいらせ、再び寶絡を送つて本座に還し奉るのである。衛門三郎は頗る邪見にして毫しも佛を信じななんだ人である。然るに親り高祖の影像に遇ふて現罰を受けた、無佛性の人が諸佛諸神の怒りに觸れたこゝは稀しくない。要之密教の信仰は、未來に往いて佛を見るこゝが能きるこゝ信するのではない、現に

見た逢ふたから信するのである。かの六大四曼三密や、法身報身の説も佛菩薩を見るための法門に云ふよりも見た後に見佛の事由を辨證するための法門である。密教の初門は見佛である。見佛の事實がなかつたなれば、藏經に收められたる四百九十九部九百三十一卷の經疏も、一片の故紙に擇ぶこゝろはない。密教を論ずるものは見佛から行かねばならぬ。見佛を措いて法門から詮索するのは順序を誤つたものである。何故に我等が佛を見るか。釋ねるこゝき、佛は其の因縁を説いた、其れが兩部の大經である。大日經の文相が其の適切なる證であらう。佛が三無盡莊嚴の瑞相を現ぜられたこゝき、瑜伽の諸尊は法界に遍滿してをるのを見た。金剛薩埵は見て驚いて、佛は如何にして此の一切智々を得給ひしや。こゝ問ふた。是れが説法の端緒にして、佛が如實知自心に在りて説き出された。さて如實知自心は如何なる義か。さいふ故に、己下三句の答説となり九句の問答を展轉して來たのである。實は法華なきも此の通りであるから、一行阿闍梨は斯の經を祕密に扱はれたのである。然るに他宗の祖師たちは、かの瑞相を單に佛の説法の外儀に解してをる。且つは文の上にも瑞相に説法との聯絡が取れてをらぬから、單に外儀にしたのも理りである。従つて法華が純然たる密教でない、此の道理を辨へずして、法門の方から密教を見て、依然普通佛教と同様に解して、此の教には大日法身を本尊とするから、理の宗なりさいふ人も出るのである。

他の宗教が先づ法を薦め、法に依つて佛なり神なりを觀させやうとするこゝき、密教は法よりも先づ以て佛を見させやうとするのであるが、それにも自ら二つの方法があつて、其の一は諸佛菩薩の尊影



を示し、頓て虚空に遍在せる聖衆を觀る衝動を誘ふために、結緣灌頂の壇に入れて曼荼羅を見させるの。其の二は阿闍梨自らが佛も菩薩もなつて、三密加持の不思議力を示して、目前に神通に觸れさせるの。其の例として、高祖の附法傳に、不空三藏の條下に斯ういふ因縁がある。

玄宗皇帝に一人の鐘愛し給へる公主が有つた。忽ちに病に罹りて薨去せられた。皇帝不空三藏を請じて命じ給はく、朕に鐘心の少女有りき。忽然として命終せり。生死は命なり。雖も其の不幸を惜しむ。冀くは和上加持して蘇息せしめよ。和上則ち兩人の乳母と二人の童女を喚び、淨衣を着せて加持すれば、彼等は咒縛せられて便ち地に伏して息絶えた。乃ち左右に命じて闍羅王に告ぐる牒を作らせた。それよりの死せる四人の側らに於いて披き讀せたるに、四人は一時に起きて坐した。和上曰く、此の文牒を誦して惚るゝ。こまなきか。答へて曰く、得たり。即ちこもく誦せしむるに一字も錯らなんだ。便ち告て曰く、汝等直ちに去つて闍羅王の所に至り、此の文牒を宣べて公主を將いて來れ。言ひ畢つて四人俱に死し、其日の辰の時より翌日の初夜に至つて、四人及び公主は一時に甦つた。公主の曰く、闍羅王和上の牒旨に因て更らに却へり參らせたり。然るに命を受くるこま限りあり。決定して延ばし難し。更に此の國に住すべからず。三日の後命終しなん。帝更に公主に相見るこまを得て嘆伏せり。云ふ直譯。

其の他、恚かる例しは諸大師の傳記に頗る多い。實に高祖の一生は殆ん奇蹟である。然るに夫れは高祖在世の日のこまで、此の世を去り給へる後に、末徒にして恚かる不思議力のあるもの、出るこまは

期し難い。而も此の事實がなかつたなれば、則ち秘密の命脉の斷絶する時で、かの灌頂壇に入れて曼荼羅を示すこまも、終に一片の形式になつて畢ふのであるから、遺教の講讚よりも此の方が肝要である。さりながら、恚かる阿闍梨は多きを望まぬ。たゞ一人で可い。今高祖は娑婆の定規に悖らずして、而も自ら永遠に生き、萬葉の末までも秘密瑜伽の現證に立たるゝ事に決心せねばならぬ。こま、なつたが、則ち高野山の入定である。設し高祖にして、單り法を駐めて衆生を度し得るならば、四百九十九部九百三十一卷の秘密經、高祖の遺稿は金石に鏤ばめても萬葉に残る筈である。盧舍那佛、阿彌陀如來は盡未來際十方世界に遍滿して應化の跡を絶たぬのではあるが、肉身を駐めて見佛の現證者となり、見佛を誘ふ人は單り高祖の誓願である。恚くて秘密教は高祖の入定に依りて永遠の生命を維持せらる。高祖の入定なくんば、秘密教はなきに齊しくなる。従つて他の宗旨にては、絶對的報身佛や、全能の神を憧憬し信仰の對象としてをるこま、密教は入定して居らるゝ、現身の高祖が信仰の中心となつたのである。設し事の宗教のこまをいふならば、此れほき現實的の宗教はない。此れほき現金なみかひなものはないのである。



## 第四 藝術 章

(自明治三十九年頃  
至同四十二年頃)

## 吾 徒 の 聲

現代日本の思想界は渾沌たる状態で、師崇もなければ統一もなく、百人百種、言ひたいまゝ、言ひ、思ふまゝ、行ふて、更らに歸着するところがないのである。試に人の多く集まる地に往きて其の體裁を見るに洋服あり、チヨン鬘あり、羽織袴あり、前垂掛けあり、駒下駄あり、雪駄あり、靴あり、草履あり、異様奇態、古今東西の風俗を一時に陳展したる趣がある。思想界の亂脈が全然其の如くである。併しながら支那人の思想は能く一統して、をるが、其の統一した思想が幾世の間沈滞し固定したので、其の國の運命は決して祝すべきでなかつた。思想の固定は往々にして亡國の徴をなすものである。さりて剩りに雜駁で統一のないものも欣ぶべきではない。さて然らば斯の渾沌たる思想は那邊に落居するのであるかと言ふに、それは濶識の士でもなかなか豫想することには出きぬであらう。何故なれば日本の學者たちは、今ま現に西洋の學問を輸入しつゝあるところであるから、泰西の偉人の大思想に接觸する毎に日本の思想界は、根底から大變動を醸すのである。少しく溯つて維新當時からのことを考へて見るに、維新の初め、日本人は全く世界見ずの箱入りであつたが、西洋の文物の珍奇なるに先づ驚かされた。斯れを駭きの手始めとして、次で耶蘇教を聞いて再び愕きを増したるに續ひて英國から盛んに新思想が



移植された。中にもスベンサー・ダウキン・ミルなどは最も熱心に歓迎された人たちである。日本の思想界は此のとき三度駭き騒いだのであつた。斯れに少し遅れて獨逸からはカント、ゲーテ、ヘーゲル、ハルトマン、ヴントなどの思想が大河の一時に決したらん勢で、猛然として注ぎこんで来て、向きの英國派の思想と一混して、狂瀾はさらに激して澎湃たる怒濤を成した。斯くて日本の思想界は四たび驚天動地の大動亂に遭ふたのである。其の間に介在してカーライル、シヨツペンハウエルの如き大思想家なども紹介せられて、各々一方に雄を稱して居たのである。斯かりければ、他の國民ならば此の時、既に思想の過度の爲めに胃囊は張り裂け、腦は逆上して碎けて了ふた理であるに、そこはさすがに日本人の優れたるところであつて、斯の混沌たるを物ともせず、尙ほ飽かずまに眼を北境にまで注いで、露國からはトルストイ、那威からはイブセン、それに獨逸からはニーチエミ云ふ風に、八面から大思想家を掃き集めて來たので、息する暇もくれず思想界の混亂は、ひたぶるに混亂を重ねるに至つたのである。此の第五度目の動搖に因りて、日本の思想界も最早や大感亂の絶頂に昇り詰めたので、今一步すれば迪かに雲漢より那落の底に眞つ倒しに落つるさゆふ、生死の岸頭に臨んで間一髪、奈何になりゆか雲ゆきさへ定まらなかつたが、恰もよし、其の時日露戦争が始つたので、思想界も一時勢を潜めた。言はゞ戦争で水が入つたのであつた。さて戦争も収まり、軍人や官吏は滿洲の痕掃除に惶しいさきにあたり、思想界の方も大紛糾の痕始末をつけて、何れにか思想の統一を索めやうと云ふのが、則ち現今の思想界の状態である。此の上如何なる思想が輸入せらるゝか、豫想は出来ぬが、さても今の思想界の天地に

又も龍攘虎鬪の激變を起させるやうな大勢力のあるものも無いやうに思はれるで、日本の思想界が維新以來初めて安康を得るに至るも餘り遠くはあるまじ、さば識者の豫報である。

近代の斯の思想界の永き動搖の中心は、言ふまでもなく學者社會であつた。實は宗教家は斯の渦中に投じて、濁波を揚げるほどの勢力はなかつたのである。たゞ其の餘波の緩るやかなうねりに、一ゆり揺らるゝや、何んの支へもなくへたへたゝゝになりて高浪の中に綱でなき孤舟のよるべなくて、かの濤と共に躍りて、教義を疑ひ儀式を疑ひ習慣を疑ひ、社會も均しき疑懐に陥り煩悶となり破壊となり、光明は再び仰ぐべくもあらず、洵に日本宗教の斷末魔に達したるかと思はれた。斯くて吾徒は思想界の狂瀾に翻弄せられ、西に東にゆられもまるゝうちに、一朝茲に、順風に遭ふて原の港に達したるを喜ぶのである。定めなき思想界の波に泛び漂ひたるは誤りであつた。原の港には自ら光明あり山川あり草木禽獸ありて、我が徒が立つべき瀬はこゝにあるのである。されど此處に立つに先きだちて問ふた「現代の吾が徒は那邊に向ひ何事を爲さんとするや」と曰く「知らず」眞言宗なる團體は世世紀の社會に存在し得べきか、且つ吾が徒が頼りて以て動くべきか、「曰く爾」如何に動くべきか、「曰く五個條あり」斯の答を得たのである。乃ち吾が徒は斯の答を得るや今までの如く主義なく方針なく、社會の風潮と共にさすらふことなく、臚ろけながら吾が徒の向ふべき方角を定めたのである。本團が掲ぐる五個の綱領は則ちそれである。綱領は幽玄なる論理の歸着點にあらずして、平凡なる實行の標的である。由來自宗の思想家は理論を觀念を頻りに高くして、寧ろ小さき實行を賤しむ風がある。素より上根上智の人は、一念



の間に天地を廻轉させるやうな働もあるかなれど、普通人にして今の社會に在るかぎり、高き觀念と理論とに伴ふて、小さいながら實行を示さねばならぬ。綱領は宇宙を一擲する偉人には必要なく、眞に一人を首肯させる人に須つのである。教理と行規と安心とは炳乎として別にあり、綱領は教理安心を批判せんがためにあらずして、修養して何にせんかを問ふ人に對する答である。教理安心を懐いて尙ほ且つ何れにか向ひ何を爲さんぞ迷へる人に薦めるのである。教理安心を懐いて市に隠れ山に隠れたる人に薦めるのである。

眞言宗は日本國民的の宗教なるを信す

略解 大和民族は今も尙ほ高天原には天照皇大神を天皇と冊づき、八百萬の神々たち周圍に侍し、天の大御酒を飲み、天の伎樂を奏して、且つ歌ひ且つ舞ひ、常にはに光り長閑なる状態を宛然らに偲ぶのである。洵に是れ大和民族の理想、國民道德の根本にして、國體の幾萬世に搖ぎなき礎である。此の思想の壞れる日は大和民族の氓る日である。他の多くの事實よりも、此の思想が眞言宗の法界宮で大日如來が曼荼羅の聖衆と唯佛與佛、自受法樂せらるゝ、まことに似通ふてをる。密教は大和民族のために成りたかの觀がある。日本民族が密教を捨てることの出きぬのは之れで、又密教が特に大和民族を可憐しく思ふも是れである。密教の教義は言ふまでもなく絶對的であるから、一民族の思想と合致したりして、さしも衿るは謬りにて、眼光は頗る狭劣なるも、せめて其狹隘な日

本の國民的宗教たるの實を擧げばや、高祖ですら大和民族を救ふに忙はしう、大和民族の守護神にて満足せられたるやうである。

事教二相を以て修養の規矩とす

略解 宗の圈内にあるものは其の經軌が其言動の師崇である。成程時勢もありて人情もあるものから、特に末代下根の輩が祖訓の通りに行るなきは、或は僭越の沙汰であるかも知らぬ。言ふまでもなく練行怠らず、菩薩にも佛にも成りたき願は皆な一つながら、其前に先づ人として恥かしからぬ人格を作るこそが第一歩であるから、今の時勢に處しては、よしや經説にはなくとも、實現して行かねばたちゆかぬことはあらう。自體現状の宗風を成したるが既に國風時代風と同化しつゝ、きたからである。さりして宗の根本義を捨て、宗徒でありながら、三密の行を非定して迷信なりと叫び、利己主義を主張し、さては肉慾専念主義を鼓吹し、其他社會から爪弾きさるゝやうな説に固執し且つ行動を敢てする如きは、斷じて看過することできぬ。事教の精神を根底として、自ら修め且つ主張せねばならぬ。

近世の學術は秘密曼荼羅を莊嚴するものなるを信じ之れが研覈を怠らざるべし

略解 歴史以來の學問の大なる系統を言へば、支那の學問と印度の學問と泰西の學問との三つであるが、現今支那の學問の状態は、自國の學問と印度の思想とに沈滞して、西洋の學を輸入しながら、齟齬する力がなく、印度には多少西洋の學問は輸入したが、支那の思想とは餘り深く接觸せず、泰



西は自國の學問は殆んど天下敵なしと勝ち誇つてをるが、支那印度の思想を味ふことは淺いのである。日本は千年已前より支那印度の思想を呼吸したる上、過去四十年の間に泰西の思想を略呑み込みたれば、今世界の三大思想を併せ呑んで居るものは日本人ばかりで、世界一古今無類である。されば一面から言へば現代日本の思想界は大混亂に陥つてをるが、之れを美化してみれば、萬朶の花一時に煥發して、心王心數無盡無量の智力が滴るやうに麗はしう咲き匂ふてさながらに曼荼海會がやがて此世に實現すか、疑はれるのである。今の世に高祖の出で給は、如何に喜ばせ給はん、さるにても何事につけ思ひ出さるゝは高祖なり、吾徒此の花、手折らずや。

吾宗の眞面目は藝術に依りて發揮せらるゝものなるを信じ之れが練磨を努む

略解

眞言宗と藝術とは根底に於いて密接なる關係を有するが、暫く日常の事實に就て言ふに、眞言宗徒は即事而眞の教義の上にたちて、三密の法門を翳すものから其氣位いは、頗る豪らく吾れは是れ大日法身なりと任ずるのである。さりながら其の大日如來が文字は金釘流にて猫も虎も描けず文も成らず詩も成らず、音樂も知らぬ彫刻も成らぬ無藝無能とありては、さて大日如來も冷汗なるべければ、三密の行を眞に修證修顯して、一印一相に冥會冥合する阿闍梨ならば、藝術に於て自在を得べき理である。未代の者にて、せめては大阿闍梨の面影を偲ぶすが、文字は普通人よりも能く書き、見取り畫位も心得て文も一通り音樂も一通り聞き分かねばならぬ、淨土宗は念佛風、眞宗は説教風、禪宗は一喝風、法華は團扇大鼓風、修驗者は護摩風にできてをるが、眞言宗

には藝術が相應しいのである。其處に高祖の面影がある。其處に深い意味があるのである。

現在の寺院は之れが組織を改善すれば現代の日本が要求する宗教機關と

甚しき軒輕なきものなるを主張す

略解

社會の一部に寺院を詆り僧徒を罵り新宗教の發顯を要望する、僧徒のうちにも此の聲言は附和雷同して、寺壞せ僧徒放逐せよと呼ぶものあるかなれど、社會如何に痛罵詰責を極めたりとて、十萬の僧徒七萬の寺院は依然として存在するものである。素とて寺院は僧徒の私に創めたるものではなく、國民性の要求であつて、國民の要求するまゝに寺院は作られてをるのであるから、國民性の造り改められぬうちには、今の寺院も僧徒も不用ではないのである。各地に學校と村役場を要すると同じく、切實に現在のまゝの寺院を要求するのであるから、僧徒は權威と光榮を以て施物に衣食すべきである。又小學校がベスタロッチを以て滿されぬ限り、村吏員がビスマルクを以て充されぬ限り、社會が要求する如き大宗教家でなくとも、寺院生活して差闕えはないのである。さりながら村寺にある人には、其處に相應しき學術と信念を要求するのである。此の點に就ては、社會の側にたちて非難の聲に耳を貸さねばならぬ。僧徒が當面の急務として、自己の責務を果すに適當なる人たらねばならぬのである。今此の五個の綱領は其人だに薦めるのである。

綱領は本團が依りて以て立つ所以にして、斯の主義の下に働かんとするものなれば、逐次



機に觸れて鼓吹するに努むべきも、茲に大體の意味を明かにして、識者の指示を俟つに便せん。

小罪を輕んじて以て殊なしとすること勿れ、水の滴り微しと雖も漸く大器に盈つ、刹那の造罪殊無間に墮す、一たび人身を失つれば萬劫にも復へらず、壯なる色の停らざることは猶ほ奔る馬の如し、人の命の無常なることは山の水よりも過たり、今日は存すも雖も明けなんまでは亦保ち難し、衆等各々一心に勤修精進して、慎て懈怠し懶墮し睡眠して意を縱にすること勿れ、夜は即ち心を攝めて三寶を存念せよ、以て空過し徒らに疲勞を設けて後代に深く悔ゆること勿れ。……(梵網經序)

### 藝術と眞言宗

現象界、一に何ぞ浮虚なる、浮虚にして自然に千態萬狀を成せる、何ぞ興味の深からざる、清淨にして無限の勢力を有てる平等の實在體のかなたを撃ちて山に成し、こなたを掘りて海に成し、かしこを掘りて陸に成し、こゝを千斷りて人畜獸に成す、洵に新粉細工の馬鼠、大根を造るが如くにして、この現象界は在るなり、何をか怪まん、汝も我も、同じ白にて搗きたる餅の一片々々にして、我の肉體も自己も

は我も汝も離れざるが如くに離れざるなり、我も汝も、若し二人なれば我も自己も二なり、自己も我も同一なるが如くに、我も汝もは一體なり、我は斯く狭き肉體の裡に囚はるべきにあらずして、直ちに宇宙の大なるなり、我は宇宙が有てる渾ての勢力も、渾ての富も幸福もを有ちて、曾て置しからざるなり、假りにこの肉體の囹圄の裡に、我を繋ぎたりせせんか、俘はれたるも虎は依然として虎なり、我が智慧は聰敏なり、目に觸るもの直ちに直下に通曉せざるなく、耳に觸れて忘失することなく、手にラフワエルや、義之や、ゾトーンの妙技あり、舌に釋尊や耶蘇の能辯あり、意ゆけばシエキスピヤー、プレトリーの詩も文もあり、劍を持っては奈翁の軍あり、笏を採ればビスマークの政治あり、陶朱の富、關公の美髯をも具備して、佛陀の幸福も神の感力も、因より羨望するに足らざるなり。

試に文明の彩華として、荐りに矜れる、かの藝術も宗教も學文もを見ずや、藝術もは、かの實在界の形式の發現にして、實在界の形式に順ふて動くものは天才なり、天才の情緒は詩歌なり、彼の目は繪畫なり、彼の筋肉は彫塑なり、彼の舌は謠曲なり、彼の耳は音樂なり、彼の六根の動く痕に悉べて美を印するなり、世人の貴重する天才の制作品の如きも、彼に取りては、何等特異の價值を有するものに非ず、我は其の天才なるべきを思ふ、宗教もは、實在界の目的の發現なり、宇宙は相率ひて絶待善に向上するものにして、其の精神的なるものは釋尊クリスト等の主張する宗教も成り、其の肉體的なるものは軍人も成るなり、一は精神界の善を提唱して邪執を碎き、他は肉體界の善を擁護して不貞の徒を征す、斯くて俱に向上して、平和を鼓吹するものならずや、我はこの宗教的天才なるべきを思ふ、學文もは、實在界の



存在に變化の發現にして、虚妄を眞實、源因を結果、善を惡を裁断し、宇宙の萬像を整理せんことをものなり、而して其の靜かなるは學者にして、動くは政治家なり。一は眞理を究むるにあり、他は之を施行するにありて、俱に宇宙の變化を發展を導かんことをなり。我は又た、其の學文的天才なるべきを思ふ。斯くて藝術が目的とする美、宗教が目的とする善、學文が目的とする眞は、畢竟實在界の三方面の異なりたる顯現にして、海水の青碧なる、塩味なる、濕潤なるの如くなり。眞善の在るころ美ならざるなく、眞は實在界の體にして、美は其の相なり、善は實在界の用にして、美は其の相なり。されば學者は必ず宗教的善人にして、同時に美術に堪能なるべきを豫想せらる。彼が學者なることを表明し得べきものは、彼の著書の多寡、立論の正否にあらす。又た其の善行にもあらす。藝術的技能に依頼せざる可らず。宗教家は必ず哲人にして、同時に美術に堪能なるべきを豫想せらる。彼が眞に宗教家なることを表明するは、其の德行にあらす。博識にあらすして、藝術的技倆の著るしきものなかる可らず。藝術なき宗教家あり得べからざるなり。實在界の眞善に親馴するこの淺深は直ちに藝術的技倆の優劣に顯はれ來らざる可らず。この實在界の眞善美は、那邊に求めて得らるべきか。是れ我の全體を成せるものならずや。實在界の善は下りて我が意思を成し、實在界の眞は下りて我が智を成し、實在界の美は下りて我が感情を成せり。斯くて我は善||意||眞||智||美||情に於て絶待的自由を有するものなり。

眞善美に於いて、絶待的自由なる可き我は、この狹隘なる五尺の肉體の裡に幽閉せらるるに

至りて、本然の活動は妨げらるるなり。若し我にしてこの手なくば事にして何をか爲し得ざる。この目なくば物として見えざるはなからん。この口なくば我は奈何に能辨なるべきぞ。目ありて一里のうちに視界を限り、足ありて一步のうちに移動を限らる。五根の狭少なる經驗に憑りて、我は智能の最も魯鈍なるを致せり。試に筆を執りて畫布に向はんに、手は描くを援くるにあらずして、却つて想中に成れる影像を塗抹するなり。紙を展べて文を作さんとするとき、思想の確なるを憂へずして、却つて湧涌する思想は、或る意中の雲霧の爲に蔽遮さるるを覺ゆるなり。復た崇高なる景象に對するとき、我が目の眺めるを怨み、幽玄なる音楽を聞くとき、我が耳朶の聳せるを歎く、之れ我が愚痴にあらずして、自由なる靈の痴鈍なる肉體を喰ける聲にあらずや。されど我の手を持てるは、景象を描かんが爲め、音楽を奏せんが爲めにあらずして、薪を截り畑を耕し禽獸を獵らんが爲めなり。我が皮膚の粗荒なるは、寒暑風雪に抵抗せんが爲めに發達したるものなればなり。眼は自然界の美を鑑賞せんが爲めにあらずして、食物を衣服を索め、敵を獲物を捜さんが爲めに有り。口は玲瓏たる歌曲を謳はんが爲めにあり。らずして、罵り諍はんが爲めに有り。耳は敵の鬨の聲を聞き友の近づけるを聽かんが爲めに有り。意識は宇宙を達觀せんが爲めに發達したるにあらずして、利を損を算へ、戀や怒りや嗟みのために有るなり。この肉體は勇氣を精勵を宿さんにあらずして、卑怯を怠弱を護らんが爲めに發達したるなり。斯く粗野なる硬粘なる方にのみ傾きて、幾千萬年をか經過し來りたる我は、遂に此窮窟なる體形を天地として固く守り、我を汝を區別するにすら至りたるなり。譬へば、バイロンの如き大詩人



も、國に事あるとき、書卷を抱いて軍に従へり、敵の漸く近づくや、筆を劍に代えて味方を指揮せざる可らず。味方次第に撃ちなされ、防備薄弱になるときは、銃を執りて一兵卒と並ばざる可からず。而して敵肉迫し來るとき、一發の砲丸に渾身の力を集めざる可らず。大天才バイロンも一小丸の裡に閉ぢ籠りたるならずや。大詩人ミ一發の丸、如何に極端なる對映にてあるかな。されきこの肉體ミ我ミの對映は、夫れすらも比にはあらざるなり。蓋し現世界に生存を保ち、時勢ミ俱に推移せんか、我は倍々狹隘なる個性のうち、に隱匿せざるを得ざるなり。何ミなれば、現世界は個性の最も烈しき競争場にして、疎漫なる大は緊密なる小に當るべくもあらず。彪大なる青龍及は細粒の砲彈に壓せられたるなり。而して競争の激烈なるだけに、愈々狹小なる個性の發達を促さざる可らず。甚しきは此の狹小なる個性の一生涯をすら全くする能はずして、數年間、數ヶ月間のうちに、其の命數を短縮するなり。明日の苦痛を豫想しながら、今日の美を飾り、生涯の幸福を犠牲にして、一時の豪華を矜り、一家一國を擧げて、一身一時の便宜に殉する如き、決して珍しからざる事例ならずや。

近世、最も顯著なる傾向を示すものは、かの分業法なり。分業法ミは、急劇なる競争の壓迫に因りて、最も完全なるべき人生を驅りて、いよ／＼小さく、いよ／＼狹き、一技一藝のうちに幽禁せんミするものなり。則ち人は、文官ミして軍人ミして學者ミして、同時に、宗教家、教育家、農夫、商估ミして、將た美術家、工藝家たること孔子ブレットの列ならざる可らず。而るに時は澆季にして、人は既に小さし。官吏、軍人、宗教家、教育家、各社會に無數の分業ありて、人は其の狹き職務のうちに幽居し、自己の幾億萬分の少を以

て満足せざる可らず。斯くて我は愈々自己に遠かりゆくも、思想廣濶にして寧ろ聖人的體度を採らんか、社會の失敗者に貶せらるゝを云何せん。一技一藝に固著するものは、辛ふじて生存を允さるゝなり。而して排他的、爲我的個人主義のものは、適種ミして社會に偉大なる勢力を保有し、世の喝采を博するなり。此傾向は十九世紀以來最も著しきを致せるも、人類は發生以來、此規道を走りて渝るとなきなり。個性の訓練が、人生に貢獻するところ幾干なるか、現時の文明が、人生を向上的に指導するものなるか、是れ容易に解決せらるべき問題にあらざるなり。現時の文明は、其の個性的思潮に立脚し、人生の本義を問ふことを後にして、個性の發達を助長するの學風をして、最も盛ならしめたるは事實なり。此の思潮に影響せられて出で來る作物は、悉て精に入り巧を盡し、寫實的特徴を有するも、品位漸く下りて、超世間的なる莊高ミ幽玄ミ宕跌ミの氣象を缺ぎ、世間的にして、平凡なる現象界の直映ならざるなきなり。試に現代文藝界の泰斗ミして仰がるゝ逍遙、露伴、紅葉等の作物を見よ。その詩的の想に於いて、その仕組に於いて、その修辭に於いて、卓絶せるは、日本文學史中に於いて比類を看出さんこと易からざるならん。而も文學的價値に於いて、卑野なる近松の心中ものにすら迫ばざるやに覺ゆるは何ぞや。農夫が畝を作り、木工の木片を刻むことを練習する如くに、單に文學的形式を習熟し、所謂文學者なる個性に鍛へ上げたるものよりは、文學的に事件ミ人物ミを排置したる一連の文字、それ已外には何ものをも齎らざるなり。豈に獨り文學ミ言はんや、而して獨り日本のみミ言はんや。

偏へに個性的の傾向を成して發達する人類社會にありて、眞言宗は即身成佛を主張するものなり。



即身成佛の意義は、要するに個性的潮流に逆航して、直ちに宇宙の本體に合致せんことを求むるなり。則ち此の狭劣なる肉體を抱いて、全宇宙の威力を幸福を體現し、支配し、眞善美に於いて享受する絶待的自由を恢復せんとするなり。宇宙の絶體に合致し、無限の威力を體現するは、粗硬なるこの肉體を、痴鈍なるこの意識は何等の支障を爲す能はず。我は藝術に於いて宗教に於いて、あらゆる方面に於いて、大天才の技能を發揮せんとするなり。されど此の主張は、未だ多く矜るに足らざるなり。何となれば大乘佛教、理想派の哲學は、此の主張を均しき傾向を成せるものにして、たゞ外粗の少しく異なるあるのみなり。更らに進んで眞言宗の最も得意とするところは、理談にあらずして事談、顯著なる事例を有する事談なるにあり。則ち高祖は即身成佛の主張者にして且つ事例なり。高祖の高遠なる思想を清廉なる操行は、手の向ふところに藝術をして遺らざるなく、而して其の藝術は摸倣的にあらずして、渾て天才的創作なり。目の向ふところ新発見あり、空拳を擧ぐれば高野東寺の大伽藍を成り、四國及び全國に幾多の寺院を創設するの福德あり。若し今、竊かに其の人格を偲ばしめんか、その貌姿は端嚴にして、軀幹強健に、音吐玉の如くにして、懸河の辯あり。耳に經て忘失することなく、喜怒哀樂悉て節を誤ることなかりしならん。若し夫れ奇蹟に至りては、高祖にしては常事のみ、吾人は其の餘りに直截に合理なるを視て、單に不思議なりとして驚くなり。自ら即身成佛を主張しながら、筆跡は金釘流にして、文成らず詩成らず、相容醜惡にして、茅屋に一生を燻ぶる如き薄福者ならんには、豈に滑稽なる大日如來なるにあらずや。洵に高祖の藝術は、内に體達せる眞善美の、必然的發表にして、何

等個性的修養に待つものにあらざるなり。

我が個性を棄て、實在界に合致するべき、我も亦た眞善美に於いて、絶待的自由を恢復し、其の行を想ひに於いて、超世間的なるものは、舉手動足悉て摸範的藝術的に發現せざる可らず。個性の訓練より得來りたる近世的藝術に至りては、摸倣的賤劣なるものにして、固より多大の價値を認めらるべくもあらざるなり。斯くて嚴密なる意味に於ける眞言宗徒は、大天才に於いて可能なり。而も普通天才を以て特發的なる天稟の資性に依るものと考へられたるに、高祖は此天才發揮の効果を擧げて、三密双修の不思議力に歸し玉へるなり。三密の方に依りて天才發揮の可能なること、又た高祖自ら證明して其の事例に立ち玉へるなり。されど天才の發揮が三密の修行に依りて可能なりとするも、其の三密の修行に堪え得るものは、又た天才ならざる可らず。すれば、理に順にして事に逆なる、循環的結論に達せざるを得ざるなり。

要之眞言宗は、個性的の羈絆を脱却し、實在界の眞善美に於いて、絶待的自由を體現するを以て、其の宗旨とするものなれば、他の大乘教の如く、甚深なる理談に満足する克はず、他の小乗教の如く、純潔なる頭陀行に満足する能はずして、其の實證を藝術美に顯はさる可らず。他の悉ての宗旨は、觀念を凝らし、佛名を稱へ題目を唱ふることに於いて、右も左も其の面目を傷けざるに、我宗は詩歌、音樂、繪畫、彫刻、其の他あらゆる藝術に於いて、實在界を呼吸せざる可らず。藝術の有無は、直ちに眞言宗の生命に關するなり。眞言宗が即事而眞を矜り、獨一無二なるを矜り、絶待教なるを矜る所以、又た之れに



あらざるなきか。されど之れ固より高祖の大天才にして可能なりしなり。高祖以後、青竹割の秘術なき云ふ巻物として相傳せらるるも、實は小指ばかりの青竹をも割らざるに至り、東寺南山の學風なるもの盛大なる時代に入りては、南都比叡の學侶と共に、青竹は何ぞ割るは何ぞ割る人は有りや無しやを論ずることに開はしく、高祖すら夢にも知らざる理路に走れるなりき。

今や我國は戰捷の餘威に乗じ、文運荐りに催ふし、何人の怠眠をも寛假せざるなり。近く我が宗も厥起して再舉を謀らざる可らず。蓋し再舉の目的は、東寺南山の學風にあらずして、高祖の音容を再現するにあり。高祖の音容は何ぞ則ち藝術なり。吾人は實在界に入りて、絶待的自由を獲んこと得て望むべからず。するも、人類として既に相待的に、或る自由を享受せるなり。不完全ながら、筆を執らば景象の輪廓を成し、金鼓を撃てば抑揚あり、文字を連ぬれば文を成すにあらずや。則ち人類が善き眞みに到達したるに均しき程度に於いて、藝術的機能を發揮し得るなり。藝術の發達したるだけに、高祖の音容を再現し得たることを矜るを妨げざるなり。藝術が眞言宗に取りて、斯く重用なるにも拘はらず、我が宗より藝術家の出づること頗る乏しく、特に現代は其の痕を絶たんこと甚しきは無用物視し、罪惡なるかの如き觀念を懷くものすらあり、宗の振はざる由來久いかな。

## 國民的宗教

今や日本は、文事舉り武事備はりて曠世の昌運に際せり、然るに我が思想家は、斯の邦の將來を悲觀して、憂懼措く能はざるもの、如し。蓋し現代の日本に相應せる宗教の確立せざるを以てなり。人は日本の文明を嗤笑して、物質界に偏重にして精神界は萎靡して振はず。做すも、決して然らざるなり。精神界の活躍は物質界のその如く華々しからざるも、其の科學、哲學の進歩は西歐のそれと雄を争ふに足り、教育、文藝の事復た他の文明國の後へに落ちざるなり。されど哲學、科學、文學等は國民の彩華の上に更らに光輝を飾るに足るべきも、未だ以て國民道德を啓發し統治するに抵らず。たゞ國民道德の統一は宗教的感化に因らざる可らず。國民的宗教の興らざる限り、人心は飄々として洋中の孤舟の如く夫れ危きか。然るに哲學者は哲學に依りて、科學者は科學に依りて、文學者は文學に依りて國民的道德を指導せんことをするがために、船は却つて丘陵を走らんことをするなり。愆くて民心の歸一を缺くこと久しければ、其の災禍の迫ぶるところ憚るべきものあり。近時宗教家が國民的宗教の確立を翹望し、天來の新福音を待つこと頗る緊切なるは斯れがためなり。吾が徒茲に現代社會の要求する宗教を提供せんことす。

神武帝か中洲を裁定せられたる頃、支那は周の代にして文物燦然として備はれるあり。印度には、釋尊娑羅雙樹の蔭に隠れましたるも、傳法弘教の盛んに行はる、あり。小亞細亞地方、希臘の文明已に開



けたるまき羅馬も將に萌芽を發するありて、當時世界の民族は期せずして何れも文運の大發展を遂げんとするの機運に際せり。我が邦亦た民族的大活動を試みんとして先づ蕪蕪を攘ふて都を大和に擊めたり、されど天外に隔絶せる島嶼の中に別天地を構へたれば、自然外邦の文物、政治、宗教等の影響を受くること少なく、内にありては、皇臣の別はあれど、大和民族は凡て神裔にして一家族を成したれば、他國の國初に見る如き民族間の軋轢、競争あることなく、世は神ながらに淳樸なる風、敦厚なる俗を保ちて、神に人々に少しも別を置かず、人は即ち神に祀らる。高天原には常に親々の神達を、それを繞りて八百萬の神々ありて、怒れば災を降し喜べば幸を賜ふて大和の國民を護れり。そのみならず、山川草木日月禽獸一一の物像は、神さながらの貌なりとして崇められたれば、實に斯の民族の眼には宇宙の森羅萬象は神ならぬものもなかりき。後世に入來りたる現像即實在の觀念、即事而眞の意義は、古代の大和民族が日常に實驗するところなりき。然るに彼等何時までも環海の裡に蟄伏するものにあらず、片帆を揚げて蒼波に泛び外邦に文物を索めてより、大陸の風は漸く移り來れり。應神の朝に儒教を賚らして忠孝仁義の道を聞き、欽明の朝に佛教を貢して三世因果、生死輪廻の理を聞くに抵り、神ながらの純潔なる思想は大變化を起さざるを得ざりき。されど大和民族は新來の思想のために眼眩みて、自家の脚下を失ふ如きことなく、却つて夫れ等の思想を採り用ひて、神ながらの道と混和し、從來無意識的に皇に忠に、親に孝に、民に仁慈なりしものは、儒教に依りて明かに忠君愛國の思想となり、從來靡ろけなりし靈魂不滅の感想、神罰神怒等の觀念は三世因果、生死輪廻の教に依りて、深く人心に浸潤

するに至れり。而して斯の思想界に取りて最も幸なりしは、聰明なる聖德太子の如き人ありて、神佛を一致なりとし、兩道の調和を謀られたることなりき。次で行基、良辨等の出て本地垂迹の説を唱ふるありて、新來の思想と神ながらの思想とますます接近し來れり。後ち平安朝の初期に當りて、傳教大師と高祖と雙び立ちて佛陀の法門を説かれたるまきは、新舊の思想は渾然として融和を成し、佛道はさながらに大和民族の神ながらの道にてありき。

寧樂朝以來、敬神敬佛が國政の大綱と成り、天照大神は大日如來、住吉神は正觀音、春日神は釋迦如來の垂迹なりとし、社内に僧房を設け、矢大臣を置かずして二王を置き、鳥居に代へて樓門を造り、誅詞に代へて誦經するに至りたれば、世は一向に佛に阿りて、神ながらの道を捨てたるが如くなりしも、強ちに然らざるなり。是れ等の變遷は適々佛教式の假面と裝束とを粧へる大和民族の、心をかざる舞蹈にてありき。何故なれば、勿論其の間には多少新舊思想の衝突なきにあらざりしも、當代の民族は、其の思想の上より見れば、未だ濟生利民的なる儒道の人道主義にも陥ちず、又た佛教の通有性なる悲觀的、厭世的思想にも染まずして、その本來の理想の如く樂天的、現世的なる古代の特性を喪ふたる痕を見ざればなり。復た國家社會の状態より見るも、天皇は上に臨みて親裁し給ひ、臣は其の姓氏を守りて下に和順し、儀式章典大に備はり、元日、白馬等の節會より端午、重陽の節供に莊重華麗を極めたるあり、大厦空に聳えて、碧櫺と丹檻と相映じて輝き、絃聲管音、徐ろに響いて清歌妙舞緩かに起り、花を惜みて春風を憾み、月を愛して秋雲を妬み、災患あれば祈りて之れを祓ひ、贊を供へて幸を禱る、軟風荐りに吹いて



世は只管らに靜謐なりき。其の弊實は終に文弱淫蕩の俗を成したりしも、日本民族が自然の尙好を逐ふて、外國の影響を受けつゝ、それ等の文物を己が資料として、遺憾なく發達を遂げたるなれば、此の時に、大和民族の精華煥發して、秀麗なる櫻花爛熳として輝ける様なりき。而して高祖は當代にありて、其の現像即實在的思想に於いて、其の談理に陥ちずして、事相に傾ける學文に於いて、其の圓明清純なる經歷に於いて、其の美しき多方面なる藝術に於いて、能く當代を代表せる理想的人格なりき。寧樂朝より平安朝の初期に亙りて、日本民族は理想的に發達したる時代にして、高祖は當代を代表せる理想的人格なりき。すれば、高祖は過去の歴史に於ける、最も理想的人格ならざる可らず。されど高祖は民族の尙好に迎向して、強て民族的なることを努められたるにあらずして、密教の教ゆるまゝにして、高祖の思ふまゝにして、其の主義を行爲すは、民族の信仰に尙好に契合したるものにして、些の斧鑿苦心の痕を遺さざるなり。斯くて密教は全く日本民族の宗教なりき。傳教大師の如き、其の出立點は一心三觀にありて、哲學的理想派に屬すべき人なりしも、當代にありては、事相的、藝術的密教に融和したるを見て、如何に時勢のさしも強烈なる要求なりしかを示せり。高祖は舉體是れ當代の結塊にして、頓て日本民族の結塊なりき。吾人は高祖が兩部神道を大成せられたる所以を以て、皇室の尊信特に重かりし所以を以て、其の他彼の點、此の點の零碎なる類似を求めて、密教が日本民族的なる理由を爲すを欲せざるなり。密教の大和民族的なるは、其の根本的思想の契一にありて存す。

さるに盈ちては、缺ぐる浮世の習ひにて、平安期の盛事も久しからざるに、一朝の夢過ぎぬ、國政は

何時しか藤原氏の手に遷り回すべくもあらずなりゆきて、國民は之れより全く邪道に落ち、嘆き永き墜道を辿るべくありき。藤原氏の華奢の末は、源平二氏讐を駢べて、朝廷に威を養ひしも、源家一旦にして、僅れ、平家の公達は、玉殿金樓に錦繡の袖ふりはへて、花を弄び、月を詠めたるに、其の奢りも、束の間にして、忽ちに西海の海の波にさすらひ、父は此方の岸に斃れ、兒は彼方の濤に眠り、憐れ有爲轉變の理に弄ばれて、たゞ何事も夢さのみ觀る世となりては、さしも深き樂天的國民性の消耗して、陰鬱なる厭世的思想にうたるゝも、是非なし。時しもあれ、法然上人は淨土門を唱へて、穢土の厭ふべく淨土の欣ぶべきを誨え、其の徒に親鸞上人ありて、他方易行を勧め、攝取に洩れたる衆生を救ひたれば、世は翕然として念佛三昧に現世の憂きを慰めたり。然るに斯の風潮に反して、鎌倉時代の尙武の風、剛頑の氣勃興するや、大和民族は又も他の邪道を走りたるに、日蓮上人は法華の題目を唱へて、武人殺伐の風に投じたり。榮西、道元禪師次で興り、工夫鍛練して、武人の氣魄を養ふことに力めたり。斯くて淨土、眞宗、禪、日蓮は、其の國民性を亡ひ、邪道に走りて、浮沈常なき衆生を救ふことに、惶はしかりき。要之、宗教の目的は、凡を捨て、佛位に入るにあるものなるも、其の社會的效果より言へば、各宗派は其の當代の時弊に投じたるものにして、自ら一時一類の衆生を救ふものなるべし。密教は大和民族の未だ邪道に墜ちざる前の宗教なれば、國民が本性を喪失せるべき、斯の宗復た邪道に墜ちたるは、止を得ざりしなり。

然るに現代日本の状態は、皇統昔の光りを輝かし、下萬民は自由を得て、こゝに蘇生し、外に仇敵の恐るべきなく、文事武事の殷盛なるこゝに、前代未聞に號す、藝術頻りに興りて、平和の瑞祥昭乎たり、實に大



和民族が封建的社會の邪道より救はれて、天真爛漫たる神ながらの性情を復活し得たるなり、而して斯の國民が切實に自己の宗教を需むるあり、其の聲に應じて立つべきもの他にありとも覺えず、且つ夫れ千年の歲月を重ねて、雨に打たれ風に吹かれ、揉みに揉まれたる國民は、最早や單純清明なる平安朝の人にあらず、其の學思想は宇内の渾てを抱括して、錯綜を極めたるに、そが要望するものは國民的にして、而も二十世紀的宗教なり、其の宗の經歷は平和的なるべく、其の宗風は藝術的なるべく、其の目的は現世的なるべく、其の教理は合理的にして、且つ綜合的ならざる可らず、在來の各宗派の中に此等の性質を具備するもの他にあるを見ざるなり、自ら國民的宗教なるべき神道の如きは、其の二三の個條に於いて此の要求に應ぜざるべきも、固より二十世紀の合理的宗教として何等の用意あるものにあらず、吾人は密教が日本國民的の宗教なる事は、既に縷述せることの如し、されど二十世紀の特に現代の國民的宗教なるや否やに就いては、尙ほ一層深き注意を拂はざる可らず、惟ふに現代の混亂せる思想を膝下に集め、短刀一閃、亂麻を截つ如く、裁斷し得るものは、高祖の十住心の判釋なり、顯教の諸宗には、釋尊一代の教法を判じて遺すところなきも、佛教已外に多くの心品あることを忘れたれば、西洋の哲學、科學等の思想は、没交渉なり、然るに十住心に至りては、下地獄より上祕密佛乘まで漏らすことなければ、固より科學、哲學等は皆なこの十ヶの住心の中に集りて、一淨菩提心の枝を成し、葉を成し、花を成し、大日普門の曼荼を莊嚴し、圓明清純なる統一を遂ぐるなり、獨り眞言宗のみ言はず、此等の思惟の面影は、近代の哲學史家に於いて一齊に認めらるなり、哲學史家はターレス以來の哲學思想

を列記するにあたり、斯れを個々の孤立せるものに見ずして、系統ある長き一連の思想の轉起なりとせしむるは、斯れ稍々十住心の判釋の精神を得たるものならずや、然るに思想の統一は、さして困難なりとも覺えざるも、宗教の教義の後へに常に其の教義をも蔽ふて餘りある偉人ありて、教義をして現實に效果あらしむるなり、教義に伴ふ偉人なきは、哲學已下のことなり、されば密教の統一的の教義をして、單に論理に終らしめずして、更らに現實的に、國民に片手をちなく宗教的の感化を與ふる人格なかるべからず、吾人は茲に至りて、高祖が如何なれば、斯くも渾ての要件を具備すること、山彦の響に應ずるが如くなるを見て、轉々驚愕に堪えざるなり、何となれば、現實の人にして、國民に片手をちなく宗教的の感化を與へつゝあるは、高祖其人なり、近時、社會が高祖に對する信仰の熱誠なること、殆んば豫想の外にして、正に高潮に達せんこと、是れ蓋し一は時勢の然らしむることなること、一は自由討究、特に歴史的研究の旺盛なるために、稍々狂熱的の信仰は、滅却し、冷靜なる判斷に依りて、國民的宗教家として、高祖の要求する正當なる地位を拒み、能はざるに至りたること、一は各宗派共に、宗勢昔の如くならず、宗派的感情の薄らぎたること、復た一は眞言宗なる教團の勢力が日に微弱になりゆきて、今は高祖を專有すること、能はずなりたるために、高祖は眞言宗なる教團の創立者たる位地より、迂りて、日本宗教界の盟主、國民崇拜の北宮に御座を遷されんことするなり、斯くて國民の頼るべき宗教的人格を高祖に看出し、思想の統歸するところを密教に看出し、而して斯の統一せる國民と相俟ちて、日本民族は初めて理想的大發展を遂ぐるなるべし、日本民族は其處まで行かざる可らず。



釋迦如來涅槃の雲に隠れまして、茲に二千幾百年、彌勒佛龍華の曉は、實に五十六億七千萬の年月を隔つ、我今二佛の中間に出るは、中興の仁に當て、末法澆季の衆生を濟はんがためなり、然れども葉落て根に歸するはこれ物の常なり、我入定の後、汝等末徒、よく遺誠を守て法燈を滅することなかれ、五十六億の後、我彌勒佛と共に定を出て再び衆生を利益すべし、其中間に我れ誓願する所あり。……(高祖の御誓願)

### 密教に於ける藝術の位地

藝術と密教とが根底に於いて密接なる關係を有するために、密宗徒は藝術の素養なかる可らず、宗の面目は藝術に緣りて發揮さるゝものなり。吾が徒が新しき主張にして、現に此の方面に向つて研究の歩武を進めんとするのである。然るに高祖自らが大藝術家であり、其の末徒にも多くの藝術家ありたるに拘はらず、古來の學將たちは藝術に對して頗る冷淡にして、寧ろ斯れを末技餘技のみ貶しめて、教理の上から何等の顧慮を拂はず、甚しきは藝術を弄ぶものは罪惡なりとすら思惟するものもある。然しながら之れ強ちに根據の無説にあらざり、大に事由の存すること、思はる。高祖は詩文書畫等に堪能なりしかども、心佛會に遊んで筆に遊ばずして、専ら霞を喫ひ霧を吸ふて三密の妙行に心地の淨瑩を凝らされたれば、筆墨や斧鑿の業は固より禪餘の閑事として重きを置かれざりしは洵に

爾るところ復た多くの經說祖論の中にも藝術を禁じて聖道の障礙を成すものなりと説くのである。例へば蘇悉地經の中に「成就を樂むものは歌を詠み言詞を以て戯れる勿れ」と言ひ、蘇婆呼童子經の中に「吉凶男女等の事を占ひ天文地理を學び衆馬を調へ射藝書筭等の無益なるものを學ばざれ、斯等の過を遠離す是れを正見と名く」と言ひ、大曼拏羅經の中に「俗間の典籍文字詠歌を好む者は決定して地獄に墮つ」と言ひ、又た梵網經の中に「外道の典籍を學ぶものは佛性を斷じ佛道を障ゆ、若し故らに作すものは輕垢罪を犯す」とある。經說既に然なりければ、從つて高野山の如き靈域を始め悉ての僧弟蘭若の清規は藝術を寛容することなく、其の最も嚴酷なるものに至りては詩歌をすら綺語なりとして、不善業の中に算へたのである。搗て、加へて政權武門に歸して久しく尙武の風旺盛なりしたために、荐りに軟弱なる文事を賤しむ、武人にあらざれば人にあらずとして、藝術家は其の位地を卑しめられ社會の水平線下に限されたのであつた。斯かる時潮に際して藝術の一向ぶるに河原乞食的に待遇せられたるは、洵に止を得ざるどころ、然るに今ま倭に宗徒は藝術的訓練の必須なる由を呼號すれば、教理上に何等の根底をも有せずして濫りに近代の藝術風に靡きたる邪論なるかの如く思惟するものあるかなれ。吾が徒の主張は經疏に於いて適確なる論據あるものなるを信するが故に、近代發達せる科學及び哲學に依りて藝術を論ずることには且らく外にして、茲には單に密教の上からのみ是れを論じて見やうと思ふのである。

#### 藝術論の出據



密教に於いて藝術がさしも重要な位地を占むることは何に據りて主張さるべきかと言へば、勿論經及び祖師の釋に據らねばならぬ。元來密教は佛自内證の法門であるから斯れを傳持するに當りては自から應化身所證の顯教を傳持するに趣を異にしてをる。中にも眞宗淨土等の如く、西方の彌陀を信するは佛のかたより賜はりたる信心なれば法然が信心も親鸞が信心も、樵夫漁史の信心も、皆な一樣にしてたゞ本願他力の慈悲を感謝すれば足るのである。然るに密藏は理趣頗る甚深なれば之れを傳持するには天才的大器を要するのである。例へば、

次の六種の阿闍梨は之れを開合して常に十六重の阿闍梨と言ふのであるが、上は毘盧遮那より下は世間末諦見の阿闍梨に至るまで智解優秀にして、入りては曼荼羅を見出で、は所依師に成り二利同じく修するのである。さて斯れ等の阿闍梨は十三種(或は十六徳も見)の徳を具備してをるのである。



第三劫阿闍梨……………一道無爲心  
……………極無自性心……………一切法平等無畏

大普賢地阿闍梨……………金剛薩埵

究竟阿闍梨……………大毘盧遮那

少しく煩瑣に渉る恐れはあるが阿闍梨の有する十三種の徳を一々に擧げて見れば、

- 一、菩提心を發すこと にして大誓願を起し一向に一切智々を志求する。
- 二、妙惠の慈悲 にして深き憐愍の心を以て般若の智を揮ひ無餘の衆生界の苦患を度せしむる。
- 三、衆藝を兼綜すること にして意のまゝに能く曼荼羅を造作する。
- 四、般若を修行すること にして十緣生句を觀じて不可得の空を照す。
- 五、三乘に通達すること にして佛一代の三藏教に明かにして辨難修習に缺くることなき。
- 六、眞言の實業を解すること にして種々の眞言印身本尊供具及び聲字の實相を識知する。
- 七、衆生の心を知ること にして法を求むる者の器非器を知りて能く方便引攝する。
- 八、諸の佛菩薩を信すること にして法を求むる者の器非器を知りて能く方便引攝する。
- 九、傳教の灌頂を得て曼荼羅の圖像を解すること にして漸次に進修して阿闍梨の衆徳を成就し
- 又た曼荼羅に入りて諸尊の一々の方位相貌色彩を領解する。
- 十、性調柔にして我執を離るること 智慧多聞なるに高慢ならず慈心を以て新學者を誘ふ。



十一、眞言行に於いて決定するこゝに於いて曼荼羅を造立し護身し結界し迎請し悉地を成ずる。  
 十二、瑜伽を習ふこゝに於いて息災増益降伏等の法に於いて善く分別し相應する。  
 十三、勇健の菩提心に住するこゝに於いて菩提心に安住して魔事障礙に恐怖せざる。

(多く淺略の文相に順じて擧げたり深秘の釋又た斯の外にあらざれば)

斯れ等の十三種の徳は獨り深行の阿闍梨、諦見の阿闍梨に限らず、凡聖淺深殊なり。雖も其の當位に應じて各々之れを具足せねばならぬ。されば世間淺行の阿闍梨も正像末の隔てなく經疏の説文に應じて淺略の諸徳を具足すべきで、深秘の諸徳は深行の阿闍梨に相應すればある。然るに阿闍梨の徳たる十三種あるに何故に、特に第三の徳を擇びて之れなかるべからず。唱ふるか、斯れ頗る重大なる問題にして最も深き注意を要するこゝに、今其の問題に往く前に藝術の種目を先づ以て定むるこゝに緊要にあらざるか。

#### 藝術の品種

藝術と言はるゝものゝ中に自ら種々の意味ありて、之れを狹義に解すれば繪畫彫刻、音樂詩歌の如き高等なる藝術に限らるゝも、之れを廣義に解すれば、浪華節、獨樂廻しの如き下賤なるものも斯の中に入り來るのであるが、これ又た茲には祖師の認められたる種目を擧げて満足せねばならぬ。疏及び釋家の文に顯はれたるものを執りて見んに、藝術に自ら二種ありて一は淺行の阿闍梨の堪能なるべき藝術、他は深行の阿闍梨の堪能なるべき藝術との別あり、淺行の阿闍梨の藝術とは、世間の種々の

技藝則ち聲明、因明、醫術、戰法、宿曜、天文、歌舞、算數、觀相、書畫、文章、建築等の工巧に至るまで、世間百般の藝術を含むものを見るべきである。深行の阿闍梨の藝術とは世間の藝術より進んで、一切の惣持三昧門に三十七科の道品、六度、四無礙辨、四攝、十力、四無所畏に於いて善巧なるを得て、意のまゝに秘密の曼荼羅を造作するを善妙茶藝と云ふ(疏の文取意)のである。されば大日經の瑞相段に於て如來の身に意より三無盡の莊嚴藏を奮迅示現せられたるも如來の善妙なる藝術である。盧舍那佛が華臺上に座して千葉に千の釋迦を現じ、一葉の一尊が各々百億國を示現し一國に一釋迦ありて化導するは、遮那尊の藝術なるべく、さては六大絶對體より宇宙の森羅萬象を緣起し山川草木宛然として列なれるは大日の深妙なる藝術なるべく、ケーオスを造作して宇宙を形成したるは神の戲曲的威力なり。云ふ世間の學者の説も何れ同じ傾向を辿る藝術觀である。斯く藝術に就いて種々あるべきも實世間にありて、せめては眞摯なる練習を積まんご欲するものは、先づ淺行の阿闍梨を理想すべきか、されば藝術も亦たそれに相應しきものならねばならぬ。

#### 何故に藝術を主張するか

阿闍梨の徳は十三種なるも、之れを約めてみれば身に屬する徳、心に屬する徳の二種にして、第三の藝術を身の徳とし他の十二種を心の徳とするのである。然るに從來の學者は心に屬する徳に重きを置きて、身に屬するものは殆んご省みるものなかりしが、何ぞ計らん第三の徳は非常に緊要なるものにして、秘密教の特色も多く此處に顯はれるのであるから、他の諸徳と同じ位地に還さねばなら



ぬ之れに數個の理由がある。

一、宗不共なること。高祖の御請來錄の中に「一心の利刀を甌ぶものは顯教なり、三密の金剛を揮ふものは密藏なり」とある如く、釋尊一代の教は心外の鑛垢を洗ふのが所詮であるから、華天兩一乘高し。雖も一心の緣起始末を談ずるばかりである、一心三觀三諦相即、三千の妙理と言ひ、十互六相の談義と言ひ悉て觀念作法の上の巧拙で、一心の無邊を説く外はない、禪の狙ふところ又靈智不昧の一心を疊くにありて、天地も日月も喝の一聲に心機の妙を開いて、心で宇宙の心を讀み身はさながら蟬の抜け殻の捨てものに均しい、他力念佛に至つては勿論衆生の煩悶苦惱を賺かし宥め、慈母の懷に安く眠らせて其のまゝ彌陀の手に救ひゆくのである、要するに一心の域内に談理の妙を矜るのであるから、現象界は空華のみ果敢なみて何等の興味をも感ぜぬから、随つて藝術は顯教の圈外に立つべき瀬を看出さぬのである、智度論の中に曰へらく「甄陀羅王ありて八萬四千の甄陀羅と共ニ佛所に來つて琴を彈じ頌を歌ふて佛を供養したるに、須彌山王及び樹木、人民、禽獸、一切皆な舞ひ、佛邊の大衆大迦葉すら座上に安んずることを得ざりければ、天鬚菩薩は長老大迦葉に問ふて曰く、昔年奮宿十二頭陀の第一なるに何を以て座に安んずること能はざるか、大迦葉言く三界の五欲は我れを動かすこと能はざるも、菩薩の神通功德果報力の故に我れをして是くの如くならしむるなり、故に五欲を捨てたる如く般若の空智を以て菩薩の果報をも除却せざる可らず」と斯くて菩薩の果報に對しても真空の觀念を凝らすのみにして、心外の法には何等の價值をも認めぬが、之れに反して密教は三密の金剛を揮

ふのである、其三密とは何であるか、經軌の定むるところに依れば、有相の三密は手に印を結び口に眞言を誦じ心三昧に住するものにして、如來は機の趣入のために廣大無邊の三密を行軌に寄せて説かれたのであるが、固より宇宙の凡ての業用にして三密ならぬはない、大日經の開題に「一切の威儀の中に口を開いて聲を發すれば眞言となりて罪を滅し手を擧げ足を動かせば皆な密印となり、事に隨ふて念を起せば妙觀自ら成ず」として宇宙の一舉一動に深き意味を讀むのである、これ則ち諸大乘教の極處たる皆空の上に、宇宙の實在てふ大伽藍を造營して一木一草皆な實相の現顯なりと認め、ものから顯教の如く一塵一法を假有として無造作に取り扱ふことを許さずして、奈何なる細末の現像に對しても或る興味を有ち或る價值を與へ、それ等の現像が存在する意義を教へねばならぬ、日が西に傾いて暗黒となり雲蒸して雨ふり風順ふき、顯教にては營變計の妄執の所見にして此の現像は假有なり、一心の本法は日西に傾かず雨雲にふらず空ら嘯きても事は足るものなるが、密教にては一心の作用なりと説く前に其の日其の雨其の風に對して、興味を有し意義を與へねばならぬ、されば藝術の如きも凡夫外道の徒ら事として押し遣るべくもあらず、藝術に對しても自ら實在的の價值を與へねばならぬ、則ち藝術は直ちに三密の顯現にして三密の外に藝術はあるべくもあらず、設し三密を外にして藝術ありと言へば、密教の三密なるものは絶對的價值を失ふて頗る狹劣なるものならんか、愆くて顯教が假有なり無意味なり障礙なりとしたる藝術も、祕密教に入り來りて初めて鞏固なる根底を看出したるは、これ全く宗不共で他教に會つてないところである。



二、藝術の所要 然るに前にも謂へる如く經軌の表面は機、趣入の爲めに、如來は有相の三密を説き給へるなれば自ら三密の行規が主となつてをるが、さて三密の行規を説くにあたりてすら、印眞言三昧ばかりにては何事も成就せぬのである。念佛や題目を申すには道ゆきながらも出きる、座禪練行するには石上に座し壁に面して修するに差間はないのである。三密の修行は爾かく手短かではない、假りに阿闍梨が壇を築くにしても、先づ地相を撰び、壇を築き、諸尊を繪がき日を占ひ宿を稽へるために曜宿に通じ算數に明かなるべく、眞言を正しく讀まざれば成就を得ず、随つて文字訓詁に精しかるべく、表白勸請の爲めに明晰なる文章を要し、道場觀を爲すために建築用材の知識も缺ぐべからず、息災の法を修するためには醫療藥草の事に亘るべく、増益の法を修するためには金銀米麥等の礦物植物の事に亘るべく、調伏の爲に劍及弓箭の武器の事に亘るべく、而して顯色と形色と表色とに於いて各々表示あれば、美術的の形式論に入り幾何學的攷察に往きて、色彩等の量質變化等に就いて看過すべからざる要項がある。若し塔を建て堂を興さんか阿闍梨自ら繩墨を執りて設計するにあらざれば、何人も合法の様式を知るに道はないのである。斯くて藝術は末技にあらずして經軌の大部分である。疏に曰く「種々の世諦門は皆な之れ法界の標幟なり」云々、されば世間の種々の事業はさながらに經軌にして、儀規の如きは法界の標幟なき世諦を摸倣したるものにして、本文は却つて世諦にあり云ふべきである。平素請賣り酒舖の壺瓶に舌鼓うてるものは、醸造元の酒槽あることを忘れてをろう、經軌は機の趣入の爲めに如來方便して狭く有相の三密を説きたるも、十萬頌、百萬頌、無量萬頌の經本の中には漏

らすところなく悉ての事相を記載したる理である。現に斯れ等の秘密を掘り出しつゝあるものは近世の科學にして、科學は塔内に奉安せる儀規を搜索して圓滿なる秘密的の儀規を造らんとするものであらう、世には眞言宗の學を以て煩瑣なりとするも、科學は更らに煩瑣を極めつゝあるにあらずや、試に衛生法、教育法等の學を聽かんに、委曲細説、殆んご煩に堪えられぬ感がある、さりながら宇宙が斯く自然に煩瑣なるを如何んせん、唯現代の科學も眞言宗との相違點は一は分業的に各人方面を異にして研究を重ねるに、他は一人にして渾ての事業を兼綜して缺ぐるところなきを要するのである。

學將達のうちに儀規や疏の釋文を淺略なりとして、事象の研究を一向らに厭忌したる一の原因は例の教相熱の熾んであつた理談派の餘烈であるが、一は疏文の中にも、世諦に順する所以は、勝義の曼荼羅は微妙寂滅なるを以て、信受し難き故に彼の機情に順じて説く云々釋して、荐りに淺略有相に陥ちざることを誡め、無相深祕の徳を懲誦したからである、之れ大いに所以あるところにて、經軌の相が剩りに婆羅門等の外道の壇儀に眞似するに簡はんがためになる云々、又た實に行軌に執して却つて邪義に陥ることを恐れたからである、又た金剛手菩薩も如來に請問せられたるは、諸法の實相は一切の相を離れたり、(即ち空なり)若し又た法相が常爾ならば諸佛の能く造作するところにあらず、如何に況んや有爲の諸法能く集成せんや、何故に今ま此の擇地造壇等の有爲の事相及び眞言事相の次第を説くや、既に此れ有爲有相の事相なり豈に能く無爲無相の法爾の道に順ぜんや、疏の文取意、云々難じて、佛陀



の事相を説き玉へるを疑ひたるに、世尊の之れに答ふるころ直截簡明なり、諸法は衆縁より生ず、汝は更らに何れの處に無相無爲の法を究めんとするか、若し諸法の本より如是無相なることを知らば、一切の身口意の業は皆な虚空の如くにして盡きざるなり、取意とある如く、藝術は世諦門にして宛然らに無相無爲なることは如來の允可し玉ふところである、さりながら已上論じたるころにて明かなる如く、藝術と三密とは一同にあらずして、其の中に自ら區別あり、三密は相大體大に對峙したる絶對の用大なるに、藝術は單に三密の相對的の顯現にして實相界裡の一徳相である、則ち阿闍梨の十三徳の一徳、大日の無盡莊嚴藏中の一功德である、従つて曼荼羅會の諸尊の中に其の位地を求めねばならぬ、さて曼荼羅の中に伎藝神を求めると其の神頗る多く、伎藝天女の如き妙音天の如きあり、其の他金剛語菩薩等一技一藝に屬する聖衆は頗る多きために、一圖に定め難きころなるか、然るに前にも言へる如く、藝術は下は世諦の種々の事相より、上は中台大日の事業をも攝在する故に世天に降るころあらざるべく、又た彌陀の説法の徳を標する金剛語菩薩あるも、固より各具互具の徳なれば直ちに之れを藝術の位地として見るべくもあらず、然らばたゞ塔内に居住せる内供養の嬉鬘歌舞の四菩薩こそ藝術神の御座にして、常に中臺大日を供養し讚嘆するものを見るべきか、斯くして藝術は金剛界智曼荼羅に屬して法身自内證の徳を標置するものたるべきである、前に阿闍梨の諸徳を區別したる時に、藝術は身の徳に屬するものと言へるために、之れは自ら台藏理體に屬すべきが如くなるも、こは智中の事に屬するを見るに何等の矛盾はないのである、さて何故に藝術は四菩薩の内證なりと見るべきか、試に藝術の素因を解剖するに、

- 一、藝術は何等かの意味を發表して死灰の如くならざれば藝術に……………意義あり。
- 二、藝術はその意義を發表するに何等かの方法に依るべければ藝術に……………形式あり。
- 三、藝術が表顯せんとする目的は……………美にあり。
- 四、藝術的形式に依りて美を發揮するときは其の効果は……………快感にあり。

藝術は此の意義と形式と目的と效果との四要目に緣りて成るものにして、此の四要綱の一を缺損せんか、圓滿なる藝術ではないのである、而して彼の内供養の嬉鬘歌舞の四菩薩は、則ち藝術の四要綱を表彰するものなりと言はんとするのである、何となれば嬉菩薩は適悦の三昧地に入りたれば、快感則ち藝術の効果を表彰し、鬘菩薩は寶鬘灌頂の三昧地に入りて如來を莊嚴する故に、美則ち藝術の目的を表彰し、歌菩薩は詠歌三昧地に入りたれば法印則ち想を意味して藝術の意義を表彰し、舞菩薩は舞儀三昧地に入りたれば儀容則ち藝術の形式表彰したるものを見れば、此の四菩薩は實に藝術に對して好個の位地を與ふるものと言ふべきか、されど斯の點に關しては尙ほ幾多の研究を重ね、ばならぬ。

事 例

經宗の根本義が既に斯かりければ、人には目ありて見足ありて歩むものなることを豫想する如く、祕密の阿闍梨に對しては悉ての藝術的技倆を豫想してをるのである、藝術なき阿闍梨そはあるべか



らざるどころであるが、其の最も密接なる關係を示すものは高祖である。何となれば、高祖が傳來したる經説ミ高祖の著書ミ高祖自身の藝術的作品ミを併せ考へたなれば、自ら密教ミ藝術ミ如何なる程度まで關係を有するかは、自ら明かである。その經ミその著書ミ作品ミは世間百般の藝術を網羅して、剩すところないのである。而して高祖が此れ等の藝術の渾てに堪能なりしことは、寧ろ經疏の要請にして密教の祖師ミしては必然に無くて適はざる資格であつた。若しも高祖にして多くの藝術の中に其の一をも缺きたりミせんか、密教の祖師ミしては則ち不完全であつたのである。

之れを要するに密教が藝術を要するところは、一時の流行に驅られたる世間普通の藝術論にあらずして宗旨そのもの、必然的要望である。随つて其の藝術の内容及び活用等に至つては、世間の學者の見るところミ自ら途の異なるものあらんか、されミ兩者の關係にして明かなれば、布教興學等の方針も自ら定まるべく、現代の社會に立ちて吾人の探るべき態度も亦た多く迷ふところなくして決するであらう。事の現實に渉るものは稿を新にして論するべく、茲には教理の上より見たるに過ぎぬのである。(匆卒の原稿を起したれば辭遣せず理盡くさざるものあり、其の謬れるものは看出すに随つて正さん)

地神常に言ふ我れ大地の一切所有及び須彌山を負ふて以て重しとせず、亦た厭ふ心なし。三種の人に於て我れ常に厭惡して住持せんことを欲せず、何等をか三ミなす、一には心に叛逆を懷いて謀つて人生を害するもの、二には報恩を念棄して父母に存せざるもの、三には因果を撥無して三寶を毀謗し法輪を破るもの、是の如き三人我れ極めて重きを患ふ、乃至一念も住持せんことを願はず。……(華嚴經)

### 密教より見たる近世の學文

普通に宗教ミ言へば、教祖の説きたる教義、信條及び其の儀式に於いてのみ信仰するものなれば、自然他の學文若しくは宇宙の事象に關しては全く没交渉なるが如し。例へばクリスト教は博愛を説き、佛教は三世因果を信じ、孔子は仁義道德を教え、其他の眞宗は一向に淨土往生を勧め、日蓮は題目を仰ぎて己がし、特殊の宗風を煽けり、然るに密教には二門ありて兩々翼を張り、双輪並べ運んで餘教ミ趣を異にせり、二門ミは何ぞや、一は隨緣門にして他は法爾門なり(用語妥當を缺ぐも且く此語を用ひ)。其の隨緣門に據れば、佛本誓の悲願を捨てずして、迷途の衆生のために三密の妙法、即身成佛の行規を説いて方便引入せんミするものにして、通佛教ミ同じく佛化度の方便なり、其の法爾門に據れば、修すべき三密の梵行もなく、向上すべき次第階級もなく、大日如來も觀音薩埵も、阿羅漢も人類も、地獄も餓鬼もたゞ之れ盛りに開敷せる淨菩提心の像影にして、佛界高からず衆生界賤しからず、宇宙の差別相さながら秘密曼荼羅、自性會場の當相なり、活宇宙それを密教ミ言ひ、法身の直説ミ言ふ、是れ餘教に見ざるミころなり、斯くて宇宙の渾てを涵容して剩すことなきを宗ミする故に、勿論泰西の學文、宗教の如きも亦た如來の一切智々衆生本有の曼荼羅として、其の中に攝在せらるべきものなるは多く論を俟たざるミころなり。

さりながら斯の宇宙は單に混沌たる無階級的の雜亂界にあらず、差別の界相森羅ミして、星は天に



輝きて燦爛たり、川は海に澆ぎて滔々たり、花ありて咲き、鳥ありて歌ひ、四序循環して一絲亂るゝこもなし、如來の一切智々は一味にして、淨菩提心の起伏なるも、地獄は常に下界に沈んで猛火に燬かれ、菩薩は常に界外の淨土に遊んで天妙の勝快樂を享け、人の華報優れたるものは雲上に風月を友として、管絃の春の夜の短かきを惜み、その果報の拙きものは茅屋に朔風を傷んで冬の朝に薪炭の匱しきを啣ち、天界の長壽は人界の蜉蝣に均しき露命を憐み、聲聞緣覺は世間の有爲有漏の快樂に流轉の業苦を積むこもを愍み、菩薩は小乗者を嘲つて遙かに大仙の金殿を夢み、性の賢愚、果報の優劣、慈悲の廣狹、斷煩惱の淺深、成佛の遲速は劇然として些の私あるを允されざるなり、其の差相は無量無邊なるも且らく十綱を擧げて之れに衆生を攝したるものは則ち十住心論なり、十住心は一面より觀れば、眞言行者淨菩提心の一轉一進して次第向上する徑路を示すものにして、又は一面より觀れば、かの次第起伏する淨菩提心は則ち宇宙の舉體にして、其の差別相を十種に分ちたるものなれば、十住心はたゞ之れ宇宙の當相を示すものなり、天台大師の五時八教の判教、華嚴の賢首大師の五教の分別の如き、佛一代の藏經を裁斷して一大系統あらしめ、以て宇宙の大秘密に契一冥合せんこもを需めたるものなるも、其の對像は畢に佛一代の藏經に出でざりき、高祖は釋尊一代の教を隨他意の權教として之を側らに置き、法界の眞核に慕進して其の源底を淵さんとするものなり、斯かりければ、大包容主義の密教が印度に在るの日は當代の悉ての事像を收拾して、外道の教義も儀式も直ちに秘密藏の外形を修飾し、又た支那を経て日本に流布せらるゝや、同じく包容主義を逞しうして、孔老の教も神なが道も洩

らすこころなく、一向ぶるに曼荼羅を莊嚴したり、されば密教は未だ人爲的の接衝を逐げざる泰西の科學哲學の如きも、自ら十住心に入り來りて其の適當なる位置を要求すべきなり。

蓋し近代の哲學科學等は、此の地球上に於ける人類の活動中にありて、最も偉大なるものにして認めらる、設し此等の學文が將來人生に及ぼす勢力を豫想するときは、或は佛教が人類に與へたる影響の幾倍すべきか豫め知るべからざるも、其の大勢力すらたゞ密教の活躍の一部として收納せらるゝなり、されば密教は涵容主義に基いて、宇宙的大宗教たる雅量に緣りて、今や二個の重大なる任務の新たに加はりたる事を閑却すべからず。

一、泰西の學術は地域を隔てたるために、密教と接觸するの機會を有せざりき、然るに天運こゝに環り來りて、哲學科學文學等は初めて密教で法帝に面と相謁するの榮を荷へり、密教は此の新來の珍客を引接し法帝の權能に據りて、彼等を臣位に列せしめざるべからず。

二、既に密教中に採り入れたる學文に對し、十住心中に適當なる位地を與ふべきなり、而して彼等が一淨菩提心の中に於いて、如何なる地點にまで到達したるかを知らしめ、從つて彼等自からの價値を自覺せしめ、將來向ふべき方面を指示するこも則ち法帝の緊切なる任務にあらずや、是れ旋て近來の文明の價値を批判し、以て雜然として紛糾せる學海をして統一あらしめ、歸趣あらしむる所以なり、併しながら渾ての學文を秘密藏の烘爐中に投じて、琿然融合せしむるこもはさして困難を感ぜざるべきも、さて斯く採り入れたるものに對し適當なる位次を附し、次第淺深の序列を正すこも決して容易



にはあらざるなり、吾人は高祖が批判の痕に鑑み、類を推し同を求めて此等の學文を攝在せんとするには、一大困難の横はれることを覺悟せざる可らず、高祖は無量の心品を判じて十ヶの住心とするにあたり、攝在の標準多端にして所對に應じて一々之れを改められたるが如くなれば、今新しき學文を批判するにあたりても從來の標準にして足るべきか、將た新たな標準を看出さざるべからざるか、是れ先づ來るべき問題なり、試に高祖が十住心の次第淺深を判じ、上々去々の歷程を示されたるころを見るに、世出世の相對は住心批判の根本標的にして、地獄、餓鬼、畜生人、天の五趣を佛道に對比して、前者は三世因果、四諦十二因緣の理を信ぜざれば之れを世間とし、后者は之れを信じて涅槃を理想とする故に出世間とするなり、次に世間門中にありては果報に優劣あり、業苦に輕重ありて三塗の劇苦を受くるものを第一とし、苦樂相半ばする人類を第二とし、天上の淨快樂を享くるものを第三とす、而して斯く果報に高下あるは、因業の善惡邪正に緣るものとし、地獄、餓鬼、畜生の三惡趣は十不善業に緣り、人類は五戒十善を持つに因り、天界には四靜慮を修するに因りて往くなり、出世間の中に於いて第四第五の住心と第六已上の住心とは大小乘の相對にして、聲聞緣覺の徒は出世の道を修するも、根性劣弱にして自度に忙はしく、菩薩大悲の心を缺き、僅かに見惑、思惑を斷じて無餘依涅槃に入るを究竟の極處とする故に、備劣なる小智として貶さる、第六七八の住心は均しく大乘の菩薩なるも、宇宙現像界の假有なることを知りて、未だ此の假有なる現像界は即空なりて、ふ理觀に達せざるものを第六住心の菩薩とし、諸法の假有なるに即して真空の理に體達したるものを第七とし、有爲の事

法即ち眞如の實相にして、有空不二中道の理に洞徹したるものを第八住心とす、されば此の三種の住心は諸法を觀するべき有とし、空とし、中道とすることに於いて、次第淺深を成せり、愆くて聲聞の小智、有觀の菩薩、空觀の菩薩、共に法華一實中道の理に歸入し、茲に宇宙の祕密は開顯を得たるが如し、第八と第九とは同じく中道の上において、理事の圓融を觀するものを第八とし、事々の相即を議するものを第九とす、最後に第九と第十の住心の差別は顯密、因果の不同にして、祕密莊嚴は如來內證、獨一絶對の境なり、此等の十ヶの住心優劣淺深の序列は向上の徑路驛遞を成して、相犯さざるなり、然るに泰西の學文は斯の住心の中に、如何なる標準に據りて如何なる位次に攝在せらるべきか、彼等は姑らく十住心が與ふる裁斷を待たざる可らず。

十住心批判の標準が、或は世出世を相對し、或は果報を相對し、大小乘相對、有空中相對、圓融の通屈顯密因果を相對し、其他識の優劣、成佛の遲速等ありて、乘々に標準を異にするも、其の最も通有的にして嚴重なる關門はかの世出世の相對なるべし、煩惱業苦、斷惑證理の理に通曉せざれば、論證如何に宏遠なるも、畢に第三已下の世間門に降らざる可らず、例へば哲學者の中にありて、最も出世間的傾向を帯びたるブレトリーの如き、スピノザの如き、シヨツペンハウエルの如き、カントの如き、其他基督教の神祕派の如き、何れも幽玄莊宏なる思想は、優に大乘佛教の壘を摩せんとするものあり、設しかの三世因果、斷惑證理の關門にして、除去せられんか、彼等は直ちに大乘中の上位に肉迫し來らんか、知るべからざるなり、さりながら、彼等は出世間的位地を占むべき第一の關門に阻止せられたるために、第四の



住心已上には足一步も容るゝを許されざるなり、且つ夫れ第三已下の住心中にありて那邊に攝在せらるべきか、之れを高祖の先例に鑒みるに、高祖は三十種の外道を一束として第一の住心に收め、渾て三塗の苦果を感じる外道の法なりと貶せり、而してかの泰西の學文が言ひ合したらんが如く三世因果、斷惑證理を否定するの徒なるために、彼等を罰して撥無因果の邪見とし、三十種の外道等を一束にして、第一住心に入るゝを至當なりとするか、人生を中心として研究せる最近の學文の中には第二に入るを許さるもあるべく、而して天上の妙快樂を撞憬するものは第三住心に入らるべきなり。

泰西の學文は既に世出世相對に於いて合格せざるために、他の標準に據りて之れを救ふに道なきか、或は彼等の思想の高遠なるに近時の實勢力の所以へに、他の標準に依りて特殊の厚遇を與え、以て佛教の宏量雅懷を示すべきか、現に近時の佛教界に於いて動もすれば十住心の第一關門乃至第三第四關門をすら寛恕して彼等の侵入に委せ、其の博愛主義なるがために倏ちに大乘の菩薩に擬し、或は唯物論を以て小乘に擬し、或は唯心論を以て第六住心に比し、超絶的實在論に允すに華天一乘を以てし、連りに姑息なる調和を試みんとするものもあるも、茲に高祖の先躅は炳乎として千載不磨なり、是れを改易するか然らざれば彼等と争はざる可らず、輿論の盛否勢力の消長抑も何かならん、因果の理を知らず生死海中に漂浪する俗智をして、出世間已上に登らしむるに、其の道を看出し克はざる可し、蓋し此の點に關しては獨り密教のみならず、佛教は同一態度を執ることを躊躇せざるならん、何となれば天臺の四教華嚴の五教等の中に淺深權實の差別あるも、並に能治の方便たることを失は

ず、因果に暝く斷惑に心なきものは、竟に外道の域を出でず、所治の邪見を以て斥け、近世の佛學者の如く漫りに雅量を振り撒くものを見ざるなり、之れ豈に佛教の面目なりと言はんや。

されど吾人は茲に斯かる大膽なる説を提供するも、未だ何等の斷案に到達したるにあらず、たゞ近世の學術は既に俎上に横はりて十住心の快刀を持ち適當なる調理を翹望せることを知る、而して其の歸結すら略明瞭なるものあり、然るに事端を繁くせんことを恐れ、且らく虛寐して一時の完を偷まんとする如きは吾人の取らざるどころなり。

## 藝術的生活

後園の白菊黃菊が麗はしく咲くも、溪澗の清水が潺々として流るゝも、皆なそれ／＼に生活の意義を示してをる、空しく雲が飛び徒らに風が起るのではない、宗教なるものも内部から見れば、動もするに天上界の外に舞ひ揚つて、穢れた人間世界とは懸け離れた眞如を理想とするか、絶對の人格なる佛陀やゴッドを理想とするか、言ふ深い哲理の在るにこそではあるが、さて人間界に初めて發生したもののならば、復た人生のために働いて居るものであらう、洵に宗教は常に幽玄な人事には縁の疎い、ユートピアの説明ではなくして、此の世にパン屋がなくてはならぬほかに、切實に必要なものであらねばならぬ、之れは宗教を職とするものが、浮世の中で何を働いてをるかを見たならば略解るのであ



る、世の中での働きぶり、夫れを今ま宗教家の生活と言ふのであるから、而して夫れが宗教の世に存在する所以である。

單に宗教家の生活と言ふけれご、之れを分類して見るに凡そ三種に分つこごが能きる、一は内觀的  
|| 信仰的 || 生活、二は慈善的生活、三は藝術的生活である、第一内觀的の生活は信仰的の生活でも  
言ふべきもので、近頃物故した清澤師であるこご、これも其の前後に同じく物故して山縣師であるこ  
か、又た今ま病床に苦しんでをる綱島氏であるこご、言ふやふな人の生活を見るに、肉體は此土の枯れ  
るも、靈となつて永しへに生きるのである、斯かる生活は死者や病人ばかりでなく、極めて偉大な人  
しては釋尊もそうであつた、クリストもそうであつた、佛弟子や使徒の多分も皆な同じ信仰的の生活  
を取つたのである、復た文字の上で靈か信仰か解脱か神か佛かを荐りに論ずる、所謂宗教  
學者も依然、然り此の中に入れ、ば入るのである、然しながら精密に言へば彼等は普通の學者は見る  
べきも、宗教生活をしてはをらぬものごするが適當であるかも知らぬ、而して近代に至るまで宗教家  
は首ごして此の内觀的の生活をしたのであつた。

第二慈善的の宗教生活は原ご神も佛も大慈大悲が根柢であるから、精神的に靈を救ふばかりでな  
く、物質的にパンを與へて孤兒や癡病者を救はねばならぬ、特に現代の如く生存が困難に成つてから  
は、薩埵太子が一偈の頌文のために餓へた虎に己が肉血を與へたり、達磨の教を受けるために片腕を  
切り落した惠可なご、は行き方が異ふて、鐵眼禪師が大藏經を印刷するために幾瀬の思をして集め

た金を折からの大饑饉を救ふために悉く消費した、而して新たに資金を蒐めた頃、又たも大饑饉に會  
ふたので其の金を抛つた、彼の遣り方が夫れである。

第三藝術的の宗教生活と言ふ言葉が頗る新しいので、中には宗教家が藝術を修めるなごは良く  
ないご怪しむものもあるが、何も宗教家の道樂、例へば圍碁をうつたり、骨董品を弄んだり、發句俳諧師  
の眞似するものを藝術的宗教生活なご、仰々しく言ふ理はないので、たご神であるこご眞如である  
ごか言ふものを抽象的に言語の上で説かずして、眼前に眞如の妙、神の光榮を活動させて見もし見せ  
もしようごするのである、例へば源家の義經の話を、初は何處で生れて何處で成人して、如何なる辛慘  
を嘗めたご言ふ風に、成行を物語りにして讀ませたものが、次には淨瑠璃に仕立て、情を含ませたの  
で、宛然ら義經の聲を聞くやうであるが、それにも嫌らずして終に人を義經に見たて、義經の鎧冑を  
被せて義經の言葉を使はせて立ち廻るのであるから、眞に今ま義經を看るやうな感がある、宗教家が  
藝術的生活を需めるのも茲にあるので、天國ごか極樂ごか神ごか眞如ごか言ふやうなものを、淨瑠璃  
や物語に仕組んだのが經説で、宗教家は夫れを語つたものであるが、語るだけでは到底満足は能ぬの  
で、宗教家自らが、天國に扮し眞如に扮して眼前に實在界の様子を活現しやうご言ふのが藝術的の生  
活である、實に絶對界を其のまごに偲せるのは斯れでなければならぬ、斯の藝術的宗教生活は現時に  
於いてこそさして重きを置かれてはをらぬが、恐らく直ちに興つて來るもので、機運は既に熟してを  
るから將來の宗風は之れであらねばならぬ。



「花より團子」か酒なくて何んの己れが櫻かな「か云ふ諺は能く人情を穿つたもので、兎角く人は美しい山川の景や、快活な鳥の聲を樂しむよりも甘い物を食ひ、軽い物を着ることを怡ぶものであるから、花見月見なき、風流らしい事を言ふて騒ぐのも、其の實は口を腹を飽さねば熄まぬのである。特に近代は現金主義の世の中であるから、皎々たる月を見ても、爛熳たる花を見ても、恍惚として我れを忘れるなき言ふことはさらになくして、紅葉は斫つて栗を裁ふ、菊は枯らして芋を作り、塔を捏つて牛小屋を建て、名畫を賣つて田畑を購ふなき何につけ彼につけ實利一天張りでなくば合點せぬのであるから、食ふて腹が膨るゝものでなくば神や佛に用はないとて押し除け、飲んで酔ふものでなくば詩や歌や畫や音楽は煩はしき放擲り、人生はたゞ米、現金でなければ承知せぬ世には、慈善的生活をするものでなくば宗教家でないのかも知らぬ、要するに斯かる世態人情であるから、慈善的生活が宗教の唯一の天職であるかの如き考を有つものもあるが、孰れか言へば宗教生活としては頗る幼稚である。

宗教ばかりでなく自體人にして詩歌の心を讀まず、琴笛の味を嘗めたことのないものは、玉の船の底なきが如くで露骨な寒枯な恰も石ごろを横たへたやうな無趣味なものであるやう、例へば舞臺なしに大道の真中で芝居を演てをるやうなもので、由良之助は神を罩て働いてをるこしても、赤裸々では情も憑らず氣も進まず少しも見榮えがせぬのである。然るにもしも華やかな青樓の道具立を背景にして、其處に酔ひしれた由良之助が正體なしに成つてをるから、眞に迫つてえも言はれぬ妙味が出き

てくる、本來人間が浮世の中で働いてをるのが全然で芝居で、人生はたゞ眞の一齣の舞臺面の出來事に過ぎぬのであるかも知らん、而して由良之助に扮し辨慶に扮してをるものが、善くも見え悪くも見ゆるのは舞臺の整ふてをるか居らぬかによる、さて其の舞臺は各自の藝術的素養である。

又た譬へば何時にても何處にても戦争に愉快なものゝ、あろう理はないので、人を殺す國を取る言ふ殺風景なものであるが、義家が貞任を負かして、

衣のたては綻びにけり、

こ詰め寄せたとき、

歳を經し糸のみだれの悲しさに、

こ附けて走つたので、此の戦争が實に美しく見える、悲惨な修羅場ではなくして趣味ある悲劇である、日露戦争にも廣瀬中佐の戦死が無かつたならば如何に寂しかったであろう、而して中佐の死を飾る所の遺書、

七生報國 一死心堅 再期成功 含笑上船。

が無かつたならば仇なる死であつたであろう、正行の偉勳は忘らるゝ日があるかも知れぬ、然しながら「かへらじこかねて思へば梓弓」の歌は長しへに歴史を飾るのである。

さらに源平の戦争に至つては、日本歴史の花として興味があるのみならず、人生に深い教訓を與へるものがある、驕る平家の公達は詩歌絲竹の道に秀で、實に雲の上人の器量鮮やかで、峯に聳ゆる花こ



紅葉、無外に觸るさへも心をかれたものを、哀れ源家の野猪に踏み躪られたのであつた。醜草しうそうは祈り付してもさまで人は心痛めぬが、爛漫らんまんと咲き亂れた櫻花を摧いて薪にしたものなれば、情なき鬼でも惜しいと思ふであらう。滅ぶ平家が野蠻なアビシニヤ人や臺灣の土蕃であつたなれば、醜草も同じやうに慙れさも無常さも感んぜなんだであらうに、花のやうに美しかつた公達が枯木よりも脆ろく僵れたので、こゝに浮世の榮華の夢さめて、念佛淨土のごき麗はしい信仰的の生活にも入つたのであつた。

されど一向ひたら内觀的の生活、信仰的の生活に入つて、たゞ有難い辱なし勿體なしさばかりでは、我の強い負け嫌ひな世にはさしたる効果はないものである。のみならず實の内觀的の生活は極めて瞬間的のもので、直ちに斯の信仰的の生活を飾つて美しくするために、藝術的の生活に迂り込むのである。近く例を取つて見れば、現今信仰界に重きを成して最も光彩の陸離たるものは、浩浩洞一派や、求道學舎一派、さては綱島氏などであるが、其の信仰の内容に至りては實に簡單なもので、主觀的な一筋道の思想であるから、片言雙語を聞いても全斑は何はれる。然るにも拘はらず彼等の美しき文章を見るまきは、金盤の上に玉を轉がすやうに、文々句々皆な金玉の聲があつて、骨々節々は恰も電氣に感じたかのやうに魅せられる。其の内容の單純なるは内觀的の生活が單純であるまきを示してをる。而して其の文章の美はしきは直ちに藝術的の生活に入つたからである。内觀的の生活は佛陀の恩恵を自覺した其の瞬間にのみ獨立するもので、次の瞬間は速くも藝術的の生活に入つてをるのである。

發達したる宗教生活は、やがて藝術的の生活であるまき言ふならば、藝術的の生活は、又たやがて宗教的生活であらねばならぬ。例へば西行法師の歌や、近松の淨瑠璃や、雪舟の畫や、ワグネルの樂劇や、シエクズビヤ一の劇詩は小兒が駄々を捏ね馬丁が鼻歌を謳ひ寺子が習字帖を塗抹するまき等しなみに、人間の惡戯あくごを見るまきは能きぬ。美術品の妙味は言葉で詮するまきは能きぬが、靜かに觀じ靜かに想ふまきに、掬めまきも、盡きぬ深い趣味が溢れてをる。ハルトマン氏曰く、藝術美は差別の世界せかいに絶對の世界せかいを融合するまきが出るまきを暗示して、人類の信念しんねんを希望きぼうを鞏固にするのであるが、是れ美が人生に貢獻する最高の効果である。斯の說にても何はる、如く、ゴットゴットまきか眞如しんじゆまきか言ふ實在體の佛も藝術に因つて俾ばれるのである。千之利休が茶道に藉つて覺を開いたのも芭蕉が俳道から覺を開いたのも、皆な此の理に外ならぬのである。

内觀的の生活に堪える人は必ず藝術的の生活にも堪えるのである。釋尊がまだ王城に居た頃皇族中の青年せいねんに種々の技藝を角べてみたが、何事につけても太子に捷つものはなかつた。クリストは美術品を製作せなんだが、バイブルは寧ろ一大詩篇である。復た浮世の事は打ち捨て、唯信仰的の生涯を送つた親鸞上人も、其の遺著を見れば大詩人であつた事は明かである。而して彫刻詠歌等の技倆は固より非凡であつた。其の他傳教大師も日蓮上人も決して藝術には暗く無かつたのである。

美學者レーモンド氏が、靈は宗教の尙ぶまきころ、物は科學の重んずるまきころ、而して兩者を結び合すものは藝術品であるまき言ふたが、之れは美學の立脚から論じたもので、若し吾人の立脚より言へば、靈



は金剛界の智、物は胎藏の理である。斯の物ミ靈智ミ理ミが對立して而二なるミきは靜止の貌であるが、靈が物に憑りて動くミきに靈其のものが眼前に活躍するのである。例へば琴を彈するミきは靈は神韻ミなつて、縹緲ミして顯はれるのである。内觀的の生活は靈のまゝにして動かざる状態で、自ら冷やかな靜かな寥しい生活である。夫れが藝術を得て潑刺たる生活に入るのである。

新たに起る宗教家は藝術的の生活を取らねばならぬから、此の機運は直ちに來るべきであるが、此の生活は決して新しいものではなくして極めて古いものである。而して最も著るしき對照は高祖ミ淨土門の祖ミである。高祖は極めて正直に藝術的の生活の頂上に立つたのであるが、淨土門の祖たちは一轉して藝術的の生活をしながら深く秘して知らぬ眞似して、信仰的の生活を標榜した。然るに末徒は信仰生活の聲に慣れて、自ら藝術的の生活を取つてをるミを知らぬのである。淨土門の本體は芭蕉の皮の如くに藝術品をよふたので、剥けミもく、藝術の外に信仰なるものを見出さぬであろう。而して淨土門が宗教ミして最も進歩したる所以も之れであるかも知れぬ。

此の理の稍々明かに成つたのは全く近世美學の進歩の賜である。美學をして進むミころまで自由に進ましめたなれば、如上の説を更らに明確に證明するであらう。而して藝術的の生活が宗教家の眞意義ミして認めらるゝ、ミも遠からざるべしミ信するのである。

## 現世祈禱

生死無常の事は人生の最大問題にして、釋尊が出家して成道するに至るまで、雨の且風の夕、唯斯れがために思念を凝らし給へり、されミ凡夫は今ま永劫の浮沈に繋がる生死の岸頭に立てるミを知らざれば、生死無常もさして重大なる問題なりミせざるなり。生ミは柏の實の生るほぎに惟へり、死ミは桐の葉の落ち散るほぎに他奇なく惟へり、試に人が如何に易く死を購ふかを觀るに、自由を得ざるミき、榮達の叶はざるミき、失望のミき、霜夜の風の身に沁むミき、饑えて一椀の飯に事かぎたるミき、火につけ水につけ死の優れるを思ひ、幾度か死の神を呼び起すなれば、凡夫の前には生死の問題は銅貨一錢に値せざるミきあり、無常の問題は梗米一合に價せざるミきあるなり。曾て西行法師も歌へり、

いつの世に長きねぶりの夢さめて驚くミのあらんミすらん。ミ又た、

世の中を夢ミ見る、はかなくもなほおそろかぬ我心かな。ミ、

世の人は何時もさるミながら、特に此の現代は人文伸張の頂巔にありて、人は物の道理に暗からず、利害の念に敏く、我意強く、我れが、の情旺んなれば、佛の慈悲も神の恩惠も、更らに尊ふミしミもせざれば、前に釋迦あり、右の彌陀あり、左にゴットありて、斯の世は無常なり、罪の世界なり、火宅なり、疾く遁けよミ勸めたりして人は少しも駭かず、否ミばかり捉られたる手をうち拂ふて、生死流轉の巷に驅け入るなれば、佛陀の慈悲も畢に達ばざるなり。



されき此の悠々たる大宇宙にありて、突然として獨り躍り出でたりて何程のこゝかある、人は洵に力弱く、自然の配劑に對しては絶對的に無能なり、假令へば、資産を盡盡するまじき、重き病魔に侵さるゝまじき、夫妻の相和せざるまじき、兒女の不良なるまじき、或は彌が上に黄金の山築きたまじき、強敵に挑まれたるまじき、皆な放恣なる運命の爲すがまゝにして他に憑むまじきなり、既に他の憑むべきなく、又た自己が力量の微弱なるこゝを自覺し來るならば、人は絶望の淵に沈むか、然らざれば神佛に冥助を仰ぐ外に途なきなり、其の神佛に往くものは滿腔の熱誠を捧げ、霜を踏んで無事を祈り、嵐を凌いで利養を禱り、以て心中に平和を得るなり、其の神佛に往かざるものは瀑布に往くか、噴火口に往くか、閻々の情は遺る瀬なきなり。

世の冷靜なる宗教家を嗤ふて謂へらく、佛陀の慈悲を屑もせず、漫りに空花に等しき人事を追ふて、深き瘡痕を受けたる迷信の徒こそ適き罰なれ、病を祈り福を禱りて何んの效かあらん、祈りて叶ふものならば、春に花は散らざるべし、秋に月は缺けざるべし、無益なり、佛は藥にもあらず、菩薩は寶石にもあらず、たゞ生死事大、無常迅速の誠めに驚きて、我が崇めまつる佛陀の御袖に縋るまじきならば、救ひもあるべく、援けもあるべし、迷信の徒！ ぞ貶しめて、峻乎まじして人の禱りを斥くる也、噫されき佛陀の慈悲は爾かく局量なるにあらず、偏狹なるにあらず、生死無常を知らずして、大慈悲心をも信ぜざるものゝために、佛陀は更らに甘き手を垂れ給ふなり。

佛陀の慈悲は常に空に懸かる太陽の如く、普遍的にのみ照すにあらずして、或は眞砂まじきなり、或は

雜草まじきなりて、人を拯ひ助くるなり、佛陀は或は觀音まじき現じ、或は不動まじき現じ、或は毘沙門まじき現じ、常に躬を百億に分つて、天に昇り、地に降り、水に入り、林に入りて、智恵欲しきもの、福德欲しきもの、皆な我れに禱れ、玉にても劍にても冠にても藥壺にても、我れに願ふまじきものは取らせんまじき誓ひ給へり、祈れ、然らば、佛陀は祕密不思議の鍵を振ふて衆生自心の寶庫を開き、七珍萬寶は取るに委せらるゝなり、たゞ迷へる衆生の欲望は餘りに微少なれば、かの無盡の寶庫の中より、纔かに百日の壽命、千金の富、一代の權勢を得て叩頭拜謝して去るなり、恰も禁治産の下にある蓋子の、父に哀許して纔かに酒食の資を仰ぎ、欣々まじして去るにも似たれば、佛陀は寧ろ迷へる兒の非運を痛嘆し給はん、されき仁慈なる佛陀まじき、不貞なる衆生まじきの暫ばし相見ゆるはたゞ此の時なれば、不孝なる兒の窮困して袖に縋り來るは、せめてもの父の喜びなり、斯の祈りを、かの雲を排し、月を拂ふて、自ら空に澄める釋尊や達磨の莊嚴なる生活に比し、或は絶對の神無限の佛陀に憧がるゝ、クリストや親鸞の幽玄な生活に較ぶべくもあらず、されき斯の祈りの裡に、圓滿なる佛陀まじき、庸劣なる凡夫まじき密かに冥感冥會するまじきところありて、何時しか衆生の心靈は淨化されゆくなり、釋尊の教にも漏れ、彌陀の本願力にも漏れ、神の拯ひにも漏れたる難化の衆生にして、迷其のまゝ、罪其のまゝ、を覺縁まじして、親り佛陀に謁し、しみじみ其の慈悲まじき威力まじき光榮まじき感受するを喜ぶなり、人生の活力こゝに燃えて、瘡痕は立まじきところに癒ゆるなり、其の有難き佛陀は、馳て恐ろしき忿怒まじき冥罰まじきの籠るまじきところなれば、祈る人は自ら道德的の制約にも服するまじきを覺ゆるなり、是れ偏へに佛陀の方便の無窮なるに因れり。



我れ等は高祖の證言に依りて、二世の祈願の空しからざることを信するなり、御遺誠に曰く、  
然らば則ち未來の我が弟子等、此の教を翫んで二世の悉地を望まん者は、空海日々彼の房中に到  
つて、當に行者を擁護すべし、若し此の一言も虚妄なるに於いては、空海が肉身の八萬四千の毛孔  
ごみに、兩部諸尊の冥罰を蒙つて、永く無縁の大慈を捨て、諸佛の出世にも遇はず、當に慈尊三會  
の曉に洩るべし。

高祖の證言に謬りあらば、我が主張にも誤りあるべし、而して高祖佛天の冥罰を受け給ふごき、我れ  
も俱に嚴罰を蒙むるを喜ぶものなり。

### 藝術に往く宗教

扱或る年の事、夏もまだ初にして若葉蔭やうやく茂り、翠綠の滴る色は霽れやかな蒼き空と相映じ  
て、洵に爽やかな日であつた、母と二人漫ろ歩きのついで牛込の牛天神の西裏から廻かに西の方を展  
望するご、谷間ごも思はるゝごころには名残りの雪ををいた富士山が、雲の表に兀立してゐた、我れは  
富士なりご指させば、母は否ごよ富士山は雪の積りて眞白なるべきに、かの山は赭秃たれば、富士には  
あらずご云ふ幾度か繰りかへして夏にはさすがに富士も雪ごけて山の骨露はるゝものなりご説き  
たるも、いつかな背き入られなかつた、今も其の時の山は富士山ではなかつたご信じらるゝらしい、我

は母の主張の理由なきを常に疑ふてゐたのであるが、實は其の主張のうちには大なる眞理の潜めるの  
であつた、蓋しかの時に我が見たごころのものは現實の富士、論理的の富士で、而して母の見ざりしご  
言ふは理想の富士、趣味ある富士を求めてゐたからであつた。

眞白なるも赭秃たるも等しく山なれば、雪のなき所以を以て富士山にあらずご言ふは頗る理由な  
きとである、さりながら同一の山にして雪は消え山骨は露れたゝ突兀たる殺風景なる山ご、白妙の綿  
帽子引き被りて聳々たる趣味ある山ごの間にて、何等の差異なしご言ふごころが果して道理ある  
ごころであらうか、少くごも二種の山態に於いて非常に價値を異にしてをる、趣味性が索むる富士、理想  
が索むる富士は白皚々ごして白扇を倒に懸けたるものでなければならぬ、かの高潔にして雄大なる  
美觀より混々ごして湧き出る趣味の靈泉を呑んで、人は神ゆき魂ごび我を忘れ恍惚ごして物ご我ご  
融合し、神ご我ご涉入し、六大無碍事々圓融は臙ろけながら斯の時經驗するのである、赭秃たる富士則  
ち現實の富士からは恁かる高尚なる趣味を酌むごころが能きのである。

さりながら普通、此の光明なる清新なる眞如界、理想界に堪へたる趣味の仙水は、自然界の月光、星華、  
花卉なきの麗はしき物象よりも藝術家の靈腕に依りて更らに具體的に富麗に酌み出さるゝのであ  
る、清盛の第五の女にして近衛基通公の北政所になつた方は父入道も愛して衣通姫ご呼んでゐた、或  
るごき内より急の御召にて何事かごきくに臨時の御會である、基通公は天性の選口であつて時刻も  
迫りをるので北政所に代作を頼まれた、政所は直ちに筆を執つて左の五首を書きつけられたのであ



春日山神祇 春日山かすめる空にちはやふる神の光りものさけかりけり。  
 鷲峯山釋教 鷲の峯おろす嵐にいかなれば雲間残らず照す月影。  
 是心是佛 迷ひつゝ佛の道を求むれば我心にぞたづね入りぬる。

旅立空秋無常 草枕おく白露に身をよせてふく秋風を聞くぞ悲しき。  
 戀昔舊跡 あるじなきやきの軒端に匂ふ梅いさむかしの春ぞ戀しき。

脂燭一寸たゞざるに五首の歌は出きた、入道の誇りたるも宜黄金の鈴のうてば婉に響く趣味あり。

ベートーヘンは或る月夜に乗じて友に散策してをつた、偶然貧しき家の窓からピアノの音が洩れきたので、立ち寄つて聞けば己が作した樂譜を奏してをるので、闔を開いて裡に入り哀れな兄妹を駭かせた、彼は樂器に凭りて一曲を奏したるが、をりから窓を透してくる月の蒼き光りを浴びて、ベートーヘンの感興は最高潮に達し、新たに奏したる一曲は、さながら月光が麗はしい天使となりて、靈しき芝草に下りて緩るく而して漸く急に舞踏せる状態であつた、其の光景を偲べば月光に樂聲を奏演者も、友も兄妹も貧しき家も乃至は天も地も渾然として融合相渉し永劫の理想界に没入するのである、恠くて靈泉は藝術の谷に沿ふて人生に流れ出るのであるか、藝術家に縁りて發揮せらるゝ理想は、譬へば黒雲を破りて輝ける一道の電光の如く頗る微かである、さりながら其れが實在界、眞如界より發したる光明なるこゝは疑もなきこゝろ、而して人は此の微かなる光明に打たれて恍惚として天人

融合物我涉入の境に遊ぶのである、秘密教も亦た藝術に縁りてさらに強烈にさらに普遍的に理想界の光明を人生に傳達せんとするのであるが、たゞ雲間に輝く電光に満足せず雲も空も一齊に燦爛たる靈光に融和せしむるこゝろ是れを秘密の大藝術と言ふのである。

我は即ち大日如來なり、佛も凡夫、生死に涅槃は渾て一如平等にして共に法性界裡に在り、是は密教徒の常に以て誇りとするこゝろであるが、さりながら恠かる理談は少しも新しき説ではない、法華華嚴に論ずるこゝろも是心是佛、即身即佛、煩惱即菩提にして、教理發達の上より云へば恠かる理談に於いて天臺華嚴なごは寧ろ本家であつたかも知れん、秘密教は其れらの論談に慊たらずして、幽玄なる諸大乘の教理の上に一頭地を抜いて事證に進んだのである、例令へば鑛金を石塊なりして卑しむ、純金を珍寶なりして尊む、石塊は如何に精煉するも遂に眞金には及ばず、我は石塊なり、佛は黄金なり、我は畢に佛たる能はず、信じたるは小乗の阿羅漢たちであつたか、る信念の餘りに強きたために大乘の菩薩は出て猛然として鑛金も眞金との異なきこゝろを説き、我は即眞如なり、我が外に佛なし、我も法界も一如なるこゝろを説き盡して髪を容るゝに餘地なきまでに理談は進んだので、茲に理談はさらに實證を求めて他の途を看出さねばならぬに至つたのである。

現象界も實在界も融和するなれば、現象界に於いて直ちに美則ち理想を發揮せねばならぬ、而して理想の發揮すると言ふこゝろは則ち藝術的效果である、音楽もなり、繪畫も成り、詩もなり、文もなり、彫刻もなつて其れが皆な天真に應へた傑作を成すのである、恠くてこそ即事而眞にも即身成佛にも意



味があるので、高祖が清涼殿に於ける現身成佛や藝術は密教の最も具體的に表現せられた絶頂である。而して設しも斯れ等の藝術がなかつたなれば密教は實に無意味に終つて、諸大乘教の古き履物を戴いてゐたであらう。美學の大家ハルトマン氏の言ふところに依れば、若し現象界の森羅萬象が神性なりを認むるこゝが宗教の根本義なりを云ふならば、宗教に於ける藝術の關係は哲學的の眞理や道徳的の善よりも豊かに密接なものと云ふはねばならぬ。何となれば現象界に神性ありを云ふは即ち美は感覺の上に發現した理想であるを云ふに外ならねばなり。藝術は萬有神教の性質を貫いたるもの、必ず至るべき究竟の地である。鑛金と眞金と等しきものとするならば、純金の如くに鑛金にも清らかなる響き色と光りがある理である。然るに諸大乘教にては兩者が同一性なることは推知しながら、未だ鑛金を煉つて純金を作る法を傳へなかつたのであるが、密教はこゝに大きな熔爐を築造し鑛金を精煉して眼前に爛々たる光明あるものを造りあげた。其處に祕密教の異彩を放つたのである。此の隔歴相碍の凡身が如何なれば實在界に往來して理想を發揮し得たか云ふに至りて、六大無碍事々圓融等の教相に歸つてくるので、約り又た原の天臺華嚴等の談理を繰り返して他奇なく他妙なしである。たゞ普通には此の高き牆を越ゆるものなきに、密教は一躍してこれを飛び越したるこゝに於いて其の理談の價值あるのである。龍動を見ざる人の龍動談を龍動に往ひたる人の龍動談との相違であらう。高祖の十卷章を初め諸疏の教相は歐洲歸りの歐洲談である。又た事相にのみ往きて未だ藝術的生活に出でざるものは龍動に行きながら土中に在りて醒醒として憐れなる勞働に服

するが如き人であらう。而してたゞ譯もなく即事而眞、即身即佛を吹聴するものに至りては龍動にゆかずして道中衆等に據りて荐りに龍動通を誇る痴人の夢の如きものであらう。我即ち大日如來なりを信すればよし、我は本有薩埵なりを信すれば足るを教ゆる如きは砂を嚙ませて砂糖なりを思へる強ゆるものである。

四寶の瓶を持して供養せよ、並に攝意の意樂を奏せよ、此曲は具さに瑜伽大本の中に在り、若し塗香を献するときは塗香を献する曲あり、花、燈、飯、食、皆な爾なり、一一の詠歌は皆是眞言なり、一一の舞戲は密印に非ざることをなし、若し此れ等の歌曲を解するものなれば、阿闍梨當に自ら之れを奏すべし、若し奏するときは能はざれば兼綜衆藝の阿闍梨と言ふべからず、前に攝意と言へるは世人の美妙の色聲を見るときは心之れがために酔ひて情は一所に注ぎ、復た異縁に防げられざる如く、今此の金剛の伎樂は能く人心を感ぜしむることも亦た是の如くなり、馬鳴菩薩自ら頼陀和羅の曲を奏し給へば五百の王子之れを聞いて同時に家を捨て道に入ることを即ち其の義也、羅醯經の中に若し辨じ得るものは音樂を作す應しと云へり、經に吉祥伽他等廣多美妙言と云へるは、此の頌に凡そ三種あり、一には名けて吉慶と曰ひ、二には名けて吉祥と曰ひ、三には名けて極吉祥と曰ふ、皆な是れ阿利沙の伽他なり、此れを用ひて其の心を慶慰す、仍ち加持の用あり、阿闍梨當に自ら之れを説くべし。……(大日經疏八卷)



## 事々に顯はるゝ宗教

何事にも科學といふ假面を被つて嚇しつける今の世に在りて憚ういふやうなことを言ふも何か奇矯を衒ふか、特更に異議でも唱へるやうに見えるかも知らぬが、さて宗教には又宗教の立脚があつて、科學に適はぬからといふ一言の下に直ちに口を噤む理にもゆかぬ、而して迷信といふものは、何故に迷信であるか、それは科學者自身にも解らぬのである、兎も角も科學の手の届かぬところであるからといふので、迷信を名けるのであるが、是れは頗る無理な譯である、設し科學が宇宙の祕奥の底を敲いて理を以て竭さざるなしといふまでに發達して居るものなれば、科學は帝王のやうな權威を以て悉て他の思想を壓服しても夫れに理窟はなからうが、今日の科學はまだ、それほかに發達して居らぬ、人間で言へば少年時代で、やつと東西の分別が出来かけた所である、龍は三寸にして能く雨をふらすといふから、幼穉科學にもなからず、末恐ろしい勢を持つてゐることは定であるが、さりして思想界の帝位に即くまでには後進かである、然るに宗教家までが動もする科學にかぶれて、宗教を科學の足もこに降らせやうとするのであるが、なにも三歳の兒童と等しからんがために八十の老翁が足も頭を截り削いで、同じやうに腕白をいふにも及ばぬ、いふて勿論科學を無視するのではないが、自己の立脚まで抛つて科學に面縛せねばならぬ譯は些しもない、今宗教の立脚から下のやうなことを論じて見やうと思ふ。

己達の祈禱者になる、祈禱をするときに其の願の成就するかせぬかは祭壇に昇つたとき直に解る、といふことであるが、悉て何か事が發る前に豫めそれを感じることには少しも珍らしくない、誰れでもよくあることであるが、人が人を訪問するときに、何もなく妙な感じがして先方は不在ではなからうか、といふことを判斷する、而して往つて見る、果して留守である、又た偶然今日は思はぬ人が訪ねて來る日である、いふやうな氣持のするとき、果して其の日は珍客を迎へる、物を盗まれた人などは皆な一つやうに其の前に變な心地がしたが、別に心にも留めずに居たところが、さて盗まれて後にそれが前兆であつた、こゝを氣付く、其の他憚ういふやうな事は澤山にあるが、いづれも細かい點については解らぬが大體に於いて吉凶善惡の判斷を誤ることは無い、而して事件が發ることを豫知するにあたり、たゞ何はなしに憚ういふ事件がある、こゝに感ずる、また虫が這ひ鳥が啼く如き日常の事象を見て神祕的に判斷して、將に發らんとする事件を豫知する、こゝに感ずる。

前の如きは小さな事件の起る場合に多くして、後の如きは大きな事件の起る場合に多いやうである。

予が現今のやうな生活を取るに到つた初めは、丁度五年已前であつた、其の頃はまだ郷里に居つたのであるが、或る朝椽に出で前栽を見る、池の面が何ともいへぬ霞にでも包まれたやうであつた、予は是れを見て遠からず他に移轉せねばならぬ事になる、感じた、然るにそれは瞬間の變象で、此の感想なきは一時の妄想として別に意にも留めてゐなかつたのであるが、それより十日を経て果然郷里



を去るこゝになつた。恚かる實驗は屢次であるが、たゞ往々にして判断を誤る事があるのは其れ等の判断に熟練してをらぬからである。曾て友人を訪ねるこゝの如く變な感じがしたから又た不在ではあるまいか。思ふたが、強ひて往つて見る。彼れは宅に居つたから、かの豫知は妄想であつたらしい。然るに談の進むうちに計らず非常に不愉快なる事を聞いて頗る不興を感じたのであつた。茲に於いて初めに妙な感じのしたのは友の不在の前表ではなくして、此の不興を買ふこゝの知らせであつた。而し尙ほ不思議なるは恚く事件を豫知するこゝを練習すれば、日常の細事に到るまで御圖や八封に藉らずして、豫知するこゝが能きるのである。御圖や八封を用ゆるは目の健全なものが近視眼の眼鏡をかけたやうなものであれば、却つて邪魔になるのである。さりながら何も平板な生活をして無事な一生を祈るものが、事を豫知する必要もなく又た人として豫知せずして一寸先きは暗夜でをる方が人間らしくて善いと思はれるから、力めてかゝる事を練習せぬやうにしてをる。烏羽玉の間夜に目が視えたり耳が自由に動いたりするこゝは或る機能の發達してをるこゝいふ點からは矜るべきではあるが、何さなしに人間性に遠くして氣味わるく感ぜらるゝ。こゝ同様に、かの能力を殊更に發達させるのは人間として喜ぶべきではない。それにしても事を豫知するこゝいふこゝは些細な事例ではあるが、要するに我々宇宙の間には無線電信のやうなものが通じてをつて、時處を異にしてゐながら、其の間には何の繋がりもなくして音信相通じ、意氣相感するこゝが能き。然るに科學者や近世風の人になるこゝ之れを一端に神經迷信の故といふて了ふのであるが、恚かる明白な經驗が

何んで迷信であらねばならぬか、神經の故といふれども神經でなくして外に精神作用があるのであるか、若し此れを神經として否むなれば他の神經作用であるこゝの精神現象は皆な迷信といふて可いのか、今ま哲學的に見れば上にいふたやうな事實の下には最も興味のある原理の伏在してをるこゝを認めるのである。

西洋の理想派の哲學者、文學者それに一派の科學者なごの考は皆な似寄つたものであるが、中にも密教の六大緣起の説から稽へて見る。宇宙はたゞ一味平等の六大體にして、蠢々たる介虫も嵯峨たる山嶽も日も星も、皆な無限に廣大なる圓融無碍の實體なれば、紅き華青き柳の種々は之れを譬ふれば暫したちたる漣の如きものにして、水の外に漣なく、漣の外に水なく、水も漣も一實の六大體である。山高く水深き無限宏大なる宇宙は顧みれば、我が身體である。宇宙が則ち自身の身體であるならば、宇宙間に於ける悉ての出來事は、奈何に微細なるものにもせよ自からそれを意識せずして終るこゝはないのである。五尺大の我が身體に極めて小さな蟻一匹が足の指の尖に觸れるこゝあるにも、それを知らずに居るこゝがあらうか、兎の毫ほご小さき刺が皮膚の間にたつても痛みを覺えるのである。宇宙が則ち我が身體であるならば、宇宙間に發るこゝの事件は細大漏らすこゝろなく皆な自身に影響がなければならぬ。時處を隔て、をりながら、或る事件の發作するこゝを克く感知するのは、則ち宇宙が一の實體にして、それが自身の身體であるこゝを臚ろけながら證據だて、をるのである。又た宇宙は融和した一個の實在體であるから、現在の宇宙が一味平等であるばかりでなく、



過去の宇宙、未來の宇宙、此れ等三世の宇宙が一渾融和してをるから、我々は現在遠隔の地に發る事件を感知するのみならず、まだ發らぬ未來の出來事も、既に發り了つた過去の出來事も何も、彼も感知するところが能きる理である。我れ等は十年前の往事を追懐して情を禁ずることの能きぬところがある。明日の芝居の面白さを想ふて今宵眠られぬところがある。我れ等は不完全ながらも尙ほ三世を達見してをるではないか。然るに設しも宇宙全體が自身の身體で、自身の身内に發つたものは何事にもあれ皆な自身に識らるべきもの。ミすれば、此宇宙には斷へず無數の重大なる事件が簇り起つてをるのであるが、我々は何故に其れ等の大事件を感知することなくして、日常の些々たる事件なきを豫知して甘じて居るのであるか。ミいふに、此れには深い譯がある。若しこれを一言にいふて見れば、宇宙の出來事は細大ミなく我れ等に通達せられてをるのであるが、それを氣づかぬのである。其の夜なき、獨り靜かに寐床の上で横たはつて居るこき、幽かに虫の鳴く音が聞えるばかりで、其の他に何の音もないやうではあるが、熟々考へて見れば、自分の胸部には心臓や肺臓の鼓動が響く、血液は非常な速力で循環してをる。腸胃の消化機能は頻りに營養分を吸集して又た之れを分配してをる。瓜や髪はすんく、伸びてをる。皮膚からは脂肪を分泌すること夥しい。九穴は臭きものを排泄してをる。又た種々の病氣は身體の各處に發つてをる。無數の寄生虫や黴菌は到るころに蔓延してをる。而して尙ほ風の音草の葉すれの音も聞えてをる。涼しき空氣は膚を爽かにさせてをる。其の他種々の事件が内にも外にも發してをるのであるが、其の事を識らずして天地間に我れミ虫の聲のあるのみミ想ふてをる。最も手近

かき自身のうちにある事すら此くの如くであるから、時ミ場處ミの隔たつた事件に就て何事も注意を拂はぬのは無理ならぬことである。最も精巧なる地震計があれば、南洋の端より北洋の端に至るまで世界中に起る地震の所在地、震動の状態、範圍、時間なきが手に取る如く解るのは、駭くばかりであるが、我れ等はそれよりも精密に此の宇宙の間に於ける雜駁なる事がらが一々に解らねばならぬのである。

然るに何故にそれが我れ等の意識に上らぬやうになつたのであるか。ミいふに、此れは稍岐路に入つた問題になるが、大體からいへば宇宙退化の原理から來るのである。科學者の説に依るミ宇宙は自然陶治の原則に因つて、最初極めて下等なるアミーバの如きものから漸次に發達して猿ミなり、それが幾千萬年かを費して終に人間が起き而して文化の旺んなる今日にまで到つたのである。されば宇宙は草創の肇めより現時に到るまでの歴史を見るミ、たゞ發達ばかりありて會て退化はないのであるが、又た之れを哲學的に考へれば、絶對的平等の實在から差別的なる個々物を成したりミすれば、それは明かに退化にして今も宇宙全體が退化の道程にあるものミいふてよいのである。現代の文明を見て明かなる如く世の進むに従ふて分業法なるものが盛になつて、一事を爲すにも多人數の手を借らねばならぬやうになつた。昔はプレートでもアリストートルでも、孔子でも其の理想ミするころは、一人で政治家でもあり、宗教家でもあり、教育家、藝術家、軍人でもあつて、自由に個人の能力を發達させやうとしたものであるが、世の下るに隨つて悉てが分業で、醫師ミいふ一個の職業の中にも内科



外科を分れ、胃腸病専門、肺病専門、眼科、齒科、耳鼻科といふ風にます／＼小さく狭く業務を分ける、それで眼科醫といへば人間の目ばかりより知らぬ、鐵炮鍛冶といふは天地間に銃炮の外は何にもない又筆生といふ職にある人は、終日終夜甲の紙面より乙の紙面に文字を寫し探るばかりである、貧しき婦女の絲を績ぐものを見よ、朝より夕に到るまで蜘蛛もこもに絲を引き伸すだけが職業である、工場に勤ける鐵工は重い鏈をふり上げるのが一生の業務である、鑛夫は岩を掘つて鑛物を截るだけが一生である、かゝる小さな狭い天地に閉ぢ込められて働かねばならぬ人間は鎖のついてをらぬ囚人も異なる、こころはない、囚人は鎖を切れば自由な天地があつても、人生は此の牢破りをするといへば自殺するこころである、而して此の狭い究屈なる牢屋も一代二代に作り上げたるにあらずして、天地開闢の初めから長らくかかつて堅く築いたのであるから、天地の歴史は此の牢獄造築の歴史である、之れを進歩發達と讚美するのであるが、什麼適當ではないらしい、昔は人生といふものを玉で貫ひ受けたるに、之れを磨り耗らし／＼て今は鐵屑のみ残されてをるのであるが、此の怪しげなる寶物を又た我れ等の子孫に勿體らしく傳へねばならぬ、慙くて我々は絶対に自由なる本來の性質を失ふて實在界からますます遠ざかりたるために、自身の身體(則ち宇宙全體)に發つた事件をも感知せぬやうに中毒したのである、さりながら假令へ全身は痺れて居るにしても、尙ほ自身の身體には相違ないから、をりより自身の身體(則ち宇宙)の或る部分に發つた事を神祕的に感知するこころがある、それがために事件の發るこころを豫知するやうなこころもあるのである。

さて宇宙が一の實在にして現象は則ち眞如其のもの、六大其のもの、一心其のものなれば宇宙間に起るこころの事變は皆な我れ等に感應がなければならぬ、こころは上に述ぶる如くであるが、それは外界から我々が影響を受ける方についていふので、若し我々が實在其のものであるなれば他の影響を受けるばかりでなくして、我々の一舉手一投足が克く宇宙を動かす力を持つて居らねばならぬ、例へば掌を以て大地を打つ此の微かな人間が大地を打つたこころで微かな響き極めて少量なる土砂が動く位のこころで、何の反響もないやうであるが、此れを論理的に考ふれば、茲で打つた大地の響が米國や英國の人々にも聞えて居ねばならぬ、土砂の運動が他の半球の住民にも、天上と地下の住民にも等しく感ぜられてをるのみならず宇宙全體に其の響き道理が傳つて居る理であるが、我々も同様に他の人々にも感覺が頗る鈍つてをるから、或は我が發した事件に對してもさして駭かぬかも知れぬ、さりながら斯くも實在界から遠ざかりたる人間世界に於いて、今も尙ほ實在界の力や自由や融和の傳が少しばかりではあるが、取り残されてをるこころのものがある、夫れは人間の意思である、意思は他の情や智や肉體なき、異つて、他のものを動かす、他のものを同化させる力があるから、此の意思が一たび動いたなれば必ず他のものを動かさずにはをらぬ、而して意思が強ければ強いだけ實在界の自由や融和を發揮するこころが多いのである、我れ等が生死を解脱して再び實在界に入りてそれと同化するに至るのは此の力によらねばならぬ、意思が能く他のものを動かすこころについて最もちかき例は催眠術である、其の實驗に依れば催眠術を行ふ人は、行はれた人の精神を全然支配して花を見



させやうと思へば花を見、幽霊を見させやうと思へば幽霊を見立て座れ歩め何んぞ云ふてもいふなりに動くのである。此れは人を動かすのであるが、尙ほあらゆるものを此の力で動かすことが能きる。かの有名な甲斐の慧林寺の快川國師の話なきがそれである。此の人は武田信玄の敬依僧であつたが、後に織田信長が武田氏を亡したとき此の慧林寺を焼いた。其の時快川國師は「安禪必ずしも山水を須ひず、心頭を滅却すれば火も亦た冷たし」といふて猛火の中で結跏趺座して、泰然として死んだのである。觀念の力は強いもので火も熱からず水も冷たくはなくなるのである。さりながら快川國師はまだ充分禪に達しては居らなんだと見える。何となれば火も亦た冷たしと喝した其の冷たい火に焼け死ぬから拙くなるので、今ま少し發達したなれば冷たい火には焼けぬやうになるであらうが、此れは觀念の仕方と拙いので、自身の心頭の方を滅却したから火は國師を焼いたのである。若し心頭を滅却せずして火の方を滅したなれば焼けなんだであらう、そこになる。日蓮聖人なきは上手で、龍の口の危難に遭はれたときなきは心頭を滅して首頭を刎らるゝ代りに、太刀執りの太刀を折つて了ふたが、これでなければならぬ。其の熱い日の裸體になるも尙ほ苦しさを感じる。まじ襟を正して涼風を呼べば、暑氣は消えて忽ちに颯々たる風が膚に吹くのである。醫師にしてもそう、たゞ薬品を與へて、それが效けば癒るであらうが、然らざれば癒らぬ位の考にては、纒かに藥物だけの效能であるが、其の藥物の上に意思が加はつて是非この病氣を治さねばならぬといふ強い信念があれば、患者に與ふる丸薬水薬は徒の薬品にあらずして、一粒一滴が生々した剛健な金時のやうな童子になつて、病魔も病毒も一

時に追ひ擴ふて了ふのであるから、醫師も薬をもる外に一種の祈禱者の要心がなければならぬ。軍人にしても同様で、等しき兵器と武器と戦を以て兩軍相對する。まじ彼れ一撃、是れ一撃なれば勝敗のつかう理はないのであるが、尙ほ日軍の露軍に打ち捷てる所以は、日軍は意思の力が彼れに優れて居たからである。等しく彈丸ではあるが、露軍のは銃口から飛び出でたる機械的の熱鐵丸であつたが、日軍のそれは目を忿らし牙を鳴らし火焔を吐いて、砲手の腹の奥より踊り出たる夜叉神である。一は機械力にして他は人間なれば其の力に於いて非常なる相違があらねばならぬ。其の他船でも鐵でも筆でも紙でも意思を以て之を使へば無生物ではなくして生きて働く人間である。斯くいへば此れを比喻説のやうに思ふであらうが、比喻にはあらずして實説である。密教の種三尊の哲理は日常の實世間に着々として妙用を顯はすのであるから、密教は實踐的哲理にして、世の哲學や諸大乘と異なる。まじろはこゝである。

此の秘密眼を以て宇宙を見る。まじ宇宙は我が意思の命するまじに動くであらう、餘りに風雨が強く書齋の窓に吹きつけるまじ之れを叱らねばならぬ。餘りに波濤が激しく舷側を噛むまじ之れを睨らみ返へさねばならぬ。而して風も波も靜かになるのである。又た賢き人が天命を知つて惑はぬのはたゞ諦らめて天運にうち任せるためではない。徐ろに天を動かして我れに向はしめる。茲に於いて人は最も偉大なる力を顯はすのである。而して假令へ身體(則ち宇宙)は今ま痺れて何の自由もないにせよ、是れを自由に使役するまじは我れ等の權利にして又た矜りであらう。



科學者なきは現象界を組織するところの細胞の奥には奈何なるものがあるかを知らぬために、我れ宇宙との關係を疑ひ、人間の實力を否認して個人の價値を多く認めぬのであるが、若し我れ等が宇宙大の身體なることを知るならば、事の發る前それを豫知したり、我が意思のまゝに他を動かすことは不思議にてもあらず迷信にてもあらずものから、科學者なきに迷信を呼ばるゝことは少しも苦しからず、せめては此の下劣な唯物主義の世の人のために末世澆季の我々の血液の中にも靈的の活力が燃えてゐることを誨えて目に物を觀せねばならぬ現代はさすがに文化の旺んるために、諸種の方面に發達を遂げて智識の要求を満足させるためには科學があり、智識の教ゆるところに満足せずして情の要求の盛んなるものために文學及び他力安心の教が鼓吹された、さて意思の要求則ち天然界の手と足とを捉らへ、山河草木を叱咤して皆我が用をさせやうといふ大丈夫の爲には、まだ何んの準備もないのであるが、人生は不具では可かぬ、意思の要求を満足させるところの壯烈なる宗旨を發達させねばならぬ、密教は淨土門の如く情の一片に流れず、科學の如く知の一方にも傾かず、さりとて禪の如く意思一邊にも偏せず、道がに情と知とをかねて、かか意思に狙ひを定めたる故に、刻下の社會はこの宗旨に藉りて救はれねばならぬ、特に情を満足させる淨土門や、知識欲を充たす科學は天下到るところに旺んであるが、意思の要求に應じ得べき宗旨といへば日本其の中にも纔かに眞言と禪とそれに天臺位のものであるから、此れ等の宗旨は今や天下の珍とすべきである、然れどもたゞ夫れだけにては、頗る心細く感ぜらるゝ、何となれば此れ等の宗教は寶物となりて、倉庫に收藏せられん

とし、而して其時は全く世界に活動を缺きたる後であるから。

摩訶首羅論師是の如き説を作す曰く

地は依り處 地の主は是れ摩訶首羅天なり三界の中に於いて一切の命非命物は皆な摩訶首羅天の生ずるところ摩訶首羅の身とは 虚空は是れ頭 地は是れ身  
 水は是れ尿 山は是れ糞 一切衆生は是れ腹中の蟲 風は是れ命 火は是れ煖  
 罪福は是れ業 是の八種は 是れ自在天の身なり。……(外道小乘涅槃論)

## 母として の 宗教

母には種々の徳のある中にも兒を育てること、兒を慈しむことが最も偉いなるものである、育ふには根に水を澆ぎ葉に新しき空氣を吸はせる慈しむには暖かな日光を浴びせて心持よく睡らせる、夫れで稚木は生長するのである、水と空氣、それに日光の照さぬところには稚木は皆な枯れて畢ふ、兒が生れると直に善い人にしようとして手足の動かしかた、目口の動かしかたを教える、稍成人するまでヨチ／＼をして見せる、手を曳いて立つことを教へる、馬に成つて乗せてやる、蜻蛉を釣つてやる、玩具を作つてやる、叱る褒める、さまざまの事をして見せるのは母が兒を弄ぶのではない、皆な成人になる準備であるから、諧戯ではない、嚴肅な教訓である、大學中學の課程も一つ一つの教練である、然るに學



校の教育には慈愛の情が缺けて、たゞ教練するといふ事ばかりになつてをる。随つて教育は器械的であるが、母の教練には慈愛が絡まり合ふて那邊までが母の教練で那邊までが母の慈悲かは解らぬ。稚木が青々とし生育したのは光りの力が幾干で水や空氣の力が幾干か、解らぬ。同じことである。夫れが爲めに母には慈悲ばかりあつて教練はできぬもの、兒童の教練は學校に入りて始まるものと思ふやうに成つた。さて此の母の教養と慈愛の恩の重いことは釋尊が母に代つて己れを育て、呉れた姨母の大愛道比丘尼に對する態度でも明である。生前には母として事へ、入寂したときには姨母のために釋尊は自ら葬儀を行はれたのであつた。さりながら母には兒を育ふ慈しむの恩徳よりもさらに偉大な功蹟がある。其れは兒を産んだことである。人間は生れて後に教育の方法に藉つては賢くもなり愚くもなり卑しくも尊ぶくもなるのであるが、而し人間には生れて後には如何にも證方のない先天的人格がある。教育はたゞ此の人格を修繕して美しく粧飾することは能きだが、之れを改造することは能きぬ。教育の達かぬも道理で自身にすら自身の人格を何ともするところが能きぬでないか、而して化石したやうに固着した人格を作つたものは母である。

さて茲で人格のこゝを少し委しく述べねばならぬ。何故なれば今いふところの人格なる詞が普通に用ひられてをる。こゝろを違ふてをるかも知れぬからである。人格といふ語は種々の意味に用ひられてをるやうであるが、人間にはそれ、一つの定つた型がある。例へば大西郷のやうに體格の偉大な豪放な而して忠勤な人、品川彌次郎のやふな洒落な短氣な而して謹直な人、田吾作といふ大兵な力

男、豆藏といふ短小な我慢な横着者、といふやうに百人百種風の異つてをるものであるが、其一人々々異つてをる。こゝろから西郷風、品川風、田吾作風とそれ、定つた型が能きてをる。それを人格といふのである。恠く種々の人格が成きるのは、第一身體の方からいふと、背長の高いもの、低いもの、容貌の醜い美しい、色や髪や爪や肉つきの違ひ、目や鼻や口の着きかた、立居の容子、身體の強壯なるか多病なるか、物のいひやうなごの違ひから人間の風が異つて来る。第二精神の方からいふと、賢いもの、愚かなもの、短慮なること、宏量なること、格謹なること、奸邪なること、情の濃厚なること、淡泊なること、豪毅なること、小膽なること、温雅なること、躁暴なること、愚直なること、寡欲なること、貪婪なること、好き嫌い、勤儉なること、無頼なること、其他種々の氣風の違ひから復た人間の風が異つて来る。第三社會との關係からいふと、門地の高い卑い、富んでをること、貧しいこと、權勢のあること、ないこと、其他一家の狀態や其の時代の氣勢や自身の知識の程度なきが加つて、此等内外の事情が相ひ寄り相集つて一人の人格が成きてをるので、此の人格は一朝一夕に改造することは能きぬ。然るに學文をするに多少人格が異つて、愚かな人も賢くなり、短慮な人も宏量になる。又た運動を努めたなれば、虚弱な人も壯健になる。品性の下劣な人も高尚な人となる。こゝろはあつたりながら、其れも人格が改造せられたのではない。一時本來の性質を壓して働かせぬやうにしたまで、先天的の人格は少しも異つてはをらぬ。三つ兒の心百まで、何に彼の時には本性が顯はれる。然らば此の人格は何から成きたのであるか、いふと科學者は之れを遺傳性に依るといふ。則ち我等の身體の強壯なるも脆弱なるも、精神の利發なるも暗鈍なるも、皆な先祖傳來の賜である。こゝろ、佛敎



は之れを因果應報の理に歸して、爪の長いも悉て我等過去の業因に依るまいふ、先づ其の原因論は何れにしても、改造するこゝの成きぬ人格は肉なり血なりを添へて此の世に送り出して呉れたのは母である、それで母が見を撫育し慈愛するこゝは辱なき恩徳であるが、此の人格を産み出して呉れたのは更らに偉いなる功蹟と言はねばならぬ。

等しく之れを宗教と云ふけれも宗教の中にも種々の異なつた理想を持つて居るから、一筋に宗教は慙くなければならぬものゝ定めざる譯にはゆくまいが、大概三つに別けるこゝが成きやう、而してかの母の徳であるこゝの教養するこゝ、慈愛するこゝ、而して生産するこゝ、此の三つに宛て、見たなれば面白からうと思ふ。

第一 釋尊は常に三界は我有なり、一切衆生は我子なりとの給ふ、故に其の説法は教師が學生を教ゆる如くにあらずして、母が見に誨ゆる態度である、佛成道の後初めて鹿野園に在りて四諦の法を説かれたるより、般若を説き法華を説き、終に沙羅林中に大涅槃經を説くに到るまでの四十餘年の間に、諄々として説かれたる自力聖道の法門は、際涯なく迷へる我が愛兒を憐愍する切なる情の溢れて、過めさなく湧き出る悲みの涙の聲にして、いろ／＼に方便引進して現在の果報の拙きこゝ、我等が持つてゐる煩惱と悪業との未來には恐るべき果報を招くべきこゝ、涅槃の正に欣求せざる可らざるこゝ、而して涅槃に到るには無漏の行を修せねばならぬこゝを誨え、開示悟入せさせやうと努めらる、而して又

衆生も母なる佛の深重なる慈悲に絆されて、如何にもして佛の本懐に背きまつらざるこゝを誓ふて勇往邁進するに到つた、聖道門は何處までも教え導かふこゝするのである。

第二 淨土眞宗や基督教のやうな他力往生を宗とするこゝになる、我等の人格なきは全然抛け捨て、只管に彌陀の慈悲、ゴットの愛にうち委せるので、嬰兒が母の懷に抱かれて、母の胸に燃ゆる慈愛をひし／＼と感受するのである、尙ほ之れを譬へて見れば、須磨や明石の浦づたひにした、か月の蒼き光りを浴びてすが／＼する慶びの躬に泌たる酔ひ心地に、晝の苦熱も疲勞も海の水に流して、汗臭き穢から教はる、西行法師の歌へるやうに、影さえてまこゝに月のあかき夜は心も空にうかひてそすむは我が力にはあらず、月の力なり月の光りの力なり、美はしき彌陀、ゴットの慈愛の光明に縋りさえすれば、我は其の光りに包まれ其の光りに酔ふて樂しき生活に入る、夫れから我等は努力して苦き向上の修行をせねばならぬのではなくして、教はれた後の有難いといふ感謝の生涯に入る、淨土門は母の慈愛の強きために、教練の事なごうち忘れたるかやうである。

第三 前の釋尊の聖道自力の宗教が母の教養に比せらるべく、次に他力淨土門の宗教が母の慈愛に比せらるべきならば、今此の第三の宗教は母の生産の徳に比すべき宗教である、聖道自力門の理想は懇ろに誨えて、其の最高の歸趣であるこゝの涅槃に到らしめやうとした、而して他力淨土門にあつては慈愛の暖かき光明に依りて、迷へる兒を娑婆の苦惱から救はふこゝした、然るに此等の宗教にあつては現在の我等、鑄型に入つた固着してをる此等の人格を改造しやうと思はなんだが、此の第三



の宗教即ち秘密教にては人を教ゆる外に、人を慈しむ外に母が兒を産むやうに人を産んで、今までの人格は異ふた新しい偉いなる美しい人格に改造しやうとするのである。

ワグネルは此の腐敗せる人類を改造して、愛に満ちたる而して其の愛は直ちに神の胸の裡に鼓動してをる愛を融合するところの美はしい人類に爲さんか企てた人である、而して彼は戀を描いた樂劇に依つて人間の改造が能きるものか信じて居たのは實に壯絶なる考であつた、然るに兎角く宗教家、文學者、藝術家なごは精神の一部に狙をつけて全人格、殊に身體や禍福なごのこころを見通がす風があるが、ワグネルも人類の改造は企てたものか、穢れたるものを清淨にする、邪なるものを正しくする、曲れるものを直くする要するに人類の精神の一部分を修繕しやうかといふはごのこころで、人格の全體を産み直すかといふやうなこころは企てぬのであるが、秘密教が人間を改造しやうかといふのは其んな姑息なのではない、人格を根本的に改造して新たに産み直そうかといふのである、愚なる人は賢くし、鈍きは敏くし、卑野なるは尊高にし、悉て精神の改造せらる、ばかりでなしに、背長の短きは高くし、色の黒きは白くし、貧しきは富まし、權勢なきは威光を増し、病弱なるは強健にする、一族不和なれば和順ならしめる、一國不隠なれば鎮定させる、それであるから秘密教には他の聖道門のやうに説いて誨えるかといふところは皆無ではないが、尙ほ復た彼の淨土門のやうに慈愛の光明で、人を暖めてやるかといふこころも皆無ではないが、其れが主ではない、秘密教の性質を平たく云へば人類の宇宙改造の仕様書かでもいふべきものであろう、試に何れの經文でも儀軌でも採りて見るに、斯くすれば智慧が増す、斯く

すれば福德が増す、誰れは斯くて愛敬を得たり、彼は斯くて怨敵を防ぎたりか説いてある、さりながら此等かても尙ほ技業の改造にして、人間の根本的改造は秘密灌頂壇に入らねばならぬ、此處に入るかき現身の穢れたる肉も血も骨も精神も人間の爲し來たる習慣も乃至は運命も容貌も其の他今までの物は捨て、高祖大日如來より嫡々かして稟け得たる清淨なる靈妙なる血か肉か骨かを以て改鑄せられ大日如來か等しき不思議神通の自由なる肉身を成し遂げらる、今まで瓦石で成つて居た身體が黄金で改造せられたのであるから、灌頂壇に入るものは佛家に生れ法皇の子かなる、されば氏素姓に到るまで變つて來る、從て容貌も自ら變つて相好圓滿な人かなる、金剛薩埵は實に其人であつた、我日本人にても現に此の改鑄を受けた人は高祖大師であつたでなにか、人間の改造は空想ではない、現實の確證があるでなにか、それか此れは比較にならぬが、ワグネルが人類の改造を企てたのは實に秘密教の旨に適ふてをる、而るに彼は人類改造の方法かして藝術、異に藝術中の藝術であるかこころの樂劇を起したが、秘密教にては人類を改造するには曼荼羅の境界に入りて三密の妙用に依らねばならぬ、樂劇三密其處には天壤の差がある、さりながら尙ほ茲にも根本精神に共流したかこころがあるが、秘密の事は此れ已上に説くかこころを允されぬから茲に述べるかこころは能きぬ、其の替り同じく藝術に因りて人間を改造しやうかした、而して又た實際夫れに依りて改造せられたりか信じて居つた國民の話を上げて見やう、而して其の間に秘密教のそれか那邊かに呼吸の通じてをりはせぬかか肯かある、節があるかも知れぬ、それは希臘に行はれた演劇の事である。



希臘の古代には神事の演劇を「ミステリー」と稱して之れを見物する人は一定の資格を供へた人でなくては許されなかつた。一定の資格は、まづ身體罪障等を洗滌する、所謂拂淨の儀式を行つた後、段々彼方此方の神社に參詣し、其等の殿堂で或は神前の供物を頂いて喰べ、或は最も秘密として取扱はれて居る神様の記標、希臘の神々は一個々々の記標として或は蛇或はその他の動物植物なきを持つてをる、その記標の拜覽を許されなきて、さて一定の程度まで神聖になつた人ばかりでなくては、かの神事の演劇を見物する事を許されない、而して「ミステリー」はその名の示すが如く、最も秘密に行はれたもので、此の演劇を観た人々も大體のこゝの外は一切他言を嚴禁したものである。此の様に最も神祕不可思議なるものとしてこの劇を執行されたので、見物したのもも他に言ふを憚つて居るから、その詳細に就ては後世に到つて知る事が難いが、種々の方面から推測して、かの「ミステリー」なるものは頗る莊嚴に行はれたものといふ事が證據立てられる。かの一定の資格を有し、演劇の拜覽を許されたものは、九月下旬の闇夜に一同集つて靜肅に行列を作りアゼンス市のエリュシオンの前まで練つて來る、元より闇夜の事ではあり、照す者も持たなければ一點の光明も四隣に認むる事の出來ぬ中に彼等は行列するのである、且つ其集るものは謂ふまでもなく拂淨やその他あらゆる儀式を経て來た人のみゆへ、彼等の信仰は漸く篤く、その神祕的感情は漸く高まつて精神はこの世以外に馳せて居る、さて彼等の一行がエリュシオンの前に集るに、正面の扉は左右に開き、この時一道の光明が中に輝いて、此の光りに照らされ

て一行は場内に入る、その入口には金色燦爛たる鎧を着けた番兵が二人立つて警衛して居る、入口よりして行列の進むに共に正面なる演舞場は更なり場内には燦爛たる光明輝いて眞晝の如く、先に闇中を進み來たの違つて、彼等一行はこの光明の中に包まれて居る有様である、その舞臺の裝飾は恐らく當時希臘國に有名なる繪畫彫刻家の妙手に成つたもので、彼等妙手が力を盡し技を揮ふた繪畫彫刻をば掛け列ねてある、その美はいかほきであつたらうか、さある間にエリュシオンの神官長ヒロファシトが舞臺に現れ、頗る莊嚴な調子で説教の如く是より始まるべき神曲の事を宣言する、さて始まる演劇は勿論希臘の神話古傳を脚色したるもので、その演劇脚本は當代第一流の作家の手になり、舞臺で奏せらるる音楽は是亦當代に有名なる音楽家の司る所である、かくの如き演劇が演ぜられるのであるから、其見物は勿論今日の如く只芝居を見るに似ふのではなく、彼等自身既に天上世界に入つて目前に神様の爲さるゝ事を拜觀するといふ感情を以てした、單に見物の一行のみならず、この舞臺に現はるゝ俳優、音楽家、其他の者も謂ふまでもなく、凡て一度はその神聖な儀式を経て皆神に近く成り居るものばかり、即ち舞臺演劇そのものゝ最も美術的に出來て居るといふばかりでなく、俳優、音楽家、見物者悉くその撰擇を十分にされたものばかりであるから、雙方悉く熱誠なる信心を以て演じ且つ觀たものである。當時そのやうな「ミステリー」を行つた目的は畢竟その儀式を経て劇場に入つた人達が、それに因つて神様の事を知るに似ふに止まらず、それに依つて現世には神様の力を得て、死後には幸福を



得るこいふ信仰を有つて居たのであつた(姉崎博士の「演劇の使命」に據る)。

されば希臘の文明を最も多く呼吸したワグネルや、乃至現代の藝術批評家の中には藝術に因りて根本から人間の精神を改造するこゝが能きるこゝ信じてをるが、秘密の眼から見ても實に當を得た考こ言はねばならぬ、母の教養や慈愛にては今のまゝの人間にして此發達の刺激は與へるではあらうが根本の人格は少しも改善が能きぬ、那麼しても人間を産み變えねばならぬが、夫れには秘密教の理想を實現するより外に途はない、而して此目的を補助するものは藝術である、少くも藝術の大目的は秘密教と同じ方向に向つて居るのではないか、それで高祖も物を利するは藝術に依らねばならぬこ論ぜられた、物を利するこは何ぞ則ち秘密の理想なる人間を改造するの意味ではあるまいか。

### 未だ文學に現はれざる宗教趣味

宗教こ文學こが深い關係のあるこゝは事新しくいふまでもないこゝで、或程度までは文學的の要素がなかつたなれば、宗教の趣味は實に索然たるものであつたであらう、而して兩者の相關渉するこゝは單に皮相的でなくして、根の深い截るに截られぬ間柄であるこいふのは兩者が本來別ではないので、何れも同一法性の上の金剛の舞戲であるから、普通に文學、宗教こ區劃を定めて各異なりたる理想を有つてをるやうに想ふのが誤りであるかも知れぬ、が今日までに文學こして發達して來た詩

和歌、俳句、小説なきを、かの宗教こして發達して來た佛耶の教なき、對比すれば、其の色分は非常に異ふてをるやうに想はれるから、且らく兩者を別物こして、さて文學が那邊まで宗教の趣味を咀嚼して、歌に歌ひ詩に詠じてをるのであらうか、而して如何に文學が宗教のためになつてをるであらうか。

詩歌小説なきいふ文學的作物の上乗なるものになるこ、讀んで面白かつた可笑しかつたこいふ一時の感興を與へるばかりでなく、凡眼を以て或る實景を看てもさして深い興味を感ぜざる事にも、文學者の筆に上つたものを見るこ、其處に何こもいへぬ新しい印影を得るのである。例へば此の頃の時候でもあらうか、一室に籠つて炬燵を抱いてをる人を見たこころで、何の趣味も感ずるものでないが、「ほこ／＼朝日さしこむ炬燵かな」こいふ俳句を讀んだこき、いかにものんびりした景を想像して寒空に震ひながらも、膝の暖かきやうに覺える、俳句にでも斯かる力がある。

宗教趣味に文學的の彫琢が加はつたなれば感興を惹くこゝも頗る多いものである、梁川が其の日記の中に引いてをる口傳鈔の一節に、

鸞聖人東國に御經廻の時、御風氣こて三日三夜ひきつゞきて水漿不通しましたすこゝありき。つねのこきの如く御腰膝をうたせらるゝこゝもなし、御煎じものなきいふこゝもなし、御看病の人を近くよせらるゝともなし、三個日こまふすこゝき噫いまはさてあらんこおほせこゝありて御起居平復もこの如し、そのこき惠信の御房たづねまふされていはく、御風氣こて兩三日御寢のこころに、いまはさてあらんこおほせこゝあるとなりこゝこそ申上。聖人しばしましてのたまはく、



われこの三箇年のあいだ浄土の三部經を讀むこゝをこたらず。おなじくは千部よまばやこおもひてこれをはじむるころに、またおもふやう、自信教人信、難中轉更難。こみえたれば、みづからも信じひきをもをしへて信ぜしむるほかはなにのつこめかあらんに、この三部經の部數をつこむこゝ、われながらこゝろえたらすこおもひなりて、このこゝをよく／＼案じさだめん料にそのあひだひきかつきてふしぬ。つねのやまひにあらざるほごに、いまはさてあらんこいひつるなりこおほせこゝありき。

此れを讀めば信念の高き聖人の佛があり／＼、こ心鏡の中に浮ぶのである。これは文學の筆が宗教趣味を書き生かしてをるので、文學が宗教に恩を施すのは茲である。

本來宗教趣味は冷やかなる理論にあらずして、生々した信念なれば、學者なきが吃々こして講義したりこて、其れをいひ生かすこゝは頗る覺束ない。此の信念をそのまゝに寫して生々した趣味を感じさせるには、文學が常に用ゆる手段則ち修辭法に藉らねばならぬ。而して此の修辭法は山水の景や、人間の情や、娑婆の事件や悉て文學が喜んで撰ぶ題目を描くばかりでなくして、無常迅速や、理外の理や、眞如の月や、如來の慈悲や、神の愛やあらゆる宗教趣味を描いて、さながら其の境に在るやうな感興を起させるこゝが能きる。既に之れまで文學者の筆に上つたものゝ例の二三を擧げて見るこゝ、いつもよく引き合に出るのであるが、近松の道行物の中の、

此の世の名残り、夜も名残り死に行く身を譬ふればあだしが原の道の霜一足づゝに消えてゆく、

夢の夢こそ憐れなり、あれ數ふれば曉の七つの時が六つ鳴りて、残る一つが今生の鐘の響きのきをさめ、寂滅爲樂こ響くなり。鐘ばかりかは草も木も星も名残りこ見あぐれば、雲心なき水の音、北斗は冴えて影うつる。

神韻標渺こして即離の間に無常迅速の悲しみがひしこ身に泌むを覺ゆるのである。

西洋の詩人が天然に父なる神の愛の充ち満てるさまを歌ふては、

朝にはマリヤ來り地に愛の光りを與へて碧空に笑み給へり、靜かなる夜、大地の眠る時天上に星ありて御母こ共に覺む。園生にマリヤ彷徨へば鳥は歌ひ花は紅に開く。

こいひ、紫の藤浪に極樂の紫雲を想ひ、夕日の雲に紅染むる西の方を眺めては阿彌陀如來の影向に撞がれたるこ同じやうに、神や佛の美はしき慈悲の光明に照さるゝ心地する。

又た芭蕉の翁は只惘然こして坐りたるまゝ、眠るにもあらず覺むるにもあらず、萬籟寂こして忘想全く絶ゆる其瞬間、窓外の古池に躡蛙の音ありて、自らつぶやくこもなく人の語るこもなく、「古池や蛙飛こむ水の音なる句かできたのである。此句を誦するこき幽玄なる無相の禪味を吸ふのである。ほろ／＼山吹ちるか瀧の音の句や、明月や池をめぐりて夜もすがらの句にも、凡境を超へた閑寂な眞境に入る想ひがある。ウォーズワースの詩や蘇東坡の詩の中には、後に峨々たる深山聳えて梢に一乗の果を結ぶ」を觀し、前には盪々たる流れ湛えて實相眞如の月浮ぶを想ひたる聖者の胸の裡に響くなる、法華一乗の妙典を聞くの趣あるものがある。



文學の域内に於いて、靡ろけながら歌ふべきほどの宗教趣味は歌はれてをるこいふてよいのであるが、單り密教趣味のものが詠せられたのを見ぬ。或は阿字を題目にしたり、或は眞言の功德を題目にして詠むだものも稀れではないが、要するに餘りに高遠な複雑な趣味は、連ても短歌や俳句なきを以て詠みこなすこゝは能きぬ。強ひて平家の文覺上人荒行の條にあるものでも舉げて見れば、

頃は十二月十日餘りのこゝなれば、雪ふり積りつらゝるて、谷の小河も音もせず、峰の嵐吹き氷り、瀧の白糸垂氷となりて、皆白妙にをしなべて、四方の梢も見えわかず。然るに文覺瀧壺にをりひたる、首際つかりて、じくの咒をよみてけるが、二三日こそありけれ、四五日にもなりしかば、文覺堪へずして掻き上りぬ。數千丈漲り落つる瀧なれば、なじかはたまるべき、嵐をち流され、刀の刃の如くにさしも、嚴しき岩かきの中を浮きぬ。沈みぬ五六町こそ流れけり。時に美しき童子一人來りて、文覺が手を取り引上げ給ふ。人奇特の思なして、火を焚きあぶりなごしければ、定業ならぬ命にてはあり、文覺程なく生き出でぬ。大の眼を見瞋らし、大音聲をあけて、我此瀧に三七日打たれて、慈救の三落又をみちようこ思ふ大願あり。今日は纒か五日にこそなれ。末だ七日にも過ぎざるに、何者かこれまでは取りて來れるぞ。こいひければ、聞く人身の毛よだちて物いはず。又瀧壺に歸りたちてぞ打たれける。第二日こ申すに、八人の童子來りて、文覺が左右の手を取りて引き上げんこし給へば、散々に抓み合ひて上らず。第三日こ申すに、終にはかなくなりぬ。時に瀧壺を汚さじこや、鬢ゆひたる天童二人瀧の上よりをり下らせ給ひて、世に暖かに香しき御手を以て、文覺が頂上よりは

じめて、手足の爪さき足裏に至るまで、撫で下させ給へば、文覺夢の心地して生きいでぬ。そも如何なる人にてましませば、かくは憐み給ふやらんこ問ひ奉れば、童子答へて曰く、我はこれ大聖不動明王の御使にて、金伽羅、勢多伽こいふ二童子なり。文覺無上の大願を起し、幽冥の行を企つ。行きて力を合せよ。明王の勅に依りて來れるなり。こぞ答ふ。文覺聲を怒らして、さて明王は何處にましますぞ。都率天にこ答へて、雲井遙かに昇り給ひぬ。文覺掌を合せて、さては我行をば大聖不動明王までもしろし召されたるにこそ、こいひ頼母しう思ひ、猶瀧つほに歸りたちてぞ打たれける。

實に莊嚴なる光景にして、質礙不淨の現實界を超越したる神祕の境に遊ばしたる趣はあるが、なほ秘密趣味の皮相的描寫なれば、本來具足三身徳、三十七尊住心城の眞の影は少しも顯はれてをらぬ。壺坂靈驗記の觀世音や利生記の金比羅の物語りは、たゞ一篇の劇曲の中に顯はるゝ一事件に過ぎずして、此の趣味を表現するこゝなご思ひも寄らぬこゝろである。

かくて修辭の筆は未だ秘密趣味を寫すに到らなから、従つて斯の眞の趣味は世間には傳へられてをらずして、断片的にのみ秘密趣味の加へられたるほごのこゝであつた。然らば全く此の趣味を歌ふこゝが能きぬのであらうか。こいふに、或はそうでないかも知れぬ。原より俳句や和歌を以て秘密趣味を帯びさせようこゝしても、或は空無相のものこゝなり、或は諸法實相の景こゝなつて、三十七尊住心城の佛を描くこゝは能きぬから、長詩又は劇已上の型を用ひねばならぬ。假りにコーリツヂのエンセント・マリナーのやうな筆であつたならば、絶対に歌へぬこゝもあるまい。思はれる。彼のエンセント・マ



リナーは夢かあらぬかの境にありて、遠い／＼大洋の際涯まで漂ひて、現もなく幻もなく種々の不思議の事像に遭ふところの神秘的物語りであるが、あの筆をさらに精練したなれば、少くも秘密趣味に近いものが成るかも知れぬ。我國の文學史に現はれた人の中には、其れぞ思はるゝやうな人のないこゝは上にもいふ如くであるが、現代の作家にもそれぞ目ざす人に出會はぬ。鏡花の如き唯一の神秘的筆を有つてをる人も、斯の教の根底に觸れたこゝもないやうであるから、其の作物は單に妖怪變化を寫すに駐まるであらう。謠曲の中に現はれる鬼や變化もこの趣味には適してをらぬのを以て見ても、秘密趣味が鏡花なごのものでないこゝは明かである。然るに此の頃逍遙のものした樂劇常闇には何もなく吾人の要求する秘密趣味のほの見えてをるやうである。あれには秘密劇若し能きるこゝすれば、こゝでもいふやうなもの、輪廓だけが能きてをるのではあるまいか。勿論作者の理想には三十七尊住心城なごの根蒂は最初からないのであらうが、あれを以て見ても秘密趣味が文學に上るこゝがないこゝは言はれぬ。自體宗教の趣味で文學に上されてをらぬのは其の宗の非常なる不幸で、其の趣味を人に傳へるこゝも能きず、自らもしみ／＼味ふこゝも能きずして、有や無やのうちに終つて畢はねばならぬ。然るに若しも文學に上すこゝを得たならば、其趣味は普遍的のものとなつて、困難なる講義や説法的手段に籍らずして、朗々讀み下すうちに其の趣味は湧いて來るものである。恰も禪宗の理外の理、言語で捕ふるこゝの能きぬ無相の境が、纔かに十七字の俳句のうちに密を嚼るやうに味ふこゝの能きるやうなものである。然るに今までのこゝろでは、遽かに斯の趣味が文學者の筆に

上りそうにもないこゝを覺悟せねばならぬ。

### 逝ける人より得たる教訓

予は常に憶ひ居たりき、予れに最も親しき人の運命の上に無常の風吹き荒みて、愛の枝慈の花の榮えにし大木の條ちにして打ち倒されもするならば、其の悲み其傷みは奈何なるべき。胸千斷し腸九廻する懊惱にはえ耐えざるべし。果せるかな愛別の悲しみは何の容赦もなく豫想に違はざる深き痛きものを齎らして予れを苦しめたり。世には親を失ひて三年の間泣き悲しみたる子ありき。子を失ふて狂氣する親あり、夫の死を傷みて世を儚なむ妻あり、妻の逝きたる跡を追ふて逝く夫あり、兄弟の死を愁ひて一つ途を急ける弟妹あり、友の死を痛んで樂しまざる人あり。予れの此の愛別の悲み、傷み、こは他の何人にも劣らざるものなりしならん。然るに愛別の苦しみに對する予れの豫想は單だ悲み、愁ひ、惱み、悶えの如き厭ふべき惡むべき情緒の亂れのみにして、一向らに之れを懼れたりしに、今正に其の人逝き、予れ自ら其の悲しみたる後、何故とも知らず、其の痛き經驗の裡より不思議なる満足の情の湧き出づるを覺ゆる也。沙漠の熱したる空氣の中に那邊よりこもなく清涼なる風の吹き送るかのやうなり、世の常ならば逝きたる人の跡を偲びては、只管らに泣き悲むこそ人の道にして且つ禮なるべきに、苟且にも亡き人を想ふて満足の情を感ずるなき言へるは破倫のこゝなるならんか。人情に



は遠きやうなり。されど予れもても他の人の如く愛別の苦しみを苦しみ、無常の傷みを傷み、傷みて後苦しみて後其の傷みも苦しみとの網を破りて、茲に満足の光明を認むるを言ふなり。悲しみたるは迷へる人と同じ悲しみにてありき。傷みたるは悟らざる人と同じ傷みなりき。悲しみ傷みは汚れたる情にはあらざるも崇高なるものにあらず。他力往生を促がす人たちは、一念發起して佛道に入るに最も好き因縁なれば、無常迅速、生死大事の事證を挿へて強く、人の道念に迫り、悲みたる上に悲み傷みたる上に傷み、終に己れ自身に堪え得られざるまでに傷み悲むも、實は佛道に引攝するの方便にして心弱きものゝするこゝなり。逝きたる人を想ふて其の悲みも傷みとの奥底より湧き出づる満足の情は如何なるものなるか。之れを打ち壊きて語るこゝは適はざるも、

一、逝きたる人ご予れごは頗る親しくなれり。昔は肉體の隔つるありて、親しきながら予れ等の間には超ゆべからざる墻壁のありたるに、今は予が身にひたご攝入して、予れ等は一體に融和したるやうなり。

二、逝きたる人ご予れごは極めて近くなれり。昔は西ご東ご相隔たりて實は忘る隙さへありたるに、今は想ふごき何時にても其の人は我が傍らにありて、思ふごごを予れに語れるなり。

三、在りし日は在りのすさびに我慢なご募るごごあるも、亡くての後は予れ獨り想ふて懐かしきごごさらに切なり。

四、在りし日は却つて何事にも心をきて、鬼角に飾り氣多く、善きは成る可く善きやうにいひ、悪しき

も爾からざるやういひ拵らへんご構へたるに、幽冥界の人には何事も隠すごごなく其の人の前に明白にさらけ出すなり。

五、浮世に在る時の塵は其の尸屍ご共に此の世に残して、逝ける人は眞に清淨なるものご成る。

六、逝ける人は重き黒き嗅き凡俗なる質碍の肉體を棄て、輕き白き香しき神々しき靈體を得たりご予れには思はるゝなり。

七、逝ける人は狎るべからず、犯すべからず、君主の威權を以て予れを支配し、判官の權能を以て予れを裁斷すれば、予れは其れに隨ふて悲喜し行止するごごを餘義なくさるゝなり。

八、冥界に在る人の前に立つごご、神佛の慈悲、威嚴よりも、予れには切實に感ずるものあり。

九、逝ける人を偲ぶに其の形ご質ごは實に美はしく、病にも事變にも犯さるるごごなき、安穩にして常住なる昔ながらの其の人を得るなり。

十、悉くて予れは現實の人を失ひたるも理想界の人を得たれば、逝きたる人の後の淋しさはたゞ一時の淋しさにして今は、其の人の在りし日よりも予れには賑はしく感ずるなり。

されば昔の人を憶ふて悲み傷むなかにも、昔の人ご親しく、近く、懐しく、清淨に、飾り氣なく、靈妙なる、權威ある、切實なる、美はしき、而して賑かに相遭ふごごを得るものから、愛別の悲しみご淋しさに泣きたる後は自ら満足の情なき能はざるなり。満足の情の次には喜びの情をさへ感じて、一向らに亡き人を悲むごごはなきなり。



靜かに想ふに逝きたる人、予れこの間には、恁く複雑なる觀念の關係あれば、淺はかなる人情に循ふて、愛別を悲しきもの傷きものこのみ見て、傷み悲しみたる後にかの美はしき満足の情の催ふさるゝことを打消さんとするは愚の至りならずとせず。されど予れは何故に満足の情に催ふさるゝかを知らず、逝ける人の淨土に往生したりと信ずるためにあらず、又強ちに佛の光明に攝取せられたりと信ずるからにもあらず、彼の佛が入涅槃の時、諸の弟子たちの悲むを誠めて、我れは常住圓明の月の如く入涅槃は暫し月の面を蔽ふ雲の如し、雲あるも月は本來の如く圓明なり、雲なきも月はさらに圓明なり、雲を見て月を見ざるものは悲しめ、雲を見ながらに月の圓明を見るものは悲むべからざる由を懇ろに説き給へり。予れは逝ける人を常住圓明の月なりと見得たるがために悲しまざるにあらず、さりながら逝ける人は本來圓明の月にして暫し雲の端に隠れたるなれば、予れをして悲しましめず、予れの悲しまざるに非ざることを信ずるなり。予れの悲しまずして満足の情を感ずるは予れの力に非ずして、逝ける人に常住圓明の徳あるに據る。圓明の月は永久へに予れに臨んで自然に其の光を映射するものなれば、予れは其の光を感ぜざることを得ざるなり。恁くて逝ける人より得たる満足の情は人情には遠きも、併しながら超人世的に深き根底ある新しき感觸ならざる可らず。

### 權威ある宗教

那の時代にも最も畏敬せらるゝのは賞罰を與へる權能を有つてをるものである。吾宗が世に畏敬されて來たのは其の説くところの教義が深く且つ高かつたからではなくして、善人に賞を與へ惡人を懲らす絶大の權能を持つて居たからである。而して此の權威は人間が作つた法文に依るのではない。

賞罰にて名譽を表章したり醜恥を表現するばかりでなくして更に峻嚴であつた。則ち賞罰は悉く現益であつて直ちに人の運命果報を變轉換易するのである。法律は人を殺したものを死刑に處する。物を盗んだものを禁錮に處するか、死刑にしても禁錮にしても其等の制裁は謂はゞ惡人を拘束して惡事を爲さしめぬといふまでであるから禁錮の目的は罪を懲らして改悛の期を俟つに過ぎぬ。死刑といふも單に惡人を押片づけるといふだけで罰の意義は頗る漠然たるものである。罰は怖ろしくないから罰を豫想して平氣で罪惡を犯すことが能きる。吾宗は賞罰を司宰する現益の宗旨である。而して新發心にも其の權能が與へられてをる。是れが吾宗の特色である。先づ予の經驗から語つて見る。予が青年時代若しくは少年時代から既に幾度か經驗したところに依る。我ながら不思議なことが尠くない。或は之れを迷信なりと謂ふものもあらう。又誇張なりと嗤けるものもあらう。予に取りても餘り芳ばしい事でもなく寧ろ恁かる經驗が無かつた方が普通にしては穩當であるから、可及的か



る経験は爲さざるやう、而して経験したところで之れを人に告ぐることを恥しいやうに想ふたので決して他人には語らなんだのである。

蛇遣ひといへば何人にも快くは見られまい、魔法遣ひなきは人間の齒すべきものでない、其れから手品師に成つても餘り氣持の可いものでないから香具師として避けたものである、悪くするに予の不思議の経験も香具師や蛇遣ひなきと同列にせらるゝ、恐があるので殊さら知らざる風を装はねばならなかつたのである、而して又た斯れ等の経験が氣味悪く忌やであるから常に爲まい、に努めた、めに機に觸れての偶然の場合でない限りは進んで試みたことはなかつた、併し自ら力めて試みてをつたならば其経験は決して尠くはなかつたであらう、而して今は可なり熟達してをつたのであらう、に信するのである、且つ又た慙かる経験は徳の優れた學の博い而して社會の安寧に人類の道德に對して高尚な健全な觀念を有つてをつて、社會の爲め人類の爲め、いふ偉大な精神が基礎を爲して居る人でなければ社會に取つても人類に取つても有害で且つ危険此上もないのである、が近時のやうに社會が腐敗して人倫の類れた而も宗教と言へば何等の力のない益のないもの、やうに想ふて、少しも宗教の威嚴も宗教の權能——然り宗教の價值といふよりは權能を認めずして、飽までも嘲弄し飽までも罵倒する時に當りては宗教家として一面は自衛上一面は人類の利め社會の利め、予が謂ふところの不思議力を充分に發揮する必要がある。

予が少年時代を通じて青年時代に屢次試みた其不思議の経験といふのは慙うである、予は境遇上

富み榮えた家へも往つたし中流の家へも往つたが、時には頗る貧しい家をも訪はねばならなんだ、素より弱年の事であるから予は訪ふ家の様子なきは少しも知らぬ、財産か幾千あるか家庭の關係は如何なるか榮えつつあるか衰へつゝあるか些しも解らぬのである、而して往く家毎に大きな家富んだ家榮えつゝある家さばかり想ふて如何に貧しき家を見ても生活の困難なることを看取する程に世智は老けて居らずして約まり何れの家も皆平等に見えて貧富貴賤なき云ふ觀念は更になかつた、いふ風であつた、自分の態度は常に其れであるにも關はらず、偶然或る家を訪ふた時の瞬間に全く直覺的に此家は衰へるに觀るのである、が素より何の根據もなければ推想する材料もないのであるし、又た何故に此の家が衰へるにいふことに想ひ到つたのであるか自分にも解らぬのである、其が初めて往つて初めて觀取した事もあつたが初めは何事もなくして屢次往つて其の家の家族も親密に成つた後にそういふ事を感じた事もあつた、何れにしても何んもなく然う感じたといふだけで別に其れを念頭に留める意もなければ決して再度其のやうなことを想起すこともなかつたのである、がさて不思議なのは其の直覺的の觀取が一々事實に現はれて來た事である、早きは一年半長きは五年八年の中に皆な事實を成して來たことである、其の時代から二十年にも成るが觀取した通りには成つて居らねばならぬ運命を辿つて往きつゝある家も現にないのである、實は其の當時の幼稚な頭には豫想が餘り事實に克く符合する面白さがあつたのである、其の時は最早種々の餘念に混ぜられてをつたので直覺的ではなくなつた、而して直覺的に觀取する前のやうな経験は頗る尠くなつ



て来た。随つて其の當時の觀取は誤りが多く適中したと云ふても偶然か、爾らざれば推測からの結果であるから何の不思議もなくなつたのである。其の中に慙かる事が習慣性で成るは甚だ忌むべきことなり馬鹿らしくもあり又た人の家を豫評するのは罪なやうにも想ふの事、一つは境遇も變つて来たので其の事は無くなつた。併し今も尙ほ其の時代の豫想のまゝに成りつゝある家を見聞く毎に我れ乍ら妙な感じもする。單り衰へて往く方ばかりでなく榮えて往く家に就ても直覺的に其の家の瑞運を觀取したこともあつたが其の方は數も尠く事實も尠いやうであるが、最初に直覺したものには大きな誤りはなかつたやうである。

其のやうな經驗を踏んでをる中に何時の頃からであつたか一種別な而して以前の經驗から轉化したやうに想はるゝ、新らしい經驗を爲し初めたのである。是れが例の誤られると蛇遣ひ魔法遣ひなき、一つに見らるる忌やな恐るべき經驗である。其れは人が自分に對して何か氣に染まぬ事をする機會に全く無意識的で罰當りな咀ふのである。此の咀ひを受けたる者は種々の不幸に遭遇して困憊に泣くのであつた。が一つ妙なことは私憤の爲めに咀ひを發したときには會つて效果のあつたことは知らぬ。咀ひを爲して後久しからずして何等か事實に現はれて来るのは悉く謂はば公憤を發した時に限つてをるやうである。是れは私憤になるに自然何等か其處へ私情が挿まるからでもあらうか譯は解らぬ。而し實際は私憤のために此の咀ひの語を發したことも極めて尠かつたからでもあらう。然して此れ等の經驗も最初は何事なく興味を感じた、めに其習慣性を作りたき意もないではなく、

随つて其時代には屢次其のやうな經驗を爲たのであつたが其れも前のと同様にして且つ罪も一層深いやうに感じられるので暫時にして決して爲まいと努めたがさすがに之れだけは機に觸れては幾度か繰返へされた經驗であつた。而して此の不思議の力は養へば餘り困難なこともなくして、更に著るしく發達して居つたであらう。これは深く信ぜられるのである。今から考へて見るに之れは決して根蒂のないことではなく高祖が常に試みられたこと、口碑に依つて傳へられてをるか、現益といふものを聞いて幼稚ながらに其れに眞似てをつたのであつたかも知れぬ。

吾高祖は常に娑婆へ影向ありて惡人に罰を與へる而して善人に利益を與へることを現益に就ての信仰は古くから國民の上にあつて其れが國民の道德に於いて偉大なる力を有つて居たのである。高祖が此力を有つて居らるゝばかりでなく末徒が皆な其れに現益を示す法力を有つてをることを信ぜられて居た。吾宗に威信があり信仰があつたのは是れがため後世の學者が考るやうに宗意の高遠な教義の深遠なきいふ爲ではなかつたのである。然るに何時もはなく高祖の現益といふものも一の口碑に爲て畢ひ、末徒の現益といふものも疑はれるやうに成つてからは眞言宗といふものが怖くなくなつた。虎が野に伏して居る時は群獸を懼伏して決して虎の威を犯すものはないのである。一たび動かなくなつてをる虎を見るに群獸は近づいて来る。いよゝ病んでをる死んでをるこゝが明になるに狐や狸が彼に戯れるやうになる他の小獸も彼の肉を食ふやうにもなるであらう。秘密宗には何か恐ろしい不思議な力があるかも知れぬといふので如何な勇將も猛者も吾宗に對して常に



畏敬の念を拂はずには居られなないのであるが、いよ／＼死んだ動かぬ怖くないといふ見定めを附けたものであるから、さしも威風堂々たるものであつた宗旨も群小の嘲笑に委せてをるのである。が實は法力現益なきは死したのでも衰へたのでもない幼稚な青年の時にでも不思議な力を有つて居つたでないか。吾宗をして再び生命あらしめ昔の權威あらしめるには其の力を振興するにあるのである。而して此の力を得るのは些しも困難なこゝではない。祕密宗の誰れにでも此の力のあるこゝを自信して其れを振作すれば其れで足るのである。斯れが一面には宗自身の防衛である。而して一面には社會道徳國民道徳の振肅である。現代の如く國法已外に怖ろしきものなく神佛の冥鑑なきは更に頓着なく、而して國法の網を潜る位はさらに困難を感じぬほゞ人智の進歩した世界にあつて、彼等を制抑し得るものは現益の法力である。祕密僧の恐ろしさである。世の人の信するこゝを信ぜぬこゝは問ふこゝでない。信ぜずして悪事を爲すものは罰を與へるまゝで信じて善事に勵むものに利益を與へさへすればよいのである。我等には與へられたる現益の法力があるではないか。

然しながら法に阿ねるものに私してはならぬ。克く佛の前に祈るもの佛を供養するものを善男善女と稱へるのは法に阿ねるものに私してをる傾がある。祈るもの供養するものが何にも善人には限らぬ。法に阿ねるものを利用して己が利を計るものは固より法を估り人を欺き世を瞞かす賣僧の徒にして彼等の罪の重きこゝは地獄の火にも焼けぬのである。我等はたゞ權威を有つて居れば足るのである。權威を賣つてはならぬのである。

## 死　　こ　　悲　　哀

冬がれて木の葉の地に落ちるものは朽ちて土に化る。十二月は今年の名残りである。往く歳を惜しみ死ぬ人を悲しむのは人の情であるが、想ふて見れば其れも迷である。朽ちる洞む枯れる死ぬ腐る其れが何故に其のやうに悲哀を感じねばならぬのか。死を悲しきものにして穢土を厭離し淨土を欣求するこゝを誨えたのは入佛道の方便として、死ぬこゝに悲哀があるが、悲哀が本來人の感ぜねばならぬ自然の情ではなく、悲哀を感じるこゝは寧ろ道理のないこゝであるから、其の他に因縁がなかつたならば吾れ等は死を悲しまねばならぬ。こゝは現在ほゞ強く旺んに知らなんだかも知れん。死を悲しむこゝを誨えて不生不滅の理想境を欣求せしむるのは入佛道の最好の因縁であるから、其の入佛道の因縁が入用であつた、めに吾れ等は死の悲しく傷しきものなるこゝを強く誨えられたのであらう。入佛道の途が笑ふこゝか忿るこゝかで得らるゝものならば吾れ等は其の笑ふとか忿るとかを強く旺んに誨えられて、入佛道の因縁ならざる死を悲しみ傷むの情なきはさらに價值のないもので、死を悲しむこゝを誨えられた吾れ等に笑ひや忿りが價值のないやうに無價ぬものであつたであらう。して見れば死を悲しむの情は強ちに自然の情でも何んでもないので、入佛道の好個の因縁異なるから入佛道のために後に誨えられた付焼刃である。熊使ひは餌をやるのは目的ではないが、藝當をやらせるには餌で釣らねばならぬが、本來からいへば餌、謀、藝當は他に深い関係のあるもの



ではない。死の悲哀なることを誨えられて居らぬエダ時代の民は死者を讃頌して、

噫、幻影よ、この處をすて、遠く去れ、祖先は死者のために居處を準備せり、其の處には暗黒なる夜なく、水は洗洋さして流れ、光明は普く照せり、閻魔は死者のためにこの處を愛割す。

ミ歌ふてさらに悲しみの情を死者に捧けてはあらぬが死者に對する誠の情は齊しく缺ぐるころはない。要するに入佛道の因縁のために死の悲しむべきものなるころや九想觀、八背捨なきの誨えられたるものである。後には死はたゞに悲哀なるものにして入佛道のためならざるものまでが死は悲し死は哀れミ歌ふに到つたのは愚の極で、詩人小説家なきが無暗に死を以て人の涙涕を搾り取らうとするなきは涙涕の源を知らぬからであらねばならぬ。

凋む朽ちる腐る死ぬミいふころが歎ぶべく欣ぶべきころではない。ミ同じく又た悲しむべきころでも痛むべきころでもなく、悲喜の外に立つてをる。破壊も滅亡も倒潰も損傷ではないが損傷であるかの如くいひはやし來つたのが人生の陋習である。吾れ等は何時まで其の陋習に囚へられてをらねばならぬか、否ミ想ふのは常に此のころである。清新なる酒には人も其の甘きに酔ふて喜んでをるが酒ミは米を腐らしたのが素ではないか、竹でも木でも腐つたころには無數の虫が産いてをる。木の葉草の葉にも腐つたならば虫が産くのみならず肥えた土ミ成つて鮮しい土壤は若芽を養ふであらう。血が腐り肉が腐り骨が腐り而して其れが皆な虫になつて匍ひ出す。腐つた水は無價ぬ力のないもの、やうに想ふが人を苦しめもすれば殺しもする。苦しめられ殺されるのが悪くさに腐敗物を厭

ふのであるが其れは人間の氣儘で腐つた水は非常な活力を振ふてをるのである。希臘が倒れた而して羅馬が起つた羅馬が倒れて而して西歐の諸國が起つた。周の世が美はしかつたからミて何時までも周の夢ばかり見てをつたミて何になるであらう。周が乏びたから漢や唐のやうな盛んな國が次へ次へ成きたのである。日本ミても太平な徳川氏の天下が何時までも續いて居つたらば什麼なものであつたらう。西郷公も死んだ伊藤公も死んだ而して國運は次第に盛んに成りゆくのである。祖父も逝き曾祖父も逝きしたから子も孫も曾孫も榮えて行くのであるが其れ等が逝かなんだならば次々の代々は奈何になり行いて居つたであらう。吾れ等の死んでやるのは子々孫々の利である。學文でも宗教でも藝術でも何れは不完全なものばかり其れが其の當代に在つては完全顔して社會を支配して居るのであるから、可い程にして世を讓つて新しい學文宗教藝術の途を開いて行かねば新しい價値あるものは出て來ぬのである。而して氓びる國の胸の中から新しい國が起る。腐つた社會は己れの眼へ活氣に満ちた社會を残してゆく。腐つてをる文學宗教藝術は其の腸の中では鮮しい文學宗教藝術を醗酵してをる新しいものを喜ぶ人が舊いものを邪魔物に想ふのは酒の旨さを稱へながら米の腐らされたものから成たころを知らぬからである。酒が米から成たものであるころを聞いて酒を造らずに腐つた米を帯めて大切に爲ながら其れで酒を醸らぬは誤りである。ミ同様に酒の旨さに酔ふて米の腐るのを悲しむも理れなきころである。今の朝鮮でも國が氓びたから民は助つた印度でもさうである。氓びかゝつたものを滅さゝらんミ焦慮るミ國も民も亡びて少しも期待せなんだ何にも



かが其處に榮えるやうに成る。是等の例は皆な誤つて居るかも知らぬが死んで往くのを悲しむこころは決して人の本然の性からではなくして方便に誨えられたものが錯りくして其れを悲しむこころが本義となり悲しまねば義理に於いて缺けるやうになつて来たこころは尙且事實である。而して人が死を悲しまぬこころに成つたならば則ち他から誨えられて二千年以來次等ノノ浸染し來つて畢に天性まで見らるゝやうに成つた習套的の死に對する悲哀の觀念を人生から取り去たならば人生の状態が全然變化して非常に面白いこころに成るであらう。勿論死を悲しまぬこころに腐るこころ朽れるこころ衰へるこころ滅するこころも悲しまずして却つて新しい生涯に入つたのである。新生命活力が復興したのである。こころをこころを知つたならば世界の局面は奈何に展開するであらう。社會の状態も變り歴史も變り學文も變り而して宗教は根本から變つて來ねばならぬ。併しながら是非こころに對する觀念は根本から變つて來ねば新しい宗教は起つては來ぬであらう。死が恐ろしい悲しいこころいふ人々を導く宗教なり學文なり文藝なりは最早や往き得るこころまで往き詰つて既う往き場がなくなつてを殊に宗教なきは是れより他に往きやうもなからうから今のまゝで新しい信仰なきは起るにも起り場がなくして同じ所を往きつ戻りつして何か新しい何か力のある道はなからうかこころ探つてをるのであるが要するに徒勞に畢らぬ譯にはゆくまいこころ想はれる。遷りゆくものを悲しむに事を缺きたる詩人なきは暮れて往く歳をすら悲しんで再び逢ふこころの得られぬのを惜んでをる。而して其れが道學の士には誨え草こころして恐れて相誡めてをるが暮れ往く歳が何故に其れはこころ恐る

べきものであるのかはさらに解らぬ。己れ一人老ひゆくを悲んで世の兒童が成長して來るのを喜ばぬ自分勝手なきは眞に陋劣ではあるまいか。死を悲しませる宗教は自然個人主義の獨往主義の小さな檻の中へ人類を驅つて追ひ込むのであるかも知れぬ。

明白に謂へば吾れ等は死を悲しむは想はぬ。偶々他人の死を觀たり己れの死を考へて遺憾に想ふこころはあるが其れは或る他に豫て期待してをるこころがあつたが計畫の通りに行かなので口惜しくも想ふのであるが其れは死を悲しむのこころは由來が異ふてをるのであるが人は其れを混同して死を見て悲しく想ふてをるこころ自分も想ひ人にも想はせて居るやうに見へるこころもある。勿論多くの人の中には紛れもなく死の外には何ものをも悲しまず死其のものを怕れる人は多分であらうが吾れ等は則ち他の種類に屬するのであるが自分にも混じてをつた傾きがあつた。生きて居たならば斯くもすべかりしものをこころ追憶は死んだものを惜しむの情こころ云ふよりも己れの計畫の齟齬を惜しむ啣つの聲である。こころすれば人の死者に對する悲しみの情も多くは自分の勝手の欲望であつて眞に死者に對する悲しみの情こころは云へぬ。何れにしても死を悲しむこころは怪しいものであるが其上に打ち立てんこころする宗教や文學や藝術も怪しいものこころはねばならぬ。然らば死を悲しまぬ宗教、腐る朽ちる滅ぶるのを惜しいこころ想はぬ文學藝術乃至は其のやうな人類の住んでをる社會こころは如何なるものであるであらうか。其れは頗る宏大なる問題でさういふ時代に成つた時の人類の全生涯が則ち其の答であらう。單り宗教や文學や藝術こころいふべきものではないのである。今はたゞ死滅や破壊



や腐敗に對しての吾れ等の觀念を改めて眞の自然の情其れは悲しむものであるにしても喜ぶものであるにしても方便を以て誨えられざる以前の狀態に還らねばならぬと思ふのである。師走の空は寒く人は烏鬼の匆々たるに愕き且つ哀しむるにあたつて暮れゆく日老いゆく歳を恨むの情に囚はれてはならぬと思はれるので此れを敗りたいと思ふばかりである。

## 第五學思章

(自明治三十七年頃  
至大正二年頃)

### 佛は說法し給はず

斯土の衆生は耳根銳利なれば佛陀は鼻根に緣らず眼根に緣らずして常に聲塵に藉りて說法し給へり。耶蘇も孔子もソクラテースも舌の爛れるまでも說法せり。人思へらく、說法なるかな。傳道はたゞこの一途あるのみ。

蓋し其の何の所以たるを知らず。佛陀が五十年の教化に於いて残されたる教法は、實に積みて八萬四千に剩れり。八萬四千の教法畢竟何物なりや。佛陀は衆生を拯ふて一句の法半紙の偈文をも説き給はざりき。佛陀の說法を聞きて、信受し開悟したる衆生も在らざりき。佛陀はたゞ光明を放ち、衆生はその光明に浴したるなりき。佛陀は日光の如く、説いて誨えんことをあらずして、映射して温濡を與ふるなり。而して佛陀の與へ給へる感化の事蹟を蒐めたるもの則ち教法として存するなり。法門に藉りて信解證入したるにあらずして、信解證入したるもの、因縁即ち法門なり。八萬四千の遺經は未だ會て一愚夫愚婦をも開悟せしめたることあらざりき。

斯く謂ば人その奇異なるに駭きて憮然たるものあらんか。何れの經文を披くも、愚蒙の凡夫佛所説を聽いて、初めて迷霧を拂ひ信受奉行するにあらずや。若し一言隻句を説き給はずみなれば、佛陀の教



化は不可能なるべし。佛出世の本懐那邊にありや。然り佛の教化は無窮なり。されど佛は槌を執りて庭上を拂ひ給はざりき。棒を以て魚は釣り給はざりき。説法は終に教化の具にはあざりき。説法は感化は日と月との如く、月と潮との如く、潮と風との如く、風と砂との如く、砂と露との如く、松と露との如く、露と草と、草と蟲との如く、其の性質を異にするものなり。假りに佛陀が教化の具として説法を用ひ給ひしならば、三の四無礙辯と十智力と不思議の神通力と、百千萬億劫の間に蒐め給へる妙巧徳を圓滿し給へば、破して何ものをか碎かざる。説いて何ものをか屈せざる。煩はしく權實大小半滿三乗一乗を異にして、衆生の根性に顧慮せられざる理なり。直ちに一乗を説きて、悉く信解せしむるの易き、朽木を薙ぎ甘露を喰ましむるが如くなるべし。又經典は佛陀の金口より洩れたる金玉なり。是を誦するものは直ちに無生忍を得べし。又た僧の説くところ、佛説を和解して俗耳には却つて近し、何故に聴くものも誦するものも説くものすら信解記入せざるか。佛陀在世の時、天龍夜叉八部鬼神人非人に至るまで、佛説を聴いて得脱せるにあらずや。吾人は天龍夜叉にも若かざるか。盡し説法を以て教化の具と思ひ誤れるものには解する能はざるどころなり。遺經は佛陀の教化の説明書。若しくは事蹟の記録に過ぎざるなり。遺經の數量の饒多なるに駭きて佛出世の本懐は説法なるかを揣摩せり。純金は既に精練せられたるを知らず、多き踏を視て鑽石は之なりと思へり。説法は教化の具にあざりたり。説法は智識を與ふるも、聽者は判斷の自由を有す。取捨は隨意なり。教師は地理歴史を教授して生徒は智識を豊にせり。而もその講義は絶對的價値を有せずして、判斷し取捨し反駁するこゝすら妨け

ざるなり。單純なる經説も亦爾かり。甲は圓教を説かば乙は頓教を説き、丙は顯教を説き、丁は密教を説き、而二を説くものあらば不二を説くものあり。本地身を主張するに對して加持身を主張するを妨げざるなり。釋尊の如き孔子の如き聖人は、智識を與ふる教師にあらず。直ちに人の肺腑を衝きて其の稟性を拉へ、命令を下して背犯を允さざるなり。服従せざるには嚴罰を加ふるこゝ自然法に異ならず。素より絶對的威力を有して批評と反駁を允さざるなり。佛陀は寔に電氣學を講ずる教師にあらずして、電氣其のものなり。教師に就いて智識を得、佛陀に接して電氣を感ず。佛は電氣學説を述ぶる教師にあらずして、人生に感染する電氣なり。理其のものなり。

人は同化性を有す。學者を視ては學者たらんを欲し、音樂家を視ては音樂家たらんを希ひ、畫家を見ても軍人を見ても商人藝人を見ても、汽車の旗ふり汽船のボーイにすら脚夫にすら我も見て學ばんを望むものなり。

人は又感染性と共に感化力を有す。父母は兒童の模型にして兒童は雙親の鈿鋸なり。弟子は師匠の映像にして師は資の羈絆に懸かれり。君子郷閭にありて民自から純朴なり。惡奸穢かに足を容れて闔村は安からざるなり。此感化力は言語にあらず。目にも鼻にもあらずして、人格其もの、力なり。人格は行住坐臥に發顯して、眠りたる時も働くこゝき粧へるこゝき、又靜かなるこゝき騒けるこゝき、笑ふこゝき忿るこゝき、渾ての場所と機會とに其及ぶ限りの力を振ひ、周圍を感化し而して感化を受けつゝ、あり斯くて勝縁に遭ふものは進み、惡縁に遭ふものは墮落するなり。我は能く凡ての人を感化しつゝ、復た悉ての人



は我を感化しつゝありたゞ其人格の大小に藉りて、他を感化し又自ら受けるに廣狹の差あるなり。佛陀は其の性格高潔遠大にして三十二相六十種好を具し、福智圓滿にして四無礙辯十智力十自在なり。衆生は未だ半言隻句の法を聞かざるに、既に其の威容に於て、其の靜慮力に於て、般若に於て、戒行に於て、其の慈悲に於て、辯舌に於て、福徳に於て、其の名聲と勢力と出生の因縁と出家の因縁と、其の他悉ての點に於て顯現する偉大なる性格に緣りて、衆生は電氣に感染して、麻痺したるが如くなりき。されど衆生は佛陀の此の威力を感受し、自己の頓に進昂し發展したるを自覺するも、未だ佛は何故にこの威力を有し、又何故に己れはこの感化を受くるかを知らず。茲に於いて佛前に進み、福祖右肩にして佛陀に其の因縁を承問す。佛陀は自己の功德廣大にして衆生は之を分享し甘受し信解し渴仰すべき所以を説き給へり。この時、衆生の、奥底に潛みたりし信念は、明晰に意識に上り來りて知識となり、暗夜に摸索したりし寶石を得たるが如く、大歡喜を生じて信受奉行するなり。電氣治療を受けたる人、謂ひ知らず爽快を覺ゆると共に、何の力が斯く偉大なるを驚きたるに、電氣の講義を聞きて信受躍踊するが如し。而して電氣學は電氣そのもの、説明なるが如く、佛陀は常に自己を語れり。常に身の上話なりき。自己を外にして原理を語らず、歴史を語らず、講義にあらず、批評にあらずして自己を陳ぶるなりき。何となれば佛陀自らが宇宙にして、自己の外に宇宙を知らざるなり、自己は則ち宇宙の大なりき。自己を外にして宇宙を説き得るものは哲學者なり、科學者なり、佛陀は學者にあらずして、學其のものなり。原理其のものなり、標本にあらずして實物其のものなり。故に佛陀の説法は、之を譬ふれば電氣

力の突つきて搖ぎ出でたるが如し、而して其の電氣に感染したるものに、自ら説明を與ふるなり。電氣を先づ感ぜざるものに説明は畢に無用なりき。洵にかの感化力は如來の偉大なる清淨なる圓明なる性格より噴湧したるもの、教法は如來の與へたる感化の事蹟の記録なり。復た衆生歸恭の允可も見るべきなり。茲にのみ説法はあり。佛陀の靈光に接せざれば説法の會席に列して如聲如盲なり。千年電氣學を講ずるも、微塵を動かすべき電氣も起らざるなり。緣なき衆生は、この靈光に接せざるものにして、爲に説法もし給はず、度し難しにして捨て給へり。

人は又た己れの嗜好以外に何物をも求めんことをあらず、如何に誨へらるゝも興味は湧かざるなり。若しくは自己の嗜好をのみ見出して他は顧慮せざるなり。軍人は法律を喜ばず、法律家は天文地理に耳を借さず、されど若しその嗜好に投ずるに臻りては、如何なる困難あるにも且つ需めて慰まざるなり。極めて低聲に拙辯に錯綜せる事實を語るにも、商人は必ず牙籌を握りて立ち、農夫は鎌を擔ふて走り、漁夫は網を乗せ航して、利潤を見出さざれば措かず。衆生は佛陀に對しても尙この性僻を主張したりき。彼等は己れの嗜好を以て佛陀に臨み觀るべき、佛陀に於いて己れの影像を發見し之に歸恭し之に歡喜したり。故に佛陀に歸恭したる彼等は、實は己れに歸恭したるなり。而して佛陀の性格は宏大無邊なれば、農夫も武夫も勝族も下賤も皆な己れの影像を見出さざるはなし。佛陀は此嗜好に藉りて衆生を拉へ、漸く導きて其の本性を琢磨せしむ。茲に如來の方便力はあり、斯くて佛陀の教化は可能なり。然れば吾人はその主張を改變せざる可らずなりぬ。則ち佛は説法し給ふなり。たゞ吾人の期



待する如く、佛陀の妙辯才も教化の具にはあらざりき。極端に謂へば教法は佛陀の脱殻なりき。脱殻を弄びて淺き深き大小半滿を諍ふ如き、迂愚にあらざれば狂なり。電氣學書を撃ちて電光を視んとするものなり。

無盡無邊の有情を拯濟したる佛陀の電光は、人類の續かん限り輝きて、衆生は畢に之を翳し能はざるなり。生を斯世に稟くるものは、其の髮膚と共に忘る可らざる所持品なり。何となれば佛陀の性格は既に吾人の性情の一部となりて、朝夕の言動に發顯しつゝあり。堂塔悉く毀滅し僧寶悉く閉居し經文渾て散逸するも、かの靈光のみは在世のその如く活躍するなり。されど吾人の理性は今の我よりも更らに大なる我を渴欲し、今の我の剩りに狭少にして不完全なるに駭きて、常に輕侮し嘲笑し罵恥し叱咤して、大發展を遂げざれば安んぜざるなり。翻つて顧みるに、今の我を作りしものは誰ぞ、若し佛教ならば佛陀は最早や恃むに足らず。若し耶蘇教ならば耶蘇は憑むに足らず。して佛陀をすら疑ふに至れり。さればさて、自ら大活眼を開いて眞理を發見するの明なく、終に懷疑となり破壊となり闇黒となり墮落となりて、大混亂に陥れり。されど理性は常に醒たり。決して盲動せず、常に向上し、新しき光明に憧がるものなり。故に佛徒は常に鮮しき光明を備へざる可からず。佛教は常に鮮しくして、かの固定したる古手にあらず。佛陀より傳承したるインスピレーションは、永久へに新鮮なり。宗教家は親しくこれを感じて又他に傳ふべきなり。講義し説教して佛教の學説を述べ世間の倫理を陳ぶる如き、抑も末技のみ。而して佛陀の靈光を最も著るしく顯揚するものは、佛陀の音容を活現するにあり。佛陀双

樹の下に隠れ給ひしより三千年なるも、其の音容は屢々發現せられたり。日蓮の法蓮八軸を捧けて辻説法したるとき、親鸞の草鞋を履みて佛名を徹誦するとき、高祖の灌頂壇にありて五鈷杵を授くるとき、鑑眞の戒壇にありて南無佛を稱ふるとき、達磨面壁し惠可門を敲くとき、天臺の文殊を問答するとき、若しくは立井の般若を負ふて異域にさすらうとき、眞如親王の虎に喫はるゝとき、覺漫の高野を逐はるゝとき、渾てこれ等の時に於いて佛陀の音容は躍如たり。衆生は新たにこの音容に接して、信念轉々深きを致す。今の人多くは修養に於いて人格に於いて、俗流に均しき水平にありて、たゞ一時を糊塗するに巧みなるを以て、世に買はれんことを、無謀にあらざれば狂暴なり。

### 道 學 先 生

此頃講義聽けるこゝにありたりき。講本に「愚者なる語あり。傍注して「愚痴人者」曰へり。講師解すらく、愚昧痴鈍の人間者流なり。予領する能はず。謂へれば、更に詳解を得たり。愚は黯愚なり、昧は朦昧なり、痴は呆痴なり、鈍は魯鈍なり、人は仁人なり、間は間隔なり、者は者物なり、流は流屬なり。かくて彼は解釋の功妙なるに矜るものゝ如く、他生は其博學なるに駭き、予はますます不可解を嘆ず。佛教はかく難しく謂ざる可らざるにや。

その講本に「若然誰傳」曰へるあり。注して「傳」の字を釋す。傳者止觀に云々、輔行に云々、珠林に云



々、弘決に云々、今華梵多の中に云々。

同じ續きに「法住、法位、性相常住」なる文あり、冠注して曰へらく、法位とは即身義の中に云々、天臺疏記に云々、性相常住とは祕藏記に云々、演奧抄に云々、かつ講師辯すらく、この外何抄に云々、何記に云々、何師謂ふ云々、引文論證、噫！博い哉、一字一句引文に次ぐに例證を以てし、釋文に次ぐに末註を以てし、末註を確かむるに末註を以てして、残すところなきなり、更に經論の本據に遡り、一一に出據を指摘し、之を羅列すれば、一段の光彩を放つならん、されど予はこの種の解釋をきゝて、得たるどころなく、かくて原文の意旨那邊に奔逸したるかを知らず、枝葉頻りに繁茂して、幹根自から隠蔽さる。

佛學する人の中にも可笑しきことあるものなり、予の知人、曾て法華玄義の試験を受く、其まきの問題に曰く、「一、何者云々、二、何者云々、五、何者云々、六、大者云々」彼解答して曰く、六大とは地水火風空の五大、第六識大となり、これ體大にして、理智の二法、兩部曼荼の實性、緣起の根本證入の極致、色心途異なり、雖、二而不二、即離不謬なり、宥快師曰く云々、長覺師曰く云々、説くまきころ頗る長し、後、六大にあらすして、「六に大は」の意なり、まき聞きて、眞面目に辯疏したり、曰く、僕の解釋常に深祕に失す、以來大に淺略に觀ざる可らず、まきかほまきに自惚れるならば、間違はなからん、勿笑、今の道學先生にして、この種の弊に墮ちざるもの幾干ぞや、これ等はたゞ著るしき一例なり、まきするも。

末師の末註を穿鑿するが故に煩瑣なり、一の矛盾を允さるるが故に牽強附會に陥るなり、偏狹なる、狷介なる尙古主義は、末法澆季の通弊ながら、一句に一席を費し、一語に半宵を消す、汗牛充棟もたゞな

らざる、百萬の佛經研究法、まきして餘りに緩慢なり、たま／＼法體を説くまき言ふも、徒らに數學的關係の理路を辿るのみ、然らずば語呂、口拍子にまかせてうねりくねる叙事にあらず、談理にあらず、素より舒情を容さざれば、語に花なく、説に熱なく、味なし、砂磔を喫むが如く、蠟を嚼むが如し、斯くても凡人を感化し得べし、まき思へるは、頗る虫のよき極みなり。

文藝社會の一隅に、一たび道學先生の稱呼の聞ゆるや、之に唱和するもの頗る夥し、學究を排斥するはよし、されど彼等のうちには、永劫の理想界を渴仰するまき稱して、その實菜の花に宿りて、短き春の假寐の夢に一期の光榮を蒐むる蝴蝶の果報を羨むものもあり、光明世界、純美世界を憧憬するまき叫びながら、その實墨繪の雲に、紅殻、紫粉、綠青なまき混和して成れる繪具もて、一刷毛掃ひてほかしたるを、電氣燈の光りに照して看るまきの、怪しげなる藝術美に心惱すものもあり、或は天使の如き佳人に、蜜の如き戀して、深き慰藉を求めつゝ、ありまき謂ふも、その實、娼婦にも劣りて、腐柿の如きものに思ひ窺ふものもあり、漫りに美、眞善理想なまきの抽象的文字を列擧する似而非詩人、兒破漢文人の空想こそ最も醜きものなれ、眞面目に學問して、人を益し、世を濟ふものを罵りて、道學先生呼ばゝりするは、片腹痛きことなり。

ネーチュアールに接觸して、之を直覺する力なきを自覺するものは、他の天才の作物を透して、之を窺はんまきす、空想を驅りて一夜に築き得る、しかし一夜に崩るゝ、宮殿を造るを羞まきし、兀々まきして、一事の後に一理を究め、一理の後に一事を起し、遅き而し確固たる研究をなすもの、眞の道學先生なり、人生に



有用の材として常に尊敬を拂はれ、且それに値するものは、この種の人なり、吾人は道學先生を嘲笑するものあるを悲む。されど飽くまで排拒せざる可らざるは、ありて益なく、無くて損なき文字訓詁の徒なり。九々算の表を誦する如くに、巧に論理的關係をませかえず學究先生なり。

## 修養の解

修養の目的は品性を砥礪して高尚なる人格を作るにあるのであるが、さて奈何にすれば理想的の人格が成きるのであらうかと言ふに、其の方法は種々にして、昔の阿羅漢たちは閑靜なる地にありて氣息の出入を數へて散亂せる心を鎮めたるもあり、墳墓の間に屍が風雨に晒されて白骨となり、手足頭骨なきの落ち散りたる哀れな状態を見て情慾の火を消すやうなこもした、復た村落に入りて食を乞ふて飢えを醫し糞雜衣を被て寒を凌ぎ、靜かに經行して罪障を亡ほすやうなこもし、或は太龍の嶽や金峰山に踏み入りて思念を凝らした人もあり、壁に面して九年間無言のまゝで座禪した人もあり、復た基督教の神祕派中にも極端なる苦行者ありて一本の棒を立てたる上に片足だちにて三十年間も神に祈つたものあり、復た徂徠なきは膽力を鍊るために雨の降る夜鬱々こ生ひ茂りたる森の中の社に至るのが例であつた、其他種々の苦行者は印度教徒回教徒の中に頗る多い、又封建時代の武者修行者なきの練鍛法も是れに類したこもをなしたのであるが、此等は孰れも精勵克己して端靚に品

性を陶冶せんとするのである、現代は斯かる方法を以て單に迷信邪道なりとして忌み嫌ふ傾きあるも、而も尙ほ今の宗教家特に佛教家の中には修養は隱遁して苦行するより他に途なきもの、如く思惟するものも尠くはないやうである。

さりながら其れ等の力行が必ずしも修養の唯一の途ならざるこも明白にして、彼等修行者の中には勿論正しき者も多かれど、今も印度の教徒の中なきに行はるゝ苦修練行には最も悲しむべき非人情的にして非因計因の邪道に陥りたるものも尠からざれば何にでも力行さへすれば其れが修養なりと惟ふは誤りである。遮莫普通の人において日常の教訓を深く感銘する時なきに最も多く修養の效を奏するのである。曾てエマルソンの論文を讀む中に「人が濫りに唾を吐くこも其の唾には吐いた人の面が映つておるから、假令人知れず吐いたこも其の非徳は匿すこも出來ぬ」と言ふやうな事があつた、めに以來處を擇ばずして唾を吐けば、自己の面が直ちに映つて公衆の前に晒らされてをるやうに感じ始めた、それから唾吐くばかりでなく、埃を捨てるにも注意するに至つたのを見るこも、一片の教訓にも品性を陶冶するに非常な力があるこもを示すのである。此頃我國に渡來し近世宗教界の成功者として世界の敬意を受けつゝある例の救世軍のブリス大將は一夜友人を散步し、圖らず或る教會堂の前に出たこも、説教最中で針の音がコチ／＼と響く度毎、世界の何處かに現世を去つて永遠に旅立つ人がある恐らく斯く言つてゐる今も其平生の罪惡のために地獄に墮ちた人があるかも知れない」と言ふ最も沈痛なる一句がブリスの腸を抉つた、救世軍の芽は茲に萌したので



ある。ナポレオン傳、クライブ傳を讀みて頓に發憤せずには居られぬ。楠氏、赤穂義士なきの物語は以て人の忠魂義膽を策勵するに餘りあり、斯くて種々の教訓は人の品性を陶冶するに資することば明かなるが、さりて此等の教訓なるものは正しき人格を作る替りに却つて往々にして狭き小さな性格の人を作る恐れあり、而して其の教訓の力が強きだけ其れだけ感化を受くる人をして狭き小さな性情に作り上げるこゝがある。例せば最も熟練なる催眠術師は最も完全に施術して被術者の精神を充分に支配するやうなものである。吐きたる唾の上に人の面の映るものなるこゝの教訓に依りて猥りに唾を吐くこゝを慎むに至りたるは可なるも、芥紙屑柑子の皮の捨て處にさへ迷ふに至りては其の局量なるこゝ既に病的にして、恠くなりては自由なる快潤なる人生を樂むこゝは能きぬであらう。一部の宗教界には恠かる病的の傾向あるこゝは掩ふべからざる事實にして斯かる病弊があればこそ宗教は今も活潑なる運動をなすこゝを妨げられてゐるのである。仁慈、節制、勇氣、温良、恭謙、讓、信仰、安心なきは非常に人を貴くするこゝのものなるに拘らず、單に孝行なる人、忠烈なる人、温良なる人、信仰を持てるこゝ言ふだけにては人として何もなく物足らぬ心地せらるゝのである。例せば暗夜を冒して一隊の閉塞船を旅順の沖に差し向けたる勇士等の胸に宿れる忠魂義膽は誰れに劣り勝りのあるべき、皆等しく國難に殉じたる義士であり、己身を省みざる勇士でありながら、獨り廣瀬中佐の死のみが世に歌はれたるは何であらうか、蓋し彼れの歌はれたるは彼れが他の勇士と同じく持てる彼れの勇氣ではなかつた、彼れの學文、經歷、高潔なる素行、文藝的才能、其他美處が他の勇士に異りた

るために彼ればかり大きく見えたからではあるまいか。復た宗教にしても同じく他力往生の信心は佛のかたより賜はる信心なれば、源空が信心も、善信が信心も異なるこゝなく、唯だ一つなる故に、一心に稱名する門徒の信心も親鸞上人の信心にも何の差別はないのであるが、單だ親鸞上人の清き生涯が最も偉大にして、彌陀の光明よりも尙ほありがたく信ぜさせたるは何故であらうか、これ上人の堅き信心の他にかの高調なる著作、其の生立の悲壯なるこゝ、比叡山に在りて廿年の研鑽、佛菩薩に禱請して法を求めたるこゝ、吉水の室に入りて念佛三昧の修習、讒奏に遭ふて北越に遠流せられたるこゝ四方に行化して荐りに法益を施したるこゝなきがなかつたなれば、上人の高徳も終に世に顯はれなうだであらう、唯だ一筋に信心に走れば、愚迷に陥り一向に強壯を索むれば、賤しき暴虎馮河の勇となり、學文にのみ局執すれば、邪見になり、道義に拘れば、狷介にして近づき難くなり、藝術なきに固執すれば、浮薄になるか、然らざれば、寡聞固陋になり、何れにしても美所の取るべきはあるも、圓滿なる人生に比すれば、哀れ不具者として見る外はなからう。

絶待的圓滿なる人格は佛菩薩より他に望む可らざるなれど、人として圓滿なる人格なりと見らるべきものは少くはない、商人は商人として圓滿なるべく、軍人は軍人として圓滿なるべく、政治家、百性それらに特殊の理想ありて、其の理想に最も近き性格を發揮する人を圓滿なる人と言ひ得るなれば、世に圓滿なる人格の人は乏しくはないのである。而して商人には商人相應の修養の道あり、軍人には軍人に相應の修養の道あり、宗教家にも其れに相當せる修養法ありて、且つ昔のまゝの道



にはあらずして新しき時代の要求に應ずる新しき修養法がなければならぬ、百性に對しても軍人に對しても宗教家に對しても皆な一樣に而して昔ながらに唯だ一筋に孝行せよ、忠義なれ、信仰せよ、仁慈なれなきの抽象的教訓を以て強ゆべきではない、斯かる徳性の強るる、までもなく或る程度まで發達したる社會にありては既に人生の先天的美質を以て傳承せる故に最早人民の性格の一部となりて、我等がパンを要し、ミルクを取らねばならぬ如く其社會に生存する限り、なくてはかなはぬ營養分として信義、忠孝、信心なきの美性を吸収しつゝ、あるのであるから、他の人と同じほごの營養分を吸収しつゝ、他の人に傑出したる偉大なる人格を作られる筈はないのである、特に偉大な人格を作るために常人よりも以上に修養の道を見出さねばならぬ。

いづれの階級の人に取りても修養の第一義諦は智識の發達である、何事をなすにも智識の指導に依らざれば正しき道を踏むことは能きぬ、假令ば如何なる善事にてもあれ、其れが何のためになるか、何故に善なるかを知らざれば善事とても一概に賞美することは能きぬ、例せば施をするは頗ぶる善事であるが、若し人ありて財囊に金さへあれば濫りに他人に與ふる如きことあらば其の施が無意味なるために施さるゝ人も決して快からず、寧ろ氣味悪く思はるゝであらう、而して施言ふことが往々人の獨立心を消耗して情弱を惹き起さしめ、阿諛追從に狎れしむる傾ありて必ずしも之を善事として見るべからず、却つて社會の公益を損することにもなるのである、復た勇士ありて一隊の部下を卒ひて單獨に夜襲を試みたるに不幸にして大敗北し、其がために敵をして却つて充分の防備をなさ

しめ、加ふるに味方は昨夜の敗北に兵數を減じて威力を損したれば、明日の總攻撃には却つて全部隊の不利益を招くことあらば彼等一隊の兵士の愛國心は云何に不忠不貞な結果を招いたであらう、愚痴無智なる宗教信徒が熱心に過ぎて祖意祖誨に悖りて果敢なき宗教狂に罹ることには屢々目睹さるゝところである、而して行爲の正しき判断は智識の充分なる發達から得らるゝのであるから、智識の發達を缺きたるものは修養の第一歩に於いて既に誤れるものであらねばならぬ、而して智識の發達と共に道徳的訓練と宗教的薰陶とを相並べて進めねばならぬ。

さりながら此等の智識や道徳や宗教なきの精神的訓練の他に身體の訓練が修養上に於いて缺ぐべからざる要素にして、精神的の訓練と同等の價値を有つてをるのである、精神的訓練の半面は身體の訓練にあるので、身體の訓練を缺ぐがために直ちに精神の修養の程度を疑はれるは少しも不條理ではなからう、品性が高ければ高きほど寒暑、風雨、飢渴、疾病、貧富なきに心を動して喜び且つ憂ふることはないのである、少しく寒ければ温袍を重ね、一刻を過ぐれば忽ち飢を愬へ、夜更ける時直ちに座睡り、日出で、後にあらずんば眠り覺めず、霜に脅え、嵐に怖れて當世ぶりを矜るのであるが、是は近代の情弱なる惡風習のしからしむるころにして、修養の工夫に就いては何の定見もなき今の社會にありては實に止むを得ぬことであるが、其の結果は太甚だ面白からぬものがあるであらう、人は極端なる克己派の人々が爲す如く、或は數日間斷食し、或は掌に燈火を燃し、或は裸體のまゝ、氷の上に臥する如き非人情的の苦行を爲すにも及ばざるべきも、或る程度までは政岡に傳せられたる仙臺の若君



や春日の局に育てられたる家光の如く峻厳なる訓練を受けねばならぬ、軍隊の軍紀の振へるは主として身體の規則正しき訓練に依ることを見れば、かの誤謬を生じ易き精神的訓練よりも此の方に於いて著るしき効果があるやうである。而して人の品性は言語の末立居の端にも明確に顯はれて匿すことは出来ないのであるから、衷に抱ける學文や、主義や、宗教なきの矜りは唯だ一言半行にして全く泥土に塗らるゝ如きこごがある。

精神の修養の他に身體の訓練あることを忘れてはならぬが、尙ほこれだけにては枯淡冷寂なるものにして秀麗なる人品を作るためには更に他の方法を見出さねばならぬ、凡て人の生涯をして最も平凡なるものたらしむるか、趣味あるものたらしむるかは唯だ藝術的の素養にあるのである。特に文藝の嗜みなきは直ちに其人の品位を褒貶するのである。假りに高僧として紳士として拙劣なる文字を書き、消息文に假字を用ゆる如きこごは非常に其の人の品位を庇付けるのである。扁額の文字を誦むこごや懸軸の繪畫を鑑賞する如きとは何にも些々たるこごではあるが尙ほ其の能不能は明白に其の人の素養如何を暴露するのである。若し數人打ち寄りて合作なごする時何等の藝を有たずして其の中に雜じらば云何に豪傑膚を粧はんごするも汗顔せざるものはなからう、荒鷺の如き項羽の生涯をして平凡ならしめず最も趣味あらしめたるものは唯不逝睡不逝兮の歌に依り、小野の小町をして千古の美人たらしめたるは彼の婉麗なる和歌に依り、清少納言に枕の草子の妙文あるあらざれば名媛として歌はれなんだのである。眞言禪宗なきの高僧の生涯から其の藝術的素養を取り除いたな

れば彼等の品位は大に劣り、而して一世の敬崇を傾けるこごは能きなんだであらう。

之を要するに修養の工夫として精神的に智識と道德と信仰とを疊き、身體の訓練と藝術的の嗜好とを忽諸にせざるなれば普通美しき人品として認めらる、而して其上に商人は商人として特殊の教育を受け、宗教家、軍人も皆専門的の訓練を経たれば其れを稱して修養ある宗教家、商人、軍人と言ふこごが能きるのである。然るに今の世には唯だ偏へに信仰を鼓吹し、信仰的生涯を送るために未徒は何等の用意もせず一躍して信仰的生活に入り、源信の如き偉大なる人格を作ろうとするのは全然早計である。楠公忠烈の效が千載の下に赫耀たるを見て楠公の智や、文藝や、道德的修養を持たずして其の忠烈をのみ眞似たりきて決して偉大なる人格は顯はれて來るのである。其の修養の徳が發揮して偏に高祖や源信の信仰となり、楠公の忠烈となりたるものにして、此等の偉人に取りてこそ信仰や忠烈は特殊の價值を以てるのであるが、凡備なるものが忽ちに斯かるものを學びて以て偉大なる人格を得やうと望んだりきて得らるゝ理はないのである。猶し鸚鵡が人の謂ふ「お早う」を學んで終に人の言語の如何なるかを知るこごが能きぬと均しいのである。

さりながら斯かる修養も人間として正しき人格を作るに足るも未だ出世間的の修養即ち佛道の修行ではない。佛道に入りて煩惱を斷じ、菩提を證するこごは佛徒の目的にして此の點から言へば世間の修養の如きは初歩でなければならぬ。さりきて是の世間的修養が出世間的修養と衝突するのでなくして世間的修養は其の第一歩である。世間にありてすら圓滿ならざる人が萬徳圓滿の佛陀を



志求すなごは頗ぶる非條理である。一村の富者になる能はざるものが一國の富豪を志す如き寧ろ滑稽なる計畫であらねばならぬ。而して今の宗教家なごが世に容れられざるは他に理由あるにあらずして世の人が宗教家を信ぜんごするには餘りに宗教家の修養の足らざるに由るのであるから、悉くの事を爲す初めに先づ自ら修めんごを期せねばならぬ。

### 新しき懺悔

今の罪ある僧たちは幸福である。眞に懺悔をする日も久しからずして來るであろう。懺悔する機会が來ればよいのである。毎月に懺悔し半月々々に罪を説いて、それで我れ眞に清淨になり得たご想ふてをる人は不幸である。形式ばかり懺悔した人眞に清淨ごなり得るであろうか。清淨ならぬに清淨なりご想ふこそ罪である。慙かる人は終に拯はるごごは能きぬ。罪を犯すよりも其罪は深い。地獄の火に燬かれても聲聞になるなご誠められたのは、罪を犯すよりも罪を説いて清淨に成つたやうに想ふものが罪の深いごごごも知れぬ。

今の僧たちは多くの罪を犯してをる。而して其れを悪いご想ふてをらぬらしい。悪いご想はずして却て佛や祖師が誤つて制裁したものごやうにいふものもをる。飲酒、姦淫、嗜肉、其の他の罪惡は人間の權利ごして犯してをる。洵に無慙無愧である。さりながら宗教家の眞の懺悔ごは此の罪の間から發芽

するのである。墮落したものは自覺すべき眞際に達してをるので、自覺ご懺悔の眞の隣りは墮落である。墮落したごごを知つたのが自覺で其處に懺悔がある。されば墮落は懺悔の縁の熟したごごも言へるであろう。幕が下りてをるから頓て次の演藝が始まるが、演藝に似た猿芝居は眞の演藝ではない。墮落は幕合で演藝の序であるが、形式的に半月に罪を説くのは猿芝居で似而非なるものである。猿芝居から眞の演藝は來ぬ。併し黒い幕の次から面白い演藝が來る。墮落に較べて儀式ばかりの懺悔は罪が深い科が重い。

佛教にも基督教にも皆な懺悔する。能く懺悔のごごを説く。懺悔せよご勸める。併しながら儀式ばかりで懺悔にならぬごごは前にていふた如くである。が宗教家は往々にして儀式だけで濟ませやうごする。實際儀式だけで濟ませてをれば其れでも濟むやうになる。己れを欺くごごが能きぬでもないが眞に墮落した人は地獄の底を破つてごも猶ほ且つ罪惡を犯そうごするほご頑強なものはない。那邊かに弱いごごがある。何時かは罪惡を自覺せずには居られぬ。深い罪過は重い悔恨を喚び起す。今の僧たちが儀式的な懺悔をせぬのは形式的な懺悔なごで償ひきれぬほごに重い罪科があるからである。憶ふに此の次には烈しい悔恨の悲傷に遭ふであろう。

基督教には我れ等を呼ぶに罪の人ごいふ。而して罪の人は懺悔をせねばならぬご誨える。然るに我れ等の犯せる罪ごはアダム、イブの昔に犯したもので、實は我れ等が直接に犯したものではない。随つて懺悔せよご迫られたごごごころが、何ごなく他處事のやうに想はれて、切實な自分の身の上のごごごは



思はぬ。我れ等は愚鈍であるから懺悔せねばならぬ。こゝは我れ等の目前の罪科でなければならぬ。昔遠劫の罪科なきは痛切に感ぜぬ。痛切に感ずるほゞ我れ等の知識は發達して居らぬ。其れを懺悔し得らるゝほゞならば我れ等も既に聖者に成つてをらねばならぬ。何故なれば本覺から迷ひ出て業相の初めの無明が成きた時の其罪過を、畑から瓜を盗んだほゞ緊切に明白に自意識して、其れを心から懺悔し得るのは高位の菩薩でなければ能きぬのである。我等には懺悔するこゝを許されてをらぬ。されば基督教徒が常に爲る懺悔なきは、眞に儀式的な形式的な面白半分な懺悔にして、神の前で神よ我れ等の罪を許し給へ、と呼ぶ聲は悲しかるべき聲に響くが、其れは聞けよがしの聲で決して腹から湧き出た哀傷の嘆ききは感ぜられぬ。懺悔の動機が餘り遠きに失して我等に達せぬからである。持律の僧の半月に説く罪の懺悔は、かれに較べるに餘程俗情に落ちたこゝろがあるが、其れも剩りに外見的なる形式一片に成つて畢ふた。戒師が斯う言ふではないか、罪あらば懺悔すべし。罪なくんば默念せよ。默念するが故に罪清淨なり。水の流れるゝ如く讀み續けて淀みがないから懺悔しようにも罪を説く餘地がない。是れは形式已上である。さりながら形式に流るゝ根源を言へば罪を懺悔するこゝいふ意味が解らぬからである。懺悔せねばならぬ。こゝいふ意味が縁遠う過ぎる。過去遠劫に我等が何であつたか、過去の罪を我等は如何に多く負ふてをるか。は知られぬが、我れ等は目前に祖師の遺誠に背いてをる。其れだけは明かである。高祖は我れ等に早く修行して佛道を成ぜよと誨えられた。然るに我れ等は修行せぬのみかは非法亂行にして些しも地獄の火を懼れぬ。高祖は絹を着ずして三衣を護持せよと命ぜ

られたが、我れ等は三衣を護持せずして却つて絹を着る。酒は飲むべからず、肉は喫ふべからず。誠められた。然るに酒を飲み肉を喫ひ、妻をさへ蓄へ富を蓄へてをるものもある。何れか祖意に背き神訓に悖らざる即ち我れ等は祖師に對しての罪人である。こゝだけは、云何に愚鈍なる我れ等にも之れを否むこゝは能きぬ。正に之れに服罪せねばならぬ。併しながら此の服罪こそ我れ等の生命である。價値のある所である。我れ等の活動力は此處から燃えるのである。

罪を犯して自ら罪人なるこゝを意識して眞に改悛を想はぬものがあるか。罪を意識せぬものが懺悔するから其れが單に形式になるのである。基督教が説くこゝろの罪や、佛典の中に教へてある罪は何んもなく我れ等に縁遠いやうに感じるが、高祖に負ふこゝろの罪だけは通るゝ。こゝの能きぬ身に着いてをるもの。憶ふ。斯の罪を想ふ。こゝに眞に慙愧に堪えられぬ。此の慙愧心から催ふされて懺悔するものである。然りながら懺悔といふこゝが單に自己の罪科を謝するばかりでない。其の罪科を償ふこゝろの勇猛なる働きがなくてはならぬ。懺悔の妙は其れである。謝罪は懺悔の半分にも足らぬ。我れ等は高祖の掟を守らずして種々の罪科を犯してをるが、さりて是れを今さら悛めて掟の如く清淨な行をするか。こゝいふこゝ頗る覺束ない。改めるこゝは能きぬが是れでは濟まぬ。濟まぬから其の罪を償ふだけの善事をせねばならぬ。濟まぬから報謝のために善事をする。せねばならぬ。こゝを自覺する。是れが眞の懺悔である。今の僧たちは實際罪を犯してをる。而して懺悔し發憤せねばならぬ。まで深い罪を犯してをる。懺悔せねばならぬ。際まで行つてをる。たゞ一轉歩して懺悔すればよいので、洵に都



合の可い地位に居る。何故に懺悔せぬか。持律の僧が半月に罪を説いて清淨に成り得るやうに易い懺悔では不可ぬ。説いて消すのではない。説かず且つ消さずして罪ある生涯は其のまゝにして續けて、其の替りに價値ある生涯を爲せよといふのである。譬へば春の花秋の紅葉を見るが、其の代りに夏の熱さ、冬の寒さ、に働くのである。花を見、月を賞翫する償ひに花を見ぬ、月を賞せぬといへば論理にも聞えが可くない。懺悔も其のやうなもの。思想は無益である。今日の僧たちが多くの罪を持つてゐて、云何に愚鈍なるものにも合點のゆくほゞ明白なる罪を持つてゐるから、此れに依つて懺悔し發憤するこそを得たなれば實に幸福なりといふのである。然るに最も惡むべきものがある。古の諺にも盗人猛々しいもので、自ら祖師の遺誡に背いて罪の人を呼ばるゝを厭ふの餘り、勝手なる理屈をつける。我れ我れの行爲は或は祖訓に悖るかも知れぬが、之れは人の自然の要求である。自然の要求に隨ふのが罪ならば、鳥が飛ぶのも魚が躍るのも罪か。是れ等も皆な自然の要求に應じたものではないか。罪にならねばこそ我れノ、ミ同じやうな事を爲た人が昔にも有つたし、經軌の中にも爾々の證據があるではないか。高祖を不明者としてまでも己れを譲り己れを妨ぎ己れの非を遂げねばならぬか。非を遂けても非を遂げるだけである。高祖の遺誡を卑むところには立派な力があるではないか。試に罪科に堪えられぬ我等をして佛前に懺悔せしめよ。

我れは遺誡に違ふて三密の妙觀を凝らすとをせず、疾く道を修して菩提の妙果に到るべきを怠

つてをる。三界の火宅を怕れず、涅槃の安樂を欣ばず、酒飲むな、肉嗜ふな、淫犯すな、の遺訓を顧みることなく、非法は林の如く滋し、實に末恐ろしい。然しながら我れ等は劣弱なる凡夫である。逆も逆も嚴峻なる祖命に服従するに堪えぬ。因より祖命のまゝに精進し得るほゞの善士も自ら信ずることは能きぬ。祖訓に對してこそは濟まぬが決して祖恩を無視するのではない。力を格して及ぶ限り、眼めて之れを償ふことを誓ふ。則ち遺教は叶はぬまでも習ふであろう。假し悉地は成ぜずとも三密の妙觀を修するこそを得ん。弟子の僧を養ふて法燈を繼がせやう。知れる限りの法を説いて人を驚かす。能ふかぎりの財を散じて餓えたるものに食はしめ、凍えたるものに着せん。

是れ我が報謝の志である。斯く懺悔し且つ誓ひ且つ行ふたなれば、かの半月に罪を説いて過なし。思想ひ清淨なり。高き上れる。何れであるか。問ふまでもない。清淨なり。思想ふものは不幸である。眞に懺悔する機會がない。今の自己を最良なる清淨なるもの。定めてをるから懺悔のさしようがない。自覺する機のない無性闍提の人である。是れほゞ憐れな人があろうか。我れ等は今の穢れたる人の前途に富みたるを祝福し、而して穢れなく清淨なりとした人を咀ふのである。

## 超 凡 之 道

鼠が小さな穴を作つて其處を出たり入つたりして居る。餅の片や紙の切れや何んでも目星しいも



のがあるを引いて来ては其穴から持込む人の足音でもするか猫の鳴き聲でも聞えるミアタッタ逃げ込んで安全に縮まつてをる。人間の一生を達観するに全然此の鼠の智慧に眞似てをるやうである。人が生れるに父母の教養を受ける。其の地方の習慣を倣ふ。風俗を學ぶ。學校の教育を受け。其の時代の精神に感化せられて方針も定まり、職業も成き、其れに相當した名譽や位地をも得れば財産も作られて、茲に一人前の人間が成きる。而して其の人々の流義、則ち個人的の性情に縁つて人格定まり、且つ理想も主義も學藝の能力も定まり、最早犬にも吠えられず牛にも踏まれず、那の點から云うても負けは取らぬやうに成る。而して父母も教師も社會も自分自身も慙く成ることを願ひ慙く成つたのを喜ぶのであるが、是れを眞向から見ると出かしたりなく、立派な鼠の穴が出来上つたので、是からは此の教育、習慣、理想、才能なきで成きた自分流義といふ小さな鼠穴へ悉てのものを引き込まうとして、竊かに穴の外なる世界を窺くのである。初めに家族を作るために、自分流義の妻を選んで且つ自分流義に適ふやうに訓練する。親をも兄弟をも親戚をも其の穴に引き込む。自分流義の穴に引き込めぬものに對して容赦は能きぬ。親は朝早く起きるが己れは朝寢である。己れの穴に這らぬので喜ばぬ。己れは朝寢でありながら他人の朝起を喜ぶ流義の者は、己れも同様に他人の朝寢を喜ばぬ。己れは學問が好きであるが兄弟は實業が好きであるから、かの穴に這らぬので其れを忌み嫌ふ。己れ學問は好きでも兄弟の學問するを好まぬ流義の者は、己れも同様に兄弟が學問するのを却つて好まぬ。奢侈華麗を流義とするものは親戚、子女の質素なるを厭ふ。己れ質素にして親戚なきの華美なるを喜ぶ流義の者は

己れも同様に質素なる親族を歓迎せぬ。友を選ぶにしてもさうで、酒好きは飲友達を求め、和歌、漢詩、繪畫なきの趣味から圍碁や文墨の趣味なきも皆な己れも同趣味のものでなければ喜ばぬ。又た同趣味のものを喜ばぬ流義の人は全く趣味を異にしてをるものを需めて交はる。其の他職業を選ぶにも居所を定めるにも食物の好みから衣服の好みから娛樂の種類から、往來の場所から、能き得る限り自分流義を發揮しやうと睨めるのである。而して又た社會も、之れを認めて能ふ限り、差向へのなき限り其の人の流義に任せ其の流義を尊重し保護し助成するのみならず、是れを個人の權利とし是れを犯さざるを以て道徳としてをる。個人の流義に干渉するものを惡とし罪せらるゝことすらもあるので、人生は自分流義の凝結したものと見て可からう。而して近代文明社會なるものを裏面から觀るに、此流義の最盛時機と言ふべきである。吾人とても強ち斯の流義が悪いといふのではないが、是れを鼠穴に譬へるだけは許しを得ねばならぬ。

斯く自分流義が全勝を得たるために、全人類がそれ／＼自分流義で以て一の型を作つてをる。而して其の型を最も大切に守つて何人が之れを犯すも許さぬ。自分自身にさへ其の型に傷を附けることを好まぬ。若し他の人が自分の流義に適はぬやうなことを教へても其れは能きぬ。さうして拒むので、勿論爲やうを試みることもせぬ。設し己れの好むことを強ふるものがあつたならば、不徳義として忿る。世人も其の怒るのを理ありさして強ふるものを罵り又た罰しさへもする。其れが爲に人は皆な此の小さな鼠穴を最も安全な場所として、其處に竊むので何人も之れを脅かさうとはせぬ。されば或人



は十時間寝るゝか、十五時間働くゝか、十里已上は歩めぬゝか、一間已上は飛べぬゝか、いふ流義もある。又た寡言なる人は言ふこゝの寡い流義を取り、多辯な人は饒舌る流義を取り、温和な人は温和なるを好し、快活な人は快活に文章を書く人の中にも繪畫を作る人の中にも、十人十種それゝゝに自分流義を追うてをる。宗教家も學者も軍人も商人も農業家も、何れも皆自分を一の鑄型の中に入れて、其れを破るこゝを好まぬ。例へば非常に手廣き繁雜な事業をしてをるものは瞬間の遊樂をも好まぬ。又た讀書に耽つてをる人は雜駁な俗事に妨げらるゝに堪へ得ぬ。同じ慈愛心に富んだ人でも、貧民に金錢を與へて喜ぶものゝ貧民を鞭撻し叱責して少しも物品を與へぬのゝ流義が違ふ。何れも己れの流義なる鑄型に入つてをる。併し其の鑄型に入つてをるのに理由がありはしないか、理が徹底してをるか居らぬか、其れを問ふ必要はない。何となれば其流義を解釋するため提供せらるゝ理由は、理由其ものが既に自分流義に成きてをるからで、自分流義に關係のない理由を持つてをるものはない。若し自分流義ならざる理由を持つて居るにしても、其れで以て矛盾した自分流義なるものゝ解釋が能きやう理がない。自己の安全を計るために、自己の幸福のために鼠には小さな穴が必要である如く、人には此の自分流義が必要にして、日常缺くこゝの能きぬものである。然るにこゝが道を需むるものゝ人生に繋がれて凡俗を超越するこゝの能きぬものゝ岐れ路である。人生に囚はれて人生の快樂を享受して満足の能きるものは自分流義でゆくのも可いが、人生に満足の成きぬものは此流義では不可ぬ。併しながら人生の趣味に傾いてをる人のために一言せねばならぬこゝがある。世には自分流義で

自己を作り、社會を作り、趣味を需めて、其れに相當した利益もあり、名譽もあり、趣味もあるのであるから、今の位地や利益や名譽に對して不足を言うてはならぬ。不満であつてはならぬ。己れ小官吏の位地に嫌らずして大臣を求め宰相を求めても駄目である。小農は大農を夢みてはならぬ。小商店は大商館を想うてはならぬ。今の位地、今の名譽、今の利益は自分流義で作り出したものに外ならぬので、己れに不満なるものは己れに背く自分流義の謀反人である。慙かる得手勝手な不平者に同情を寄せるこゝは決して能きぬ。

然るに眞に人生に不満で、今の小官吏の位地を大臣宰相に引き上げらるゝこゝも、小農が一朝に大農になるも小商估が大商估に轉換さるゝも、要するに職業の尊卑や利益の大小や、名譽の高下ではなく、あらゆる人事に不満で、此の俗惡なる凡世を超越しやうこゝ想うたならば、奈何してもかの自分流義を廢めるより他に途はなからう。

例へばこゝに三間の幅の深い溝がある。從來の經驗に依るゝ自分には一間已上の距離ある所は飛ぶこゝが能きぬ。然るに三間幅の溝を飛んだならば、溝の中央に陥ちて水に溺れるかも知れぬ。其れで身體を念ふ者は之れを飛び越すこゝは廢めるであらう。是れが自分流義である。設し亦た此の自分流義の意氣地なきに憤慨して、飛び果うせるか果うせぬか、其れを問題にせずして、始めから飛び得られぬこゝを定めてをる自分流義の人もある。而して負傷するかも知れぬ所をも飛び超ゑる人もある。是れが皆自己を破るのである。曾ては二十貫の物を擔いだこゝはない。又擔けるこゝも想はぬから廢めるであ



らう。是れが自分流義である。然るに肩が痛むことも棒が碎けることも地から離すことは能きぬと定つてを つても、右も左も擔いで肩の痛みや棒の碎けるのを顧みぬのは自分流義を破るのである。予れには聲がないので、逆も謳ふことは能きぬとして歌ふことを廢めるのは自分流義である。予れに文質がないから、逆も謳ふことを繪畫の趣味がないから、逆もあらん限りに謳ひ、字才なくとも書き、趣味なくとも描き、弱くとも歩き、而して其結果の如何を顧みざるは自分流義を破るのである。多忙なる事業に追はれて寸陰を吝むもの、風月を友として俗事を厭ふもの、亦た自分流義である。寸陰を吝む事業を戴いて一日の遊樂を試みるのも、風月を分れて一時俗事に従ふのも、自分流義を破るのである。酒を飲むを眞に罪惡と想うて飲まぬもの、園基なきの勝負を罪惡と想うて爲さざるものは自分流義であるが、設し其の人が酒を飲み勝負を争うたならば、自分流義を破るのである。敵に讎を酬ゆるも、恩人に恩を酬ゆるも、侮りを防ぐも、恥を雪ぐも、眞理を主張するも、悪人を感化するも、皆自分流義であるが、若し一圖に斯くせねばならぬといふことを捨てたならば、直ちに自己を破ることも能き。然るに何事にも人は自分流義を破ることは困難で、苦痛を感じることも強いのである。而して自分流義を守つてをるものには自己を破ることも不利益で、危険で、罪惡ではあるまいかとも考へらるゝ。然り多くの場合は自己のために不利益で危険である。他から見たならば罪惡を犯してをるやうに見えるかも知れん。併し自分流義の最も尊まれる時代に於ては成功は覺束ない。失敗は或は必然の結果とし

て來るかも知れん。一間より以上は飛び得ぬものが三間幅の溝を飛んで水に陥りて溺れるか、向ふ側の岸に打ちあて、負傷するかは明かなる事實である。さすれば世の非難も受けやう。或は神の噴射も蒙るであらう。

然しながら自分流義を破り自己を破るものは快苦の情に動かされてはならぬ。快苦を豫想して進退するのは尙ほ自分流義に陥つてをるからである。小さな檻に自己が囚はれてをるので、人は其檻を破らねばならぬ。鼠の小さき穴を塞いで廣き家に出ねばならぬやうなものである。小さい自己を破つて大きな自己を作るので、自己が破れれば破れるだけ自己は大きく成る。佛説の斷煩惱は此の意味に於て價值があるのであらう。自分の理想も主義も性欲も習慣も嗜好も乃至は身體の事情も、皆な自分流義で造つてをるのであるから、今の自己から一步でも向上し發展しやうと思つたならば善にもあれ悪にもあれ自分流義を破るより外に途がない。此れを破りさへすれば自己に一段の進境がある。而して之れを破ることもが大なれば大なるだけに進境も大きい。小なれば小なるだけである。併し人は常に自分流義にのみ固執して少しも自己を破らぬかといふ。さうではない。寧ろ人は無意識の中に常に自己を破らん。ミ努めてをるのを認める。自己を破ることは決して無い空想ではない。有る事實である。多くある中に一例を擧げて見れば、貧しき人の神佛に祈誓して幸福を求めたり、病みたる人の平癒を求めたり、其他の心願をかける如きも、哀れなる自己破壊の要請者である。自己の運命の拙きを知り悲愴なるに鑿き、遣る瀬なきに到つたとき自分流義のものは其れに威壓せられて、自ら屈するか



或は自から棄てるのであるが、自分流義を破りたくさきりて自らを破り得る力を有たぬものは神や佛に走つて、其力に依つて自からを破らんを努めるのである。祈禱や加持を要請するのは自分流義を破らんを努めるのが適當であらう。自己を破る手段としては拙劣であるかも知れんが、其努力は大に観るべきものがあらう。激しい嵐が吹くとき、雪が積つて寒氣が厳しいとき、眞夏の暑熱に堪へられぬとき、動かぬ歩けぬといふは自分流義を破らぬのである。寒中に富士山へ登つて見やうとするのは自己を破るのである。蟹煙の地に行くときを肯かぬ地の兩極なきに往くべきでないといふは自分流義である。往ける所まで船を進めて見やうとするのは自己を破るのである。釋尊が王位を捨て、王宮を捨て諸慾を捨てたのや、高祖が深山幽谷に攀ぢて觀誦し、海を渡つて法を求められたのは、大に自己を破らんを努めた跡さも見ることができやう。其れに些細なる自我や主張や習慣や慾情を捨て得ずして却つて其れを擴張しやうを努めるのは、愚か然らざれば暴である。近代の倫理學者のいふ自我の實現さか自己の擴張さかといふ意味は、此の自分流義の破壊の意味であらねばならぬ。自分流義の現實や擴張であるならば、其れは囚はれた罪人が繋かれた檻の中で荒れ狂ふやうなものである。其れで此倫理觀は倫理觀から出立して一轉して哲學觀を成してをるから、人生を究極の目的とする倫理觀としては或は、其の結論は遠きに往き過ぎてをるかと思はれる。

## 器 物 の 力

上

京都の四條通で店頭飾つてあるのを見て偶然思ひついて需めて來た岐阜提燈に火を點して櫓端に吊るしてをいた。事實はたゞ其れだけであるが、さて暑苦しい夕風の習なみの風もない靜かなうちに薄闇い光りを放つてをる光景は何も解らぬところに涼しい爽やかな心地がする。斯の涼しい爽やかな心地で何もはなく眺めてをれば自然に我が信ずる宗教物の其の處を得れば神祕なる威力を以て我をも人も宇宙の大をも動かさし得るといふ宗教の意味が活躍して來るのを覺える。

斯の提燈は斯の室に於ける主人公である。我は我を没して餘念なく斯れに喜ばされて柔順なる臣屬が慈愛に富める君主に侍して飽かぬ物語りに打興じてをる状態であらう。なれども君主には君主の威嚴があつて其れを犯すことはできぬ。我れも此の光景の中に在りて我が意を張つたところで如何なる我儘が能きやうか。

躍るにしても歌ふにしても斯の下では此の光景に相應した踊り謳ひをせねばならぬ。それでもたゞ提燈の威嚴を謳歌し讚嘆するだけのものであつて些しも我意のまゝなるを許されてをらぬでないか。況して此の提燈の吊るされてをる限りは他處から其の下へ集つて來る人の勝手氣儘にはさせぬ。何人が來やふとも皆な此の光景に同化せねばなるまい。其れは主人公に服従したのである。提燈



に明りの點いてをる間は盗人なきは關を跨けるこも能きぬ。百萬の猛者を帥ひて大將軍が來ても打破つて通るこもはならぬ。恰も金城鐵壁の構へをして敵に供へてをるほきの嚴めしさである。何故に愆く威嚴が成きたかといふこ。

第一に之れで斯の室にきまりがつくのである。下には書籍や筆紙が落ち散らばつてをつても櫓に提燈のあるかぎりは斯の室は備へが整ふてをるからである。備が整ふてをるこ隙間がない。隙間のないといふこは怕ろしいもので如何に。近寄らうこしても近づくこは能きぬ。

劍道に達した人が竹刀を構へるこ更に太刀の打込みこがない。氣合の調ふてをる禪僧には楯突こが能きぬやうなもので物の整ふてをるこには間隙があるやうにして狙ふこは困難である。其の譯で櫓に提燈が點くこ妙に備へが整ふのである。

其れにきまりのついた形は美しいものである。花の美はしい匂ひは自然に蝶や蜂を喚び寄せる力があつて蝶や蜂は花に愛せられるがために我れを没して花に往く。靡ろ氣なる提燈の光りや形には其れこ確かに認め難きこころに物を魅するだけの美しさが宿つてをる。美はしい花には抵抗するものがない。村雲や嵐のさそうのも花が悪くらしいまでに慕はしいからで之れを抵抗者破壊者こ嘆ずるのは花の末路を哀んで雲や嵐の心を知らぬもの、過ちであるこ想はれる。雲も嵐も花の美にこそ荒ぶるのである。美しい提燈には何物が抵抗するこが能きやうか。

復た利害を没してをるこころにも力がある。利害得失は敵味方の分れる初めで其れを超越したな

らば敵もない味方もない。提燈に利害や敵味方のあらう筈がないから何人の爲に點けたでもなく點けたりして爲にする考もない。徒らに點けるかそうでもない。慰みかそうでもない。神に祭るでもない。佛に供養するのでもない。無意味かそうでもない。理由はないかそうでもない。悉ての問題を絶してをる。君主が其徳則ち利害を絶して其位に居るから貴ぶといふのである。何か爲にするこころがあつて立てられた君主があるならば其の目的さへ畢れば用はない。利害の外に立つものが永久に君主である。提燈は其の徳を備へてをる。

中

愆くして櫓端に吊るした提燈のあるために其室が生きて活躍してをる。随つて其の一家には自然に生氣が盈ち充ちてをる。生氣の盈ちてをるこころには平和の氣がある。安樂の情が充ちみちて進取の銳氣が動いてをる。富貴の瑞祥が發してをる。他人を懐柔する力がある。怨敵を退散させる勢がある。長壽の福相も現はれてをる。たゞ譯もない提燈に斯んな深い理のあるやうには想はれぬが其れは我れに其れを見出す明がないからである。併しながら提燈ばかりが此の威力を有つてをるこいふのは勿論ない。床の間に生花を挿したこも人形なき飾つたこも皆な同じである。柱の懸け花生けに花を挿したこも庭に打水したこも庭の燈籠に火の點火つたこもさうである。立關先きに青蘭の大鉢植や棕梠竹の鉢植を据へてをるこ見るからに其の家に犯すべからざる威嚴を添へてをる。懸額を見付に上げたのも、床に軸物を懸けたのも、單に體裁や飾りこいふだけではない。そんな單純なもので



はなく何れも深い意味を持つて強い力が働いてをるのであるが、何物も識らずして斯くするもの斯くするのが習いであるから位に心得て何の意味をも看出そうもせぬ。

随つて斯かる事を粗略にするのであるが、其れはかの愛度き吉祥を壊るのである。何故にかゝる些細なる器物に神祕な力があるか謂ふまでもなく是等は皆な三摩耶形であるからである。輪寶には修羅や魔天の所有敵を悉く打ち砕く猛威がある。錫杖の音には魑魅も散じ慳貪を壊り不信者をも動かす力がある。三は經説にも明かである。三鉢杵、五鉢杵、寶幢、幡蓋にも皆な其れに功徳を有つてをる。其の如來の三摩耶形は別の物ではない。提燈も置物も花も草木も皆な其れに功徳を有つてをる。である。三摩耶形は特に如來の持物として作つたのではない。世にあるほゞの三摩耶形の中で適當なものを選んで如來が所持せらるゝのである。如來が持ち物にせられたから三摩耶形に成つたのではない。而して三摩耶形に威力のある所以に到つては自ら別に説明を要するのであるが左も右も威力のあることは定である。是れから來てをるのであるから、人間の用ゆる三摩耶形、謂ひ換ゆれば人間の理想である。三ころの平和、慈愛、高貴、怡悦、長壽、進取なごから人間は是れ等の三摩耶を選んだのであるから其れに其の意味が動いてをらねばならぬのである。提燈や鈴や花生や燈籠にかの吉瑞が動かぬ譯がない。人間の理想其のものが變じて其れになつたのであるから、恰も修法をするまきに阿字あり變じて寶珠なるまきふがそれである。其れも同じ徹に人間の理想が變じて是れ等の物もなつたので、人は是れを持つこゝを喜び斯れを持つてば其れに吉祥があるべき理である。持たぬもの

は己れの理想を捨てるもので自然に人間の理想から外れるので随つて不祥の事も其處に發するのである。人が理想のまゝに往かんこするには理想の凝結して成きた三摩耶形を離さぬやうにせねばならぬのである。ロマンチックの英雄は其の居室の所有の修飾を撤して何物も止めず凍して犯すこゝの成きぬ威風を有つてをる人もあるが、彼も其の刀劍のみは離すこゝは能きぬ。彼れは一門の即ち武勇といふ一徳を以て悉てを覆ふこゝであるから他の三摩耶形は何物も要らぬが己れの一門の三摩耶形、理想の形は奈何にしても離すこゝは能きぬ。劔がなくば鐵扇、鐵扇がなくば木頭、何にかは持つ。何れにしても彼は武勇一門の人であるから他に何に物も要らぬだけであつて、我々は一門に限つてをらぬ限りは種々の物が喜ばしいのである。斯れをしも單に修飾や物好きとして却けるこゝが能きやうか。假令へ却けても何にか一物は要る。其の一物をも却ける人は終に人としての三昧を捨てたもので、人間の理想を喜ばぬ人である。人ではなくなつた人である。

下

神棚に燈明の上げてないのも、佛壇に花の枯れてをるのも、障子の破れてをるのも、塵埃りに埋まつてをる戸の開き閉ぢせぬのも、屋根の瓦に草木の茂つてをるのも、瓦の落ちたるのも、傾いた塙や壊れた石垣、土壁を打ち捨てゝあるのも、庭に枯木を置いてあるのも草の蔓つてをるのも何れも皆衰滅の相を成してをる。直覺的に家の運命や人の禍福を判断する對象となるのは悉く是れで、直覺力も雖も對象なしには來るのである。佳良なる光景が人を善良に導き和樂を與へ富貴に導き敢爲ならしめる



力を有つてをる。其の點から云ふにそれ等は天使である。が之れに反して醜惡なる光景は人を魔道に誘惑するところの悪魔で實に怖ろしき力を以て人を陥れやうとする。而して人は其れに冒されざるを得ぬであらう。世に理想の破れた人ほき怖ろしい人はない。而して其の終結の悲惨なところは嘘へんかたがない。其の場には外から見ても何か悪魔が付いて居て絲でも引いてをりはせぬかと思はる。ばかり怪しんである。實際理想即ち人として持つべき三摩耶形を打ち破つたのであるから、破れた三摩耶形は一々に悪魔に成る。而して其れが怖ろしい魔力を振ひ起して來るので決して破れたまゝでは濟まぬ。障子の破れからは悪魔が窺ふてをる。生へた草の芽は鬼の角である。少くも斯かる機會に不時の災厄がある。行きかけたところは失敗に終る。何れも悪魔のつけ込み易い時であるからである。

今吊るしてある提燈も焼けるか壊れるかして尙繕ひもせず拾て、置けば、今までの慈しき此の室の主人公は直ちに此の室此の家を支配する悪魔になつて、平和の代りに混亂を呼び、愛樂の代りに怨苦を招き、進取の代りに破壊を富貴の代りに貧賤を、長壽の代りに天命を起して、悉てが我れに向ふて怨敵となるであらう。其の結末は己れも怨敵に降服して悪魔の群に入り世を損じ人を疵つけて喜ぶに到るであらう。其怖ろしい道程の初めは破れ提燈からである。是れは譬喩ではない事實である。何れにしても所有ものが初めは天使の慈しみを有ち、次には悪魔に變化する性質を有つてをるのである。而して天地の大も魔の一筋も其の力に於いてさらに甲乙なく、同一の力を以て働いてをるのである。

であるから少しも油断がならぬ。此の岐阜提燈を見てつくづく、そう想ふて見るに、些やかな器物ではあるが戦慄するほき怖いものであると思ふ。

## 天意と人事

古聖の語に人事を盡して天の命を待つと謂ふところがある。人之を解して人間は力の迫る限りを盡して迫らざるに到つて過むべきである。其れ以上は天委せ運委せで結果が悪しからうが良からうが人間の關り知らざるどころである。人は人力の迫る限りに於いて責任はあるが迫らざるに到つては責任を通る。ところが能きる、例令へば楠家三代の一族が南朝の爲めに人事のあらん限りを盡した。而して其の結果は時利あらず天運の奈何もする能はざるに到つて亡んだのであるから、後世の史家會て楠家を惜んだものはない。義烈の木鐸として永く光彩を放つてをる。則ち人力の限りを盡して天の運に委せたのであるから楠家は最後まで一點の非難するところもないとするのである。是れは要するに人力と天意とは無干渉なりとする前提から來て居るのであるが、古聖の語が果して其の意味であつたか否やは實は古今時を隔つるに迫りかたして窺ふべからずせねばならぬ。何んになれば此の語の如きも其の他の語と同様に奈何様にも解するところが能きるからである。

天意と人力之れが那邊までも無干渉であらうか古の聖人賢人は天意と人事とを一つに見てをつ



たやうである。大旱があつたり大洪水があつたり大疫病があつたりしたならば是れを天運として、他處に見るこゝもなく皆な自身の不徳の格すこころとして、身を以て其れ等の災咎を攘ふこゝは胆めた、之れが全く無意味なこゝであらうか。

聖人ミ賢人ミは云何なる處に相違があるのであらうか。云ふミ賢人は天ミ人ミ相通して人事から天意に暢達した人である。人事に於いて有る限りの力を盡し而して天意が之れに續いて隨ふのである。聖人は人事を盡し而して天が之れに自ら和順するのである。人事から天意に通した人であるから聖人には希望がある則ち禱りがある人事につゞいて天意を附する途は禱りである。聖人の御禱りも自ら種々なるべく或は雨を禱るこゝもあらう。火を禱るこゝもあらう。或は安寧を禱るこゝもあらう。而して禱るこゝは天意を降だす唯一の途である。人事は禱りに於いては來らぬ。人事は什麼しても働くので働きが人事の最極の途である。而して働くこゝから天意に續くこゝは能きぬ。禱らずこゝも神や護らんとでは神に達しては居らん。聖人の道ではなくして人事の外に天意を觀て人事ミ天意ミを引き離して、人力は終に天意には達せぬものミ諦めをつけた人の上のこゝであるから、人事から天意に繋がつて其れが那邊ミ云ふ結び目もなしに人間の底から天上の裏まで衝き抜けたミは謂はれぬ。何日々々は何處其處へ往かねばならぬ。云ふ時不慮の天災があつたり止むを得ぬ故障が出來たりしては人事未だ天意に達せぬのである。我に敵する悪人あり彼が我を害する前に彼が亡びざるは我の未だ天意に達せぬからで、天道之れを奈何ミもする能はず。云ふは固より凡夫の痴言にして憐れ

は此處にあるのである。

日本の國體が皇統連絡ミして三千年の古るき時代から彌榮え榮えさせらるゝは天祐じやミ云ふ是れも賢者以下の智見で天意ミ人事ミを一つに考へ得た人の言ふこゝではない。天祐ミ謂ふミ人事を盡した上に人事ミは無干涉の天意が天の任意に據つて日本國に獨り幸したやうであるが之れも決して天ミ人ミ繋がつては居らぬ。日本國民の聖意が人事を盡し人事から衝き抜けて天意を降して茲に到つたのであるから、日本國民は國民ミして聖意を有つて居つたので其の聖意が人から天意に相通往來して一貫したものである。依然國民の人事ミ言ふ程のこゝであつて寧ろ天祐なき、言ふのは國民が皆な我を侮つてをるのである。或は愚かなる學者なきの案出した説論であつて其れを無意味に繼承して此の語を濫用するのである。人事から繋かつて天意の裏から生へぬけて居らぬものならば何んで斯う言ふ風に往けるであらうぞ。ジュヂヤの國民がメシアを需めて其の信仰が凝結したものがクリストである。言ふ。洵に西洋の學者の主張は聖意を窺ふに足るものミ謂はねばならぬ。賢者は天意ミ人事ミが一聯に成らぬ然しながら人事の限りを盡すのである。現代の文化は正に其れである。人事に關しては那邊までも力を盡すが天意には更らに關らぬ。隨つて人事の迨ぶ限りに於いては皆な責任を明かにして天意に關はるに到つて人力の迨ばざる處ミして更らに賞せられも罰せられもせず。天意が與かつてをる。言ふ。却つて其の人の效業が安く聞える傾がある。而して其の效業を安くせんが爲めに天祐である。ミ強く謂ふ。天祐は謙遜する爲に必要な言葉であるかのやうに



想ふてをる、例令へば日本海の海戦は其の天候なり何なりが都合良かつたが爲めに大捷利を博したが之れ全く天祐で人事にては寔に其の僅かなる部分が與かつてをる言ふこゝを屢次聞くが天祐言ふ語を聞く毎に大將軍は己れの效に矜らずして天祐言ふ之れ謙遜の語なりとして喜ぶ、而して又た實際謙遜の意味であつたではあらうが、設しも此の天祐言ふこゝが人事から迫んで動き降つたところの天意言ふ意味であつたら云何に大きかつたであらう、而して云何に矜りの言葉であつたであらう、人事から一聯して天意に相通往來して來つた天祐言ふは實に斯くの如き場合に來るものであるが是の天意言ふ人事言ふが脉絡してをるこゝは天意をぞくくする程浸染しみじみ感ずる聖人にして知るこゝが能きる、賢人は此の人事天意の一聯を單だ事の成行して其れ以上に進むこゝの能きぬものである、二者の相違間隔は茲にあるのである、然しながら天意言ふ人事言ふの一貫は聖人言ふ賢者言ふ凡夫言ふが云何様に解釋爲やうとも其れは關するこゝろでない、愚者が太陽の遠近大小方圓を論じて居る間にも光を發射し熱を放射して居るとは少しも違はぬが様に人事言ふ天意言ふが相通往來して居る、而して其の事實は何人の目にも疑ふこゝの能きぬやう確かである、凡夫が天祐言ふ想ふやうな事件は人事を盡した時天意が通る、こゝの能きぬ要件言ふして降つて來て人事に應じたのである、聖人は意識して天意を降すこゝが能きる則ち禱つて之れを降す言ふ時に手應へがある、自分の手や足や眼を動かす言ふ同じやうな手應へがなくてはならぬ、手應へがなく、又た隨つて禱る心にもならぬ、然しながら人事に於いて力の限りを盡すのが賢人である。

然らば聖人は何故に禱つて人事の助けを爲ぬか、聖人にも時には人事の不足を歎ずるこゝがあるのか、孔子も幾度か憾軻不遇を歎ぜられた高祖も智泉法師の死を悼むこゝの何んぞ切なる言疑へば疑へぬでもないが、元來聖者言ふ凡夫言ふでは人生觀なきが全く異つてをる、凡夫が幸福言ふところ強ちに聖人は幸福言ふ見ぬ、聖人の需めるこゝろは決して凡夫言ふ同じやうには往かん、凡夫は一向に金言名譽言ふがあらば幸福なる生涯言ふであらうが、聖人は金言名譽言ふを強ちに咀ひもせぬが其が又た二なき幸福の資糧言ふも想はぬ、與へよ言喚ぶ人の懐から取り上げて悲しませるこゝもあらう、助けよ言呼ぶ人を陥して殺し、往かしめよ言迫る人を止めて苦しましむる事もあらう、勿論與へよ助けよ言かしめよ言の願のまゝに應ずるこゝもあらうし、一様に一つ蓮華に言は遣らぬこゝろに無限の慈悲がある、聖人の歎き言凡夫の歎き言は固より一様でない、凡夫が聖人の跡を見て己れの意に引き比べて聖人も我等言相去るこゝ遠からず言するこゝは能きぬ、聖人の幸福言凡夫の幸福言其れが何んで一つであらうぞ、魚は水中に住みてこそ幸福である陸に住みて何んで幸福言云はれやう、人は陸の空氣中に棲みてこそ幸福なるに水中に魚言俱に住むこゝが何んで幸福言云はれやう、が魚言人言鳥言獸言各々見る處に隨つて異なるかやうに幸福の標準が異ふてをるから、幸福を與ふるこゝを本願とする聖人であるにしても凡夫の希望の通りに來るか來ぬか其れは分らぬ。

人事を盡して天命を待つ言云ふこゝが只運に任せる言云ふほゞのこゝであつたならば夫れは聖人の言言しては聞かれぬ任せぬのである、天の命が降るこゝを餘義なくするのである、是非來ねばな



らぬのである。而して其の天の命は突然來るのではない。人事を盡して後に來るものなるを知らねばならぬ。其して人事を云ふことが又た天意に依らねば來るものではない。天意を知らずして人事のみ頼らんとして頼ることは能きぬ。人事の意味を縮少すればするほき天意の範圍が廣くなり、天意の意味を廣くすればする程人事の領分狹まつて來る。何處までが天意であるか、人間業で定めらるゝものではない。是れを定めやうとするのが凡夫である。我は人事から一貫して相通往來する天意を一聯にすることが眞言の阿闍梨であらうと思ふ。

### 安心なき信仰

曾て知己の人々を雑談の折柄意にもなき事ながら偶然口訛らして信仰と安心とは一つでないやうのこみを謂ふた事があつた。ところが人々は異口同音に其の非理なるこみを主張せられた。固より深き思案も根據もなくして出そこねたといふ調子で出た説であるから、自信を反證するといふ程の勇氣もなく、面目を失ふて引き下つたのであつた。爾來幾星霜を経たる今は何故に其の様のこみを考へたのか、那邊から想ひついたのであつたか、其れすら明かならぬのであるが、一度出た思想は恐ろしいもので胸の何處かに其の時のひらめきが薫ぶつて居るものと見えて、むざむざ消すとが克きずして、時たま信仰と安心とは一つでないといふ喚び聲が地獄の底からでも聞えて來るかの様に

響くのである。随つて其れが一つであるといふ人の説を打ち壊そうと思ふ考へは勿論ないが、想ふて見れば自分の考にも多少の理由のないこみはないといへやう。

強いて理由を附け加へるやうではあるが、安心と信仰とが一つであるか別のものであるか、其れは觀る人の立場によるので、一つとするも二つとするも無い事ではあるまい。他力門に入つて彌陀の慈悲に攝取せらるゝ時は信仰の外に安心はないので、一つといふのが當然であるが、自力門が少くも彌陀の本願に打ち委せてをらぬところの我々に取りては安心と信仰とは別のものとなるのであらう。一つといふのが他力門から來るので二つといふのは自力門から來るものと想はれる。何故なれば彌陀の大願を信するこみ我等は彌陀に攝取せられてをるこみを知るので、其の時さながらに末來往生を樂むところの大安心が成就するのである。彼等から見れば大安心のなき信仰といふやうなもの、譬へば匂ひなき花の如きもので、野に咲いた自然のものではあるまい。また此の安心なくして信仰といふものがあるならば、其れは光りなき月の如きもので、何らの意味をもなさぬであらう。是れは寔に明白なこみで二つを別のものを見たのは誤りであつた。然るに我々は左様な信仰や安心と行き方が根底に於いて異ふてをつたのであるから、二つの話が合はなんだのは之れも止むを得んこみであつたらうと思ふ。

我等の信仰は生佛不二である。凡身即佛である。死生一如である。而して我等は虚空を藏して無量の財寶は此の中に充實してをる。其の藏の所有主であるから、財寶も靈藥も綺縵も名譽も位地も何に



も彼も入用に應じて取り出して来るこゝが能きるこゝいふ信仰を持つてをる。此の信仰は固い、金剛よりも更らに固くして何人にも何物にも壊されも砕かれもせぬのである。こゝ憶ふてをる。而して時折は例の藏の中から分相應な寶を取り出して其の要件を足してをるので會つて不自由を感じたこゝは無い。若し需める人があらば齊しく其の藏の寶を出して與へるにも事缺かぬ。是れほごの慥かな實驗的な信仰を有つてをるのであるから直ちに大安心が來そうなるものであるが、其れはまだ少しも來ぬ。何時此の信仰が壊されるやら判らぬ。こゝいふ不安な念が起るこゝいふのではないが、たゞ譯もなく遽かに暗黒な奈落の底へ落ち込んだやうな不安や、此の信仰は我等の自由にはならぬのでなからうか。こゝ云ふ不安や、來て見ねば分らぬ。あてにはならぬ。こゝいふ不安や、種々な不安が伴ふのである。が此の不安を感じるに付てはまた種々の理由もあるのである。が是れ一つは信が決定してをらぬからで、確かに一時間の後には歸つて來るこゝいふて出た而して歸らねば他處へは行き場所のない母親が出て往つた後で實際歸つて來るであらうか。我々を棄て、餘國へでも往つて畢ひは爲はせぬか。こゝ兒等が案じて感ずる不安の念は馬鹿らしいものであるが、其れほご確かな歸りを疑ふこゝ同じほごに確かな事實が來るであらうか。來ぬであらうかを案ずる不安は堪え難いもので、其の堪え難い併しながら馬鹿らしい不安を感じるのは事實である。二つには言ふまでもなく此の信仰は身分不相應な爲めで、此の信仰を振り廻はしても更らに構はんまでに修養が足つてをつたならば、信仰に一致した安心も來るのであらうが、其の域に達せずして一方のみが進むのであるから、他は踵いて來るこゝが能き

ぬのであらう。併し我等は最初から何んの修養もなくして此の信仰を與えられるので有から、寧ろ何んの疑ふてか、れば深入りをする理もなく、信仰のために不安や苦痛を感じるこゝもなく、右も左もして他の方向へ向ふのであつたであらうか。正直に往くものには是非も此の不安を感じる陥し穴を踏まずに過ぐるこゝは能きぬであらう。ざりて信が決定せぬからこゝて此より他に途がない。こゝすれば實は他の方向を需めるこゝいふこゝも能きず。否やが應でも其の恐ろしい途を歩まねばならぬ。また身分相應な信仰こゝいはれても其れでも捨てるこゝも能きぬ。是より外に途はない。奈何に廻り道をして手頃な信仰を得るこゝがあるにしても、畢りには依然こゝへ歸つて來ねばならぬ。こゝ想ふこゝ廻り途をするこゝも能きぬ。強い不安を感じたこゝで其處で喰いついてをらねばならぬ。

此の信仰に來るもの、うちで我等凡夫ばかりが此の不安を感じるのであらうか。信決定した大士は必ず大安心を得て信仰こゝ安心こゝが離れるやうなこゝがないであらうか。高位の菩薩方ならば此の信仰は身分相應な信仰と謂へるのであらうか。自分の外のこゝの判らぬ自分に取りては何んこゝも斷定するこゝは能きぬ。が然し古徳方にしても此の信仰の偉大なる爲めに不安を感じた例は幾干もある。自然會場に於ける大薩埵達も雖も吽の一字に累せられて酔へるが如く不安を感じて驚き迷ふた事がある。大日如來の瑞相を見てさへ一會の大家は寧ろ不安を感じたでないか。大安心大怡悦は大日如來にして初めて成就するこゝで、其れまでは常に誰れも、不安を感じねばならぬのである。安心は而して最後の大安心は佛陀にのみあるもので、其れまでは信仰のみがあつて小安心のみが其の